

主要地方道志布志福山線（志布志道路）改築事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

<sup>み</sup>見 <sup>かえり</sup>帰 <sup>い</sup>遺 <sup>せき</sup>跡

（志布志市志布志町）

2021年1月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

# 序 文

この報告書は、主要地方道志布志福山線（志布志道路）改築事業に伴って、平成25年度及び平成30年度に実施した志布志市志布志町に所在する見帰遺跡の発掘調査の記録です。

見帰遺跡は、志布志湾から北に約3 km内陸に入った台地縁辺部に位置します。都城志布志道路と東九州自動車道が交差する場所であり、西側の隣接地も平成28年度に公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターによって調査が行われました。

本遺跡からは、旧石器時代から近代にかけての遺構や遺物が発見されました。特に縄文時代中期の落とし穴群や縄文時代後期の溝状遺構（道跡）の発見は注目され、大隅半島における当時の人々の生活を考える上で、重要な資料を提供してくれました。

本報告書が、県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

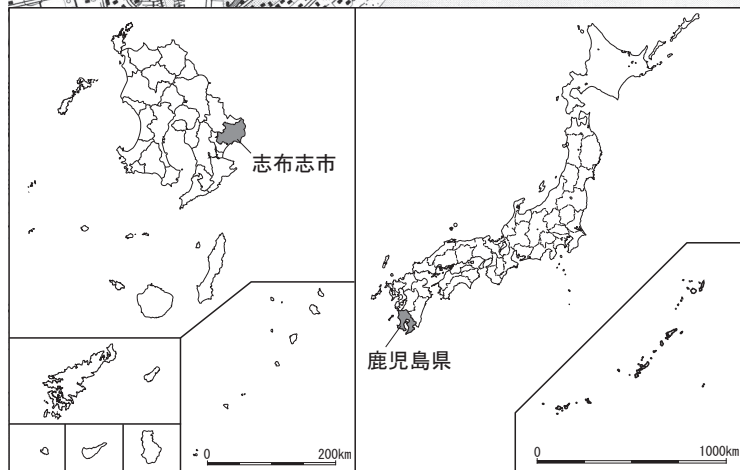
最後に、調査にあたり御協力をいただいた、県土木部道路建設課、志布志市教育委員会、関係各機関及び発掘調査・整理作業に従事された方々に厚くお礼を申し上げます。

令和3年1月

鹿児島県立埋蔵文化財センター  
所 長 前 迫 亮 一

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	みかえりいせき							
書名	見帰遺跡							
副書名	主要地方道志布志福山線（志布志道路）改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	206							
編集者名	藤島伸一郎・上浦麻矢・株式会社パスコ（池畑耕一・関口昌和・関口真由美）							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL 0995-48-5811							
発行年月	2021年1月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
みかえりいせき 見帰遺跡	かごしまけん 鹿児島県 しぶし 志布志市 しぶしちやう 志布志町 しぶし 志布志 あざみかえり 字見帰	46221	221-513	31° 29' 26"	130° 05' 06"	2013.04.22～ 2013.09.27  2018.12.03～ 2019.01.29	2,850㎡	主要地方道志布志福山線（志布志道路）改築事業に伴う記録保存
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
見帰遺跡	散布地	旧石器時代 細石刃 文化期			磨石、敲石			
		縄文時代 早期	集石遺構1基 土坑10基		吉田式土器、下剥峯式土器、縄文系土器、打製石鏃、石核			
		縄文時代 中期	土坑1基 落とし穴3基		打製石鏃、石皿			
		縄文時代 後期	溝状遺構1条		岩崎上層式土器、丸尾式土器、辛川式土器、納屋向タイプ、西平式土器、中岳Ⅱ式土器、石匙、石錐、打製石斧、磨石、敲石		溝状遺構は道跡と考えられる	
		弥生時代 早期・後期			突帯文土器、高付式土器			
		近世以降	土坑2基 溝状遺構1条 硬化面		薩摩焼			
要約	<p>見帰遺跡は旧石器時代から近代までの遺跡だが、主体となるのは縄文時代後期である。縄文時代早期は下剥峯式土器などととも集石遺構・土坑が検出されている。縄文時代中期の落とし穴が3基検出されており、東九州自動車道建設に伴う調査で検出された5基と併せて配置が目される。</p> <p>縄文時代後期では道跡と考えられる溝状遺構が目される。東九州自動車道建設に伴う調査区でも検出されており、谷に向かって続いている可能性がある。溝状遺構から出土した丸尾式土器・西平式土器などの一括資料は後期後半の共伴関係をみるうえで貴重である。</p>							



第1図 遺跡位置図

# 例 言

- 1 本書は、主要地方道志布志福山線（志布志道路）改築事業に伴う見帰遺跡発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県志布志市志布志町志布志字見帰に所在する。
- 3 発掘調査は、鹿児島県土木部道路建設課から鹿児島県教育委員会が依頼を受け、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」）が担当した。
- 4 発掘調査は、平成25年度と平成30年度に埋文センターが実施した。
- 5 平成30年度は、発掘調査業務を新和技術コンサルタント株式会社へ委託し、埋文センターの指揮・監督のもとに調査を行った。
- 6 整理作業・報告書作成作業は、令和元年度に埋文センターが実施した。
- 7 整理作業及び報告書作成作業を株式会社パスコへ委託し、埋文センターの指揮・監督のもとに実施した。
- 8 遺構図・遺物分布図の作成及びトレース、出土遺物の実測・拓本・トレースは株式会社パスコが行った。なお、報告書の作成にはAdobe社製「InDesignCC」、  
「IllustratorCC」、  
「PhotoshopCC」を使用した。
- 9 出土遺物の写真撮影は、埋文センターの写場にて、西園勝彦と鮫島えりなが行った。
- 10 本報告に係る自然科学分析は、放射性炭素年代測定を株式会社加速器分析研究所へ委託した。
- 11 執筆担当は以下のとおりである。  
第1章，第2章第3節，第3章  
藤島伸一郎・上浦麻矢  
第4章第2～4・6節 遺構 藤島伸一郎  
第6章 藤島伸一郎・上浦麻矢  
第2章第1・2節，第4章第2・4・5節 土器  
池畑耕一・関口真由美  
第4章第1節，第2～4節 石器  
関口昌和  
第5章は委託業者の納品原稿をもとに藤島が編集した。

- 12 使用した土色は『新版 標準土色帳』（2013農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づく。
- 13 本書で用いたレベル数値は、海拔絶対高度である。
- 14 本書で使用した方位は、すべて座標北（G. N.）であり、測量座標は国土座標系第Ⅱ系を基準としている。
- 15 遺構種別ごとに略記号を付して調査を行った。遺構の略記号を次に示す。  
SS：集石遺構 SK：土坑 SD：溝状遺構
- 16 遺構の縮尺は次を基本とした。  
集石1/20，土坑1/20，落とし穴1/20  
溝状遺構・硬化面1/30・1/60・1/120
- 17 掲載遺物の縮尺は次を基本とした。  
土器・土製品1/3，石器1/1～1/3  
各図中にスケールを示してある。
- 18 掲載土器の拓本を表裏とも貼付の場合、表面が左、裏面が右に配置してある。
- 19 掲載遺物番号はすべて通し番号であり、本文、挿図、表及び図版の番号は一致する。
- 20 観察表中の胎土は次のとおりである。  
白石・茶石・黄白石・灰石：その色を呈する小礫  
黒石：黒色を呈する小礫もしくは黒色の鉱物  
長石：主に白色の角張ったもの  
雲母：主に金色を呈する薄い板状のもの  
石英：透明度が高くガラス質の光沢をもつ  
火山ガラスも一部含まれる
- 21 本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は埋文センターで保管し、展示・活用を図る予定である。なお、遺物注記等で用いた遺跡記号は「ミカエ」である。

# 本文目次

序文

報告書抄録

例言

目次

第1章 発掘調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 試掘調査	1
第3節 確認調査	2
第4節 本調査	2
第5節 整理作業・報告書作成作業	3
第2章 遺跡の位置と環境	5
第1節 地理・地質的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3節 都城志布志道路建設に伴う県内の遺跡	11
第3章 調査の方法と層序	14
第1節 調査の方法	14
第2節 層序	14
第4章 調査の成果	20
第1節 旧石器時代の調査	20
第2節 縄文時代早期の調査	22
第3節 縄文時代中期の調査	29
第4節 縄文時代後期の調査	34
第5節 弥生時代以降の遺物	48
第6節 時期不明の遺構	52
第5章 自然科学分析	54
放射性炭素年代測定（AMS測定）	54
第6章 総括	56
第1節 旧石器時代	56
第2節 縄文時代早期	56
第3節 縄文時代中期	56
第4節 縄文時代後期	57

# 挿図目次

第1図 遺跡位置図		第8図 土層断面図（2）	18
第2図 調査範囲図	1	第9図 土層断面図（3）	19
第3図 周辺の遺跡	8	第10図 旧石器時代の調査範囲と石器分布図	20
第4図 都城志布志道路建設に伴う県内の遺跡	13	第11図 F-5区の石器垂直分布図	20
第5図 調査範囲及びグリッド配置図	15	第12図 旧石器時代の石器	21
第6図 基本土層柱状図	16	第13図 縄文時代早期の遺構配置図	22
第7図 土層断面図（1）	17	第14図 集石遺構と出土土器	23

第15図	土坑1号～4号	24	第32図	溝状遺構1号出土土器(4)	40
第16図	土坑5号～10号	25	第33図	溝状遺構1号出土土器(5)	
第17図	縄文時代早期の遺物分布図	26		と出土石器	41
第18図	縄文時代早期の土器	27	第34図	縄文時代後期の土器・土製品分布図	42
第19図	縄文時代早期の石器	28	第35図	縄文時代後期の土器(1)	43
第20図	縄文時代中期の遺構配置図		第36図	縄文時代後期の土器(2)	44
	及び石器分布図	29	第37図	縄文時代後期の土器(3)	45
第21図	土坑11号	30	第38図	縄文時代後期の土器(4)	46
第22図	落とし穴1号・2号	31	第39図	縄文時代後期の石器分布図	47
第23図	落とし穴3号	32	第40図	縄文時代後期の石器	47
第24図	縄文時代中期の石器	33	第41図	弥生時代以降の土器・土製品	48
第25図	縄文時代後期の遺構配置図	34	第42図	時期不明の遺構配置図	52
第26図	溝状遺構1号合成図	34	第43図	土坑12号	52
第27図	溝状遺構1号	35	第44図	土坑13号・溝状遺構2号と	
第28図	溝状遺構1号遺物出土状況	36		出土遺物・硬化面	53
第29図	溝状遺構1号出土土器(1)	37	第45図	暦年較正年代グラフ(参考)	55
第30図	溝状遺構1号出土土器(2)	38	第46図	縄文時代中期遺構配置図(調セ分含む)	57
第31図	溝状遺構1号出土土器(3)	39	第47図	見帰遺跡の溝状遺構想定図	58

## 表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧表	9	第11表	溝状遺構1号出土石器観察表	49
第2表	都城志布志道路に係る鹿児島県内の遺跡	11	第12表	縄文時代後期土器観察表	50
第3表	旧石器時代石器観察表	21	第13表	縄文時代後期円盤形土製品観察表	51
第4表	縄文時代早期の集石遺構出土土器観察表	23	第14表	縄文時代後期石器観察表	51
第5表	遺構番号振替表	29	第15表	弥生時代以降土器観察表	51
第6表	縄文時代早期の土器観察表	33	第16表	溝状遺構2号出土遺物観察表	53
第7表	縄文時代早期の石器観察表	33	第17表	放射性炭素年代測定結果( $\delta^{13}\text{C}$ 補正值)	55
第8表	縄文時代中期の石器観察表	33	第18表	放射性炭素年代測定結果( $\delta^{13}\text{C}$ 未補正值,	
第9表	溝状遺構1号出土土器観察表	48		暦年較正用 $^{14}\text{C}$ 年代, 較正年代)	55
第10表	溝状遺構1号出土円盤形土製品観察表	49	第19表	縄文時代中期 遺構の大きさの推定	56
			第20表	縄文時代 道跡の類例	59

## 図 版 目 次

本文中写真1	調査風景	4	図版6	旧石器時代の石器・縄文時代早期の土器	66
本文中写真2	G-13区東壁土層断面	16	図版7	縄文時代後期の溝状遺構1号出土土器(1)	67
図版1	調査風景・遺物出土状況		図版8	縄文時代後期の溝状遺構1号出土土器(2)	68
	縄文時代早期の遺構	61	図版9	縄文時代後期の溝状遺構1号出土土器(3)	69
図版2	縄文時代早期の土坑	62	図版10	縄文時代後期の土器	
図版3	縄文時代中期の土坑・落とし穴	63	図版11	縄文時代後期及び弥生時代以降の土器・土製品	70
図版4	縄文時代中期の落とし穴・時期不明遺構	64			
図版5	縄文時代後期の溝状遺構1号	65	図版12	縄文時代の石器	71

# 第1章 発掘調査の経過

## 第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取扱いについて協議し、諸開発との調整を図ってきた。

この事前協議制に基づき、鹿児島県土木部道路建設課（以下、道路建設課）は、主要地方道志布志福山線（志布志道路）改築事業に先立って、事業対象地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下、県文化財課）に照会した。

この計画に伴い県文化財課は、平成18年度に志布志市内の埋蔵文化財分布調査を実施し、事業区域内に船迫遺跡・高吉B遺跡・宇都上遺跡・稲荷迫遺跡・後迫（下原）遺跡・見帰遺跡等が所在することが判明した。

この結果をもとに、道路建設課・県文化財課・県立埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）の三者で協議した結果、対象地域内における遺跡の範囲と性格を把握するために当該地域において試掘調査を実施することとした。

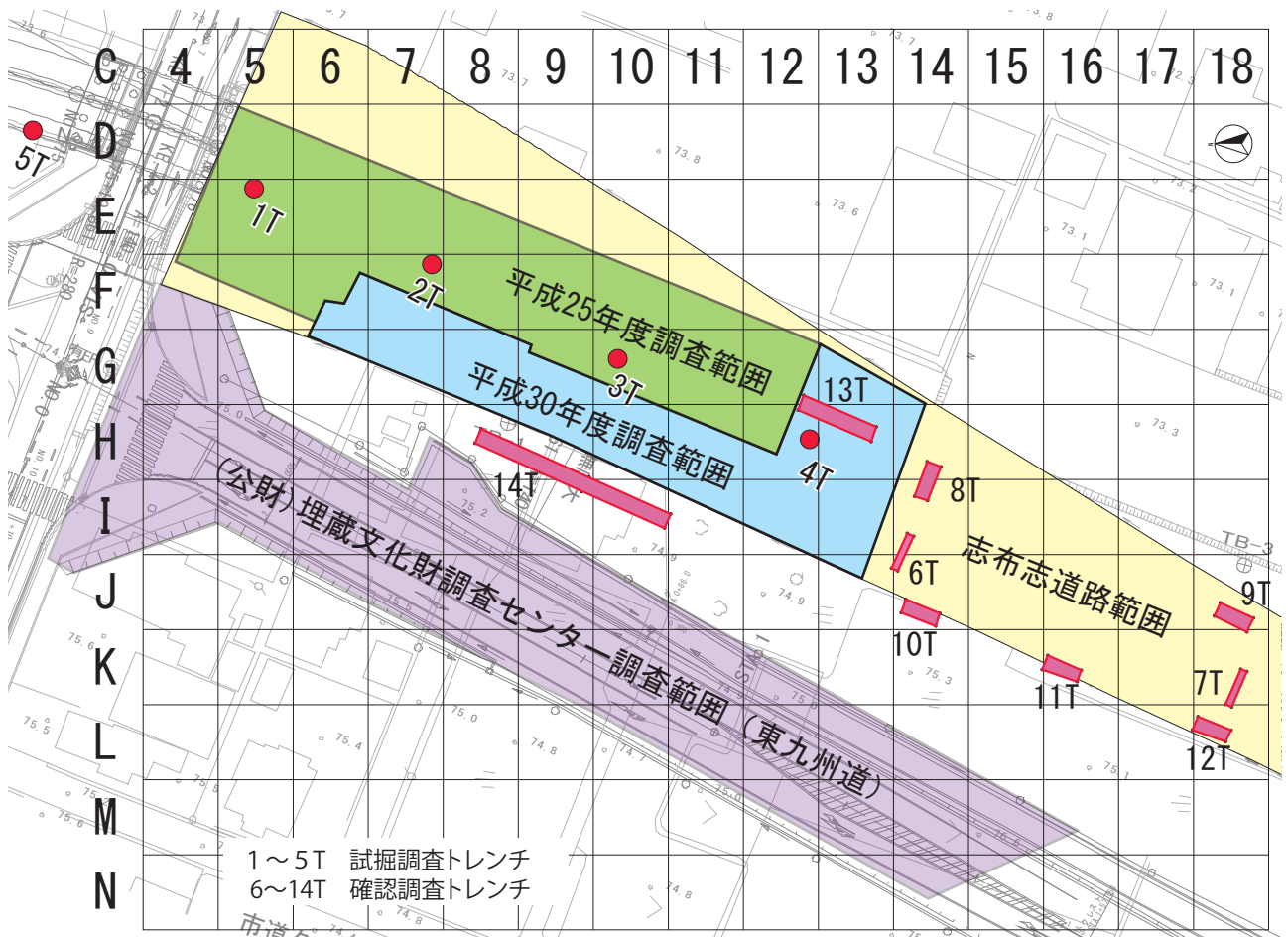
## 第2節 試掘調査

### 1 調査の概要

試掘調査は県文化財課が埋文センター及び志布志市教育委員会の協力を得て、平成25年2月1日に実施した。5か所のトレンチを設置し（第2図参照）、その結果、1～3のトレンチで旧石器時代や縄文時代の遺物包含層を確認した。この調査結果をふまえ、旧石器時代の調査対象面積を1,300㎡、縄文時代の調査対象面積を5,200㎡、合計6,500㎡とした。調査体制については以下のとおりである。

### 2 調査体制

調査主体	鹿児島県教育委員会
調査者	鹿児島県教育庁文化財課
文化財主事	馬籠 亮道
	鹿児島県立埋蔵文化財センター
文化財主事	岡本 貢一
調査協力者	志布志市教育委員会生涯学習課
	主任主査 大窪 祥晃



第2図 調査範囲図



### 第3節 確認調査

#### 1 調査の概要

平成25年度の本調査実施後、平成29年度に新たに用地取得された部分を中心に、6～14Tの9か所のトレンチを設定し（第2図参照）、確認調査を実施した。その結果、調査対象範囲南側に遺構・遺物等の広がりは見られないことが確認された。また14Tにおいて、平成25年度に検出された溝状遺構1号の延長部が検出され、（公財）埋蔵文化財調査センター（以下、調査センター）調査箇所（西側の東九州道部分）の溝状遺構1号までつながることが想定された。調査期間は平成29年9月4日（月）～平成29年9月28日（木）（実働14日）で、調査体制は以下のとおりである。

#### 2 調査体制

事業主体 鹿児島県教育委員会（文化財課）  
調査主体 鹿児島県教育委員会  
調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
所 長 堂込 秀人  
調査企画 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
次長兼調査課長 大久保浩二  
総務課長 高田 浩  
第一調査係長 中村 和美  
調査担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
文化財主事 池田裕一郎  
文化財主事 樋之口隆志  
事務担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
主 事 丸野 将輝

### 第4節 確認調査

#### 1 調査の概要

試掘・確認調査の結果をふまえ、遺跡の取り扱いについて県文化財課、道路建設課、埋文センターの三者で協議し、遺跡の現地保存が困難であることから、本調査を実施することとなった。

平成25年度は用地取得の終了部分で実施され、新たに追加した旧石器時代の延面積240㎡を加えた表面積1,700㎡、延面積4,250㎡を対象として調査した。調査期間は平成25年4月22日（月）～平成25年9月27日（金）（実働85日）である。

平成30年度は、埋文センターが発掘調査の円滑かつ効率化を図るため「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査（民間委託）実施要綱」に基づき、民間会社へ発掘調査の業務委託を行い実施した。調査範囲は、平成25年度未調査部分の表面積1,150㎡、延面積2,540㎡である。調査期間は平成30年12月3日（月）～平成31年1月29日（火）（実働27日）である。

各年度の調査範囲は第2図を参照されたい。また、調

査体制は以下のとおりである。

#### 2 調査体制

##### 平成25年度

事業主体 鹿児島県土木部道路建設課  
調査主体 鹿児島県教育委員会  
企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課  
調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
所 長 井ノ上秀文  
調査企画 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
次長兼総務課長 新小田 穰  
調査課長 堂込 秀人  
第一調査係長 東 和幸  
調査担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
文化財主事 楸田 岳志  
文化財主事 武安 雅之  
事務担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
主幹兼総務係長 有馬 博文  
主 査 下堂 蘭晴美

##### 平成30年度

事業主体 鹿児島県土木部道路建設課  
調査主体 鹿児島県教育委員会  
企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課  
調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
所 長 堂込 秀人  
調査企画 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
次長兼総務課長 大久保浩二  
総務課長 高田 浩  
第一調査係長 中村 和美  
調査担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
文化財主事 藤島伸一郎  
事務担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
総務係長 草水美穂子  
現地指導 南九州縄文研究会会長 新東 晃一

#### 3 発掘調査の民間委託

平成30年度の発掘調査実施にあたり、埋文センターは「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査（民間委託）実施要綱」に基づき、新和技術コンサルタント株式会社へ宇都上遺跡の発掘調査と共に業務委託を行った。なお、埋文センターの文化財主事1名が監督職員として常駐し、調査方法及び業務内容に係わる統括・指揮・調整を行った。委託内容等は以下のとおりである。

委託先 新和技術コンサルタント株式会社  
委託名 宇都上遺跡・見帰遺跡の発掘調査業務委託  
委託期間 平成30年5月21日～平成31年3月20日  
（宇都上遺跡の調査期間（5～11月）を含む）  
調査期間 平成30年12月3日～平成31年1月29日

委託内容 発掘調査業務 1式  
測量業務 1式  
土工業務 1式  
担当者 主任技術者 井之上公裕  
主任調査員 新福 深  
調査員 賦句 博隆  
調査員 新納 弘恵  
技術者 鎌田 公平  
技術者 上川路直光  
検査 完成検査 平成31年3月8日  
(完成検査は宇都上遺跡を含む)

#### 4 調査の経過

発掘調査の経過については、日誌抄を月ごとに集約して記載する。

##### 平成25年度

4月

表土掘削，環境整備，D～F-6～9区Ⅱ層調査

5月

D～F-6～9区Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ層調査・Ⅳb層上面コンタ図作成，土坑11・12号調査，溝状遺構2号調査，硬化面調査，土層断面実測，遺物取り上げ，旧石器確認1・2トレンチ内Ⅸ～Ⅺ層調査

6月

D～F-6～9区Ⅶ層調査，Ⅷ層上面コンタ図作成，E～H-9～12区表土掘削，Ⅱ～Ⅳ層調査，土坑7～9・13号調査，落とし穴1・2号調査，3～5トレンチⅨ～Ⅺ層調査，土層断面実測，遺物取り上げ

7月

E～H-9～12区Ⅱ～Ⅳ及びⅥ・Ⅶ層調査，Ⅳb層上面コンタ図作成，土坑10号調査，溝状遺構2号調査，1・4・5トレンチⅨ～Ⅺ層調査，土層断面実測，遺物取り上げ

申良商業高等学校生徒3名職場体験学習

8月

E～H-9～12区Ⅵ・Ⅶ層調査，Ⅷ層上面コンタ図作成，D～F-5～7区表土掘削，Ⅱ～Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ層調査，Ⅷ層上面コンタ図作成，土坑1～6号調査，落とし穴1～2号調査，土層断面実測，遺物取り上げ

埋蔵文化財専門職員養成講座（中級講座）実施

9月

E～F-4～6区Ⅶ層及びⅨ～Ⅺ層調査，Ⅷ層上面コンタ図作成，F・G-9～12区Ⅶ層調査，Ⅷ層上面コンタ図作成，7～9トレンチⅨ～Ⅺ層調査，土層断面実測，遺物取り上げ，現場養生，調査終了

##### 平成30年度（民間委託）

12月

環境整備，G～I-12～14区表土掘削，Ⅱ～Ⅶ層調査，

Ⅳb層及びⅧa層上面コンタ図作成，F～H-6～8区表土掘削，V～Ⅶ層調査，G～I-9～12区表土掘削，Ⅱ～Ⅳ層調査，遺構（溝状遺構1号，落とし穴3号）検出・実測，遺物取り上げ，H～J-12・13区表土掘削，Ⅶ層調査，Ⅷa層上面コンタ図作成，土層断面実測

1月

G～I-8～14区Ⅶ層調査，Ⅷa層上面コンタ図作成，F～H-6～8区Ⅶ層調査，Ⅷa層上面コンタ図作成，Ⅸ～Ⅺ層調査，Ⅺ層上面コンタ図作成，G～I-9～12区遺構（溝状遺構1号，落とし穴3号）実測，遺物取り上げ，Ⅷa層上面コンタ図作成，土層断面実測，調査終了

2月 遺物収納・環境整備，写真等成果物整理

3月 完成検査

#### 第5節 整理作業・報告書作成作業

##### 1 整理作業・報告書作成作業の組織

本報告書に伴う整理作業・報告書作成作業は，令和元年度に「鹿児島県埋蔵文化財整理作業及び報告書作成作業（民間委託）実施要綱」に基づき，株式会社パスコへ，宇都上遺跡とともに整理作業及び報告書作成作業業務の委託を行った。令和2年度は，前年度分のチェックや見直し等を含めた印刷・製本業務を行った。

整理作業・報告書作成作業に関する調査体制は以下のとおりである。

##### 2 調査体制

###### 令和元年度

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長	前迫 亮一
作成企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター
次長兼総務課長	野間口 誠
調査課長	中村 和美
第二調査係長	三垣 恵一
作成担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター
文化財主事	藤島伸一郎
事務担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター
主幹兼総務係長	草水美穂子

###### 令和2年度

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長	前迫 亮一
作成企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター

次長兼総務課長 野間口 誠  
調査課長 中村 和美  
第一調査係長 三垣 恵一  
作成担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
文化財主事 上浦 麻矢  
事務担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
主幹兼総務係長 山下 勝史

### 3 整理作業及び報告書作成作業業務の委託

令和元年度の整理作業及び報告書作成作業業務の委託内容については、以下のとおりである。

委託先 株式会社パスコ鹿児島支店  
委託名 宇都上遺跡・見帰遺跡の整理作業・報告書作成作業業務委託  
委託期間 令和元年5月13日～令和2年3月13日  
(宇都上遺跡の整理作業期間(5～11月)を含む)  
作業期間 令和元年11月25日～令和2年2月28日  
委託内容 整理作業業務 1式  
報告書作成作業業務 1式  
担当者 主任調査員 池畑 耕一  
調査員 関口 昌和  
調査員 関口真由美  
調査員 鈴木 敏中

### 4 整理作業の経過

整理作業の経過については、月ごとに集約して記載する。

#### 令和元年度(民間委託)

11月

遺物水洗い・注記・分類・接合、図面整理

12月

土器分類・接合・実測・拓本・トレース, 石器実測・トレース, 遺構図・トレース, 土層断面図作成・トレース, 原稿執筆

1月

土器実測・拓本・トレース, 石器実測・トレース, 遺構図トレース編集, 原稿執筆, 観察表・遺物台帳作成

2月

土器トレース, 原稿執筆, 遺構・遺物レイアウト図作成, 遺物写真撮影, 観察表作成, 遺物等収納

3月

完成検査

報告書作成指導委員会

2月6日

調査課長ほか7名

報告書作成検討委員会

2月10日

所長ほか7名

令和2年度

4月

原稿確認, 遺物確認

5月

原稿確認, 遺物確認

6月

類例調査, 文献確認

7月

土器実測, トレース

8月

石器実測, トレース, 原稿執筆

9月

原稿執筆

報告書作成指導委員会

6月3日, 8月4日

調査課長ほか7名

報告書作成検討委員会

9月15日

所長ほか4名



写真1 調査風景

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理・地質的環境

見帰遺跡は志布志市志布志町志布志字見帰に所在する。志布志市は大隅半島の南東部に位置する。北は曾於市、東から北東は宮崎県都城市・串間市、南は曾於郡大崎町、西は曾於市・大崎町と接し、南側は志布志湾に面している。志布志市は志布志・有明・松山の3町が合併して成立し、志布志町は東北部に位置する。

大隅半島の地形は、南北方向に走る山地、その間の丘陵、台地及び低地などで構成される。東側の山地は、志布志湾北部から宮崎県に突出した形で北から南へと延びる鰐塚山地である。西側の山地は北部の霧島火山の分脈から南部の高隈山地へと連なっている。

地質は大部分が新世代古第三紀の日南層群を基盤とし、その上に鹿児島湾口にある阿多カルデラの火砕流、湾奥にある始良カルデラの入戸火砕流などが堆積し、丘陵や台地が広く分布するシラス地形となっている。さらにその上は鬼界カルデラ・開聞岳・池田・霧島山系・桜島などの火山噴出物でおおわれている。

火砕流堆積物は、大小の河川で開析されて谷を形成し、河川は合流し、西側は鹿児島湾へ、東側は志布志湾に注いでいる。西側へ注ぐ河川は山地が海に迫っているため距離が短い、東側へは長い川が多い。東側は北から安楽川・菱田川・持留川・肝属川などがある。下流には肝属平野などの平野が形成され、志布志湾岸には幅が1～1.5kmの砂丘が約16kmに延びている。

志布志町は東側を鰐塚山地が囲み、そこから北・西に台地が延び、南側は志布志湾に面している。台地を河川が分断しているが、小河川は次第に合流し、北から前川・安楽川・菱田川となって志布志湾に注いでいる。志布志港は現在、関西との間に旅客フェリーが就航し、同時に東南アジアなどとの物流交易拠点港だが、古くは都城や大隅半島中央部など内陸部からの物産交流港だった。

見帰遺跡は志布志湾から直線距離約2.5kmの安楽川左岸台地端近く、標高約75mの台地上に立地している。以前は丘陵地だったが、土地改良によって平坦になっているため、古い地層が削平を受けている場所もある。安楽川は北東側から流れてくるが、遺跡近くで北側から流れている高下谷川・尾野見川と合流し、深い峡谷となる。ここから、大きくS字状に蛇行しながら6km先の河口へ向かっている。遺跡のある大迫台地（標高70～80m）東端は急崖をなして低地へ落ち、低地と海の間は商店街になっている。現在の海岸線は埋め立てで沖へ延びているが、古くは台地が海岸線と接していた。

台地中央を主要地方道志布志福山線が横切っており、

かつて台地西下の低地から高下谷川に沿って国鉄志布志線が走っていたが、昭和62年に廃線となった。

### 第2節 歴史的環境

大隅半島北部の曾於市・志布志市は『縄文銀座』と呼ばれるほど縄文時代の遺跡が多い。それに反し、弥生時代以降になると遺跡数は減少する。これは山地や台地が広く、低地が少ないという地形が影響しているものと思われる。安楽川流域沿いには、稲荷迫遺跡・高吉B遺跡・中原（曲瀬）遺跡など多くの遺跡があり、旧石器時代～中世の遺構・遺物が確認されている。また、近年は都城・志布志道路や東九州自動車道路建設に先立つ調査で多くの遺構・遺物が発見されている。

#### 旧石器時代

遺跡数は少ない。見帰遺跡ではナイフ形石器文化期のナイフ形石器・磨石・敲石などと、細石刃文化期の細石刃・磨石・敲石・台石が出土している。

ナイフ形石器文化期では稲荷迫遺跡で剥片尖頭器、高吉B遺跡で三稜尖頭器が出土し、それぞれ礫群1基が検出されている。

細石刃文化期の石器は稲荷迫・中原（曲瀬）・次五遺跡などで出土している。次五遺跡で細石刃核を含むブロックが検出されているが、それぞれで石材の違いがみられる。次五遺跡・中原（曲瀬）遺跡の細石刃核は畦原タイプである。曲瀬遺跡のやや北にある下原遺跡でも礫群や細石刃核などが発見されている。

#### 縄文時代

前川・安楽川沿いには連綿として縄文時代の遺跡が多く存在している。草創期の遺跡として、曲瀬遺跡では有舌尖頭器が採集され、安楽小牧B遺跡では隆帯土器などが出土している。志布志町内ではほかに隆帯土器期の舟形石組遺構や炭化ドングリのはいった貯蔵穴が検出された東黒土田遺跡や、集石炉の検出された鎌石橋遺跡などがある。

早期の遺跡は多く、安楽川流域には見帰遺跡のほかに宇都上・高吉B・下原・下原B・稲荷上・稲荷迫・柳・蓑輪・小迫上・弓場ケ尾・島廻・曲瀬・大渡B・百堂穴など多くの遺跡がある。見帰遺跡では石坂式・下剥峯式・押型土器や、打製石鏃・磨石・敲石などの石器が出土した。下原・稲荷迫・高吉B・弓場ケ尾遺跡などでは前半の集落跡が検出されている。下原遺跡では前平式・加栗山式・吉田式・石坂式・下剥峯式・桑ノ丸式・押型文・苦浜式土器などとともに堅穴住居跡・集石遺構・土坑・埋設土器等が検出されている。ほかに磨製石鏃・打製石鏃・磨製石斧・打製石斧・磨石・敲石などの

石器も出土している。稲荷迫遺跡では加栗山式・吉田式・石坂式土器などとともに集石遺構64基・連穴土坑3基・土坑2基などが検出されている。ほかに岩本式・倉園B式・手向山式・平椀式・塞ノ神Aa式などの土器と、打製石鏃・削器・石槍・磨製石斧などの石器も出土している。高吉B遺跡では岩本式・前平式・石坂式土器とともに集石遺構141基・連穴土坑4基・土坑8基・土器埋設遺構1基などが検出されているが、連穴土坑の中から石坂式土器が出土しており、連穴土坑の下限を示すうえで重要である。弓場ケ尾遺跡では加栗山式・吉田式・石坂式土器などとともに堅穴状遺構2軒・集石遺構4基・土坑6基が検出され、打製石斧・石皿・磨石も出土している。稲荷上遺跡では塞ノ神Aa式・平椀式土器とともに集石遺構3基が検出されているが、耳栓状土製品・打製石斧も出土している。船迫遺跡では下剥峯式土器とともに打製石鏃・磨石・敲石などが出土している。炭床遺跡では塞ノ神A式土器とともに集石遺構3基が検出されている。

前期から中期にかけては遺跡数が少なくなる。前期では、百堂穴や鳥居下・別府（石踊）・船磯遺跡などの遺跡で轟式・曾畑式土器が出土している。中期も、見帰遺跡では落とし穴と思われる土坑5基と打製石鏃が発見され、他には高吉B・中原（曲瀬）・船磯・志布志城跡・高濱遺跡で深浦式土器などが出土している程度である。

後期では、中原（曲瀬）遺跡で中期末から後期前半の阿高系土器・岩崎下層式・南福寺式・指宿式土器などが多く出土し、磨消縄文土器や、疑似縄文土器なども含まれている。特に瀬戸内の福田KⅡ式土器の完形品や中津式・彦崎KⅠ式・津雲A式土器などの出土は文化の伝播・交流を考える上で貴重である。このほか松山式・市来式土器なども出土している。石器では打製石鏃や石槍・石匙などがみられないのに対し、石錘465点・土錘1点が出土しているのは、生業を考える上で興味深い。他に磨製石斧・打製石斧・敲石・磨石・石皿が出土している。円盤形土製品が1081点、円盤形石製品が18点出土しているのも用途が分からないが興味深い。勾玉・生殖器形・凹面形などの軽石製品も出土している。見帰遺跡では市来式・納曾式・辛川式・西平式・丸尾式・中岳Ⅱ式土器とともに磨石・敲石・石錘・円盤形土製品などが出土している。山角B遺跡では中岳式土器とともに集石遺構が検出され、西平式土器・打製石鏃も出土している。船迫遺跡では中岳Ⅱ式土器・打製石鏃・磨石・敲石・軽石製品などとともに落とし穴2基が検出されている。稲荷迫遺跡で土坑11基が検出され、市来式・丸尾式・北久根山式・中岳Ⅱ式土器などが出土している。宮脇遺跡では市来式土器、炭床遺跡では西平式土器・中岳式土器・打製石鏃、安良遺跡では中岳式土器が出土している。

晩期の遺跡も多いが、規模は小さい。稲荷上遺跡で上加世田式・入佐式・黒川式土器とともに土坑3基が発見されている。稲荷迫遺跡で上加世田式・入佐式・夜臼式土器などとともに打製石鏃・石槍・石匙・石錘・削器・搔器・楔形石器・穿孔具・砥石・磨製石斧・打製石斧・礫器・石皿・磨石・敲石・凹石・石錘など多種の石器が出土し、孔列文土器も多い。山角B・炭床遺跡では黒川式・刻目突帯文土器・打製石斧が出土し、山角B遺跡では磨製石斧・勾玉も出土している。小迫・飛渡遺跡では黒川式土器とともに孔列文土器が出土し、安良遺跡では入佐式・黒川式土器とともに磨製石斧・打製石斧・磨石が出土している。

#### 弥生時代

安良・高吉B・柳遺跡などでは中期の堅穴建物跡が、船迫遺跡では中期の掘立柱建物跡が検出されている。

稲荷迫遺跡では入来Ⅰ・Ⅱ式土器期の土坑墓が2基検出され、前期の高橋式、中期の吉ヶ崎式・山ノロ式土器などとともに、磨製石鏃・扁平片刃石斧などの石器や、前山Ⅱ式・須玖Ⅱ式土器など瀬戸内や北九州の影響を受けた土器も出土している。

高吉B遺跡では堅穴建物跡7軒、掘立柱建物跡5棟、土坑8基が検出されているが、堅穴建物跡群と、掘立柱建物跡群とは区域が分かれている。土坑の中には土器によって閉塞された横穴をもつものもある。土器の中には北九州・瀬戸内・東九州系のもも含まれている。石器のほかに丁子頭の土製勾玉・磨製石鏃・打製石鏃・磨石・敲石・石皿・砥石などの石器もある。

船迫遺跡では掘立柱建物跡4棟が検出され、山ノロ式土器、磨製石鏃・磨石・敲石などが出土している。稲荷上遺跡では入来式土器が、安良遺跡では山ノロⅡ式土器が出土している。柳遺跡では長方形の焼失住居跡が検出され、山ノロ式土器や土製勾玉・軽石製品が出土している。出土状況がはっきりしないが、大正年間に土橋遺跡では中広形銅矛が採集されている。

#### 古墳時代

志布志湾の北端から南に突き出たダグリ岬には墳長約80mで葺石のある前方後円墳、飯盛山古墳がある。墳丘の高さは、後円部が11.5m、前方部が4.5mである。主体部は堅穴石室で、多くの円筒埴輪、壺形埴輪片が出土し、ガラス製勾玉・丸玉・小玉が採集されている。4世紀末から5世紀初頭に築かれている。

菱田川の河口近くにある小牧古墳群は、円墳4基で構成され、周辺から7世紀の須恵器が採集されている。六月坂横穴墓では横穴墓とともに7世紀代の土師器、須恵器などが出土し、安良遺跡では地下式横穴墓が検出されている。

この時期の集落遺跡は少ない。安良遺跡では7世紀頃の堅穴建物跡13軒と溝状遺構2条が検出され、住居内か

ら須恵器や鉄鏃・刀子も出土し、多くの甕の底には木葉痕がある。稲荷迫遺跡では、中期中葉から後葉の竪穴建物跡4軒、土坑1基が検出され、勾玉・管玉も出土している。船迫・山角B・炭床遺跡では笹貫式土器が、宮脇遺跡では辻堂原式・笹貫式土器と7世紀頃の須恵器が出土している。

#### 古代

古代の志布志は日向国諸県郡に属していた。前川河口にある宝満寺跡は神亀年間(724~729)に創建された、西海の華と称されたほどの寺だったが、今は境内に五輪塔群が残っているだけである。山宮神社も和銅2年(709)に建てられたという。水迫横穴墓では須恵器の蔵骨器が出土している。

古代村落の様相ははっきりしていないが、安良遺跡では土師器・黒色土器・須恵器とともに墨書土器・焼塩土器も出土している。稲荷迫遺跡では土師器・焼塩土器・鞆の羽口などが、宮脇遺跡では木葉底の土師器甕や焼塩土器・須恵器が出土している。

#### 中世

志布志は港町として栄え、『志布志津』と呼ばれた。

国指定史跡である志布志城跡は、前川の河口近くにあり、内城・松尾城・高城・新城からなる。それぞれの城はシラス台地の端部に立地し、いくつかの深い壕で区画された郭からなり、それぞれの郭では、建物跡・溝状遺構・土坑・土塁・門跡などが検出され、土師器・青磁・白磁・青花・東播系捏鉢・瓦質土器・備前焼播鉢・天目碗・銭貨など主として14世紀半ばから15世紀の遺物が出土している。ベトナム・タイなど東南アジア産のものもあり、当時の広範な交易を物語っている。

山宮神社近くには12世紀後半に築城された志布志城の支城である安楽城跡がある。山宮神社境内では明治23年と25年に五輪塔が合わせて6基掘り出され、26年には蔵骨器の納められた石室が発見された。蔵骨器は青白磁の四耳壺で、副葬品として菊花紐の山吹あるいは草花飛雀鏡1面、鉄刀1口、土師器皿約10個、青白磁合子3個、同小壺2個、鉄塊1などがある。石室はすでにないが、出土品の一部と出土状況の記録が山宮神社に保管されている。14世紀に創建された大慈寺の境内には開山玉山和尚の墓(1351年)がある。

集落跡としては、宇都上遺跡で常滑焼・備前焼などの国内産陶器、白磁・龍泉窯系青磁などの輸入陶磁器が出土している。また、石塔が建立されていたようだが、15世紀頃に、石塔は国産陶器や中国産白磁・青磁の皿・碗や陶器壺、タイ産陶器壺、石臼などとともに大きな穴に埋められている。安良遺跡では掘立柱建物跡・竪穴建物跡・土坑群などが検出され、土師器・瓦器塊・青磁・白磁・青白磁合子・東播系捏鉢・須恵質土器・瓦質土器・備前焼播鉢・常滑焼甕・黄釉鉄絵盤・石鍋・

柱状高台皿・炭化米塊・炭化種子などが出土している。志布志海岸には今でも砂鉄が薄く堆積しているが、これを原料とした製鉄遺跡が前川・安楽川沿いに存在している。前川河口にある宝満寺跡内にある宝満製鉄遺跡では土坑・排滓場が検出され、土師器・炉壁・鞆の羽口・製錬滓・台石・敲石などが出土している。

#### 近世

志布志城跡の東側に地頭仮屋が置かれ、その周辺に武家屋敷が建ち並んで『麓』を形成していた。志布志湊の周辺は『志布志千軒町』と呼ばれ、南は大隅半島南部から琉球、北は大坂などとの流通が盛んであった。藩米などの集積・積出港で、前川河口には津口番所が置かれ、藩政末期には密貿易も行われていた。この周辺では陶磁器などが出土している。

宝満寺跡では石積遺構や基礎石・柱穴などが検出されているが、時期がはっきりしない。苗代川焼・龍門司焼などの薩摩焼、伊万里焼、土師質土器、琉球通宝や加治木銭・慶長通宝などの古銭、石製品、鉄製品などが出土している。船迫遺跡では道跡と思われる帯状硬化面が検出され、陶磁器とともに二分金も出土している。安良遺跡では薩摩焼・肥前陶磁器などが出土している。

前川、安楽川などの中小河川沿いには近世・近代の東谷や荒田遺跡など多くの製鉄関連遺跡が確認されていることからこれらの河川を利用して砂鉄を運搬し、製鉄作業が行われていたことが考えられる。安良遺跡でも近代の磁器とともに鞆の羽口・鉄滓・坩堝が出土している。

#### (参考・引用文献)

##### 志布志町教育委員会

- 1980『弓場ヶ尾地区一糞輪遺跡・柳遺跡』  
志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書
- 1985『志布志の埋蔵文化財』
- 1985『中原遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(9)
- 1988『飛渡遺跡・島廻遺跡・白木原遺跡』  
志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(13)
- 2003『宮脇遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(28)
- 2003・2004『宝満寺跡・宝満製鉄遺跡・傘田遺跡・弓場ヶ尾遺跡』  
志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(31)・(33)
- 2003『稲荷上遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(32)
- 2005『志布志城跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(34)
- 2005『弓場ヶ尾遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(35)

##### 志布志市教育委員会

- 2013『安良遺跡』志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書(7)
  - 2013『(伝)六月坂横穴墓』  
志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書(10)
  - 2013『山角B遺跡・炭床遺跡』  
志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書(11)
  - 2018『志布志城跡(内城跡)1~9次調査』  
志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書(12)
  - 2018『次五遺跡』志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書(13)
- ##### 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 2012『稲荷迫遺跡』  
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(169)
  - 2014『船迫遺跡・高吉B遺跡』  
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(180)
  - 2020『宇都上遺跡』  
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(204)
- ##### 鹿児島県教育委員会(公財)埋蔵文化財調査センター
- 2019『見婦遺跡』  
(公財)埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(23)



第3図 周辺の遺跡

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地(志布志市)	時代	地形	遺構・遺物等	備考
1	立山遺跡	有明町伊崎田字立山・野円・平・室太郎	古墳	台地		
2	下原B遺跡	志布志町内ノ倉字下原	旧石器, 縄文早・晩, 弥生中	丘陵	礫群, 細石刃核, 堅穴建物跡・土坑・集石・埋設土器, 前平式・加栗山式・吉田式・石坂式・下剥峯式・桑ノ丸式・押型文・苦浜式土器, 打製石鏃・磨製石鏃・打製石斧・磨製石斧・磨石・敲石	
3	稲荷上遺跡	志布志町安楽字稲荷上	縄文早・晩, 弥生中, 古墳	台地	集石・土坑, 平椅式・塞ノ神Aa式・上加世田式・入佐式・黒川式土器, 耳栓, 打製石斧, 入来式土器	志布志町埋文報(32)
4	稲荷迫遺跡	志布志町安楽字稲荷迫・牧	旧石器, 縄文早・後・晩, 弥生, 古墳, 古代	台地	礫群・剥片尖頭器・細石刃・細石刃核, 堅穴建物跡・集石・連穴土坑・土坑・土坑墓, 岩本式・加栗山式・吉田式・石坂式・平椅式・市来式・中岳II式・上加世田式・孔列文土器, 石槍, 磨製石斧・穿孔具	鹿児島県埋文七(169)
5	柳遺跡	志布志町安楽字柳	縄文早, 弥生中	台地	集石, 吉田式・石坂式・押型文・捺糸文土器, 磨石・敲石, 堅穴建物跡, 山ノ口式土器, 土製勾玉, 軽石製品	志布志町埋文報
6	菘輪遺跡	志布志町内ノ倉字菘輪	縄文早, 弥生中	台地	集石, 吉田式土器, 石鏃, 山ノ口式土器	志布志町埋文報
7	札建遺跡	志布志町内ノ倉字札建	縄文晩, 弥生中	台地	山ノ口式土器	志布志町埋文報
8	土橋遺跡	有明町野井倉字土橋・下原・土原・合所・下口・谷尻, 有明町伊崎田字塚・西ヶ迫	縄文後, 弥生中	台地	中広形銅矛	考雑8-2
9	小迫下遺跡	志布志町安楽字小迫下・曲迫	縄文早・後・晩	台地		平成16年確認調査
10	宇都上遺跡	志布志町安楽字宇都上・高吉	旧石器, 縄文早, 弥生前・中, 古墳, 中世, 近世	台地	前平式・志風頭式・加栗山式・小牧3A式・札ノ元VII類・石坂式・別府原式・下剥峯式・桑ノ丸式・押型文・手向山式・塞ノ神A式土器, 打製石鏃・磨製石鏃・削器・磨製石斧・磨石, 高橋式・入来式土器, 土師器・土師質土器・東播系須恵器・備前焼・常滑焼・瀬戸焼・青磁・白磁・中国陶器・タイ産陶器・染付, 砥石・軽石製品・石塔・鉄製品, 薩摩焼・肥前系陶磁器・煙管	鹿児島県埋文七(204)
11	高吉B遺跡	志布志町安楽字宇都上・茶馬場・雨堤	旧石器, 縄文早・中・後・晩, 弥生中, 中世~近世	台地	礫群, 三稜尖頭器, 集石・土坑・落とし穴, 前平式・石坂式・押型文・手向山式・苦浜式・深浦式・中岳II式, 打製石鏃・石匙, 堅穴建物跡・掘立柱建物跡・土坑・横穴をもつ土坑, 山ノ口式土器・土製勾玉, 樹皮布叩石	鹿児島県埋文七(180)
12	弓場ヶ尾遺跡	志布志町帖字弓場ヶ尾	縄文早, 古墳	台地	堅穴遺構・集石・土坑, 加栗山式・吉田式・石坂式土器, 磨石・石皿・打製石斧	志布志町埋文報(35)
13	稲荷免遺跡	志布志町帖字稲荷免		台地		
14	島廻遺跡	志布志町帖字島廻	縄文早, 弥生中	台地	集石, 前平式・吉田式・石坂式・平椅式土器, 山ノ口式土器	志布志町埋文報(13)
15	渡迫遺跡	志布志町安楽字渡迫	古代	台地		平成11年農政分布調査
16	西迫遺跡	志布志町安楽字西迫	縄文晩	台地		平成15年農政分布調査
17	中原(曲瀬)遺跡	志布志町安楽字中原	旧石器, 縄文早・中・後	台地	細石刃核, 阿高式・南福寺式・指宿式・磨消縄文・松山式・市来式土器, 石錘・磨製石斧・打製石斧, 円盤形土製品	志布志町埋文報(9)
18	曲瀬遺跡	志布志町安楽字中原・西迫・中渡	縄文草創・後, 弥生	台地	有舌尖頭器, 指宿式・市来式土器, 磨石, 弥生土器	
19	小瀬A遺跡	志布志町安楽字中原小瀬・西迫	縄文後	台地	市来式土器, 打製石斧・磨製石斧	
20	小瀬B遺跡	志布志町安楽字小瀬・中原	縄文後, 弥生	台地	指宿式・市来式土器・弥生土器, 打製石斧	
21	大渡遺跡	志布志町安楽字大渡	縄文, 弥生	台地		
22	大渡B遺跡	志布志町安楽字大渡	縄文早・後	丘陵	塞ノ神式・阿高式・出水式土器, 凹石・石斧・石錘	
23	船迫遺跡	志布志町安楽字船迫・大渡	縄文早・後, 弥生中, 江戸	台地	落とし穴, 下剥峯式・中岳II式土器, 石鏃・磨石・敲石, 掘立柱建物跡・石集積, 山ノ口式土器, 磨製石鏃, 道跡, 二分金・陶磁器	鹿児島県埋文七(180)
24	湯田堀遺跡	志布志町帖字湯田堀	縄文, 古墳, 中世	台地		平成14年確認調査
25	桃ノ木遺跡	志布志町帖字桃ノ木・五里ヶ迫	弥生中	丘陵		
26	飛渡遺跡	志布志町帖字飛渡	縄文晩, 弥生中, 古墳後	台地	黒川式・孔列文土器, 石槍・石鏃・打製石斧・磨製石斧・横刃形石器・石錘・磨石, 入来II式土器	志布志町埋文報(13)
27	大久保C遺跡	志布志町安楽字大久保	弥生	台地		平成11年農政分布調査
28	上原遺跡	志布志町安楽字上原	弥生	台地		平成11年農政分布調査
29	山角B遺跡	志布志町安楽字山角, 炭床	縄文後・晩, 古墳後	台地	集石, 西平式・中岳式・黒川式・突帯文土器, 石鏃・打製石斧・磨製石斧・勾玉, 笹貫式土器	志布志市埋文報(11)
30	山角A遺跡	志布志町安楽字山角	縄文後	台地	西平式土器, 打製石斧・石皿・磨石・敲石	
31	炭床遺跡	志布志町安楽字炭床	縄文早・後・晩, 古墳後	台地	集石, 塞ノ神A式・西平式・中岳式・黒川式・突帯文土器, 石鏃・打製石斧, 笹貫式土器	志布志市埋文報(11)
32	大久保A遺跡	志布志町安楽字大久保	縄文, 弥生	丘陵		
33	大久保B遺跡	志布志町安楽字大久保・七本松	弥生	台地		
34	上重遺跡	志布志町安楽字上重	縄文後	台地		
35	百堂穴遺跡	志布志町安楽字岩戸	縄文前, 弥生	洞穴	縄式土器, 獣骨, 磨製石鏃・磨製石斧	
36	見掃遺跡	志布志町志布志字見掃	旧石器, 縄文早・中・後, 弥生早・後	台地	ナイフ形石器・細石刃・ハンマストーン, 落とし穴・道路, 石坂式・下剥峯式・丸尾式・西平式土器, 石鏃・磨石・石皿, 円盤形土製品	鹿児島埋文調査七(23)
37	道悦遺跡	志布志町帖字道悦	縄文後, 弥生	丘陵	弥生土器, 磨製石斧	



番号	遺跡名	所在地(志布志市)	時代	地形	遺構・遺物等	備考
38	油田遺跡	志布志町帖字油田・西中尾	縄文, 弥生	台地		昭和62年確認調査
39	七本松B遺跡	志布志町安楽字七本松	弥生	台地		平成11年農政分布調査
40	七本松A遺跡	志布志町安楽字七本松	弥生	台地		平成11年農政分布調査
41	高牧遺跡	志布志町安楽字高牧	弥生	台地		平成5年確認調査
42	二重堀遺跡	志布志町安楽字二重堀・七本松	弥生	台地	弥生土器, 打製石斧	
43	安楽城跡	志布志町安楽字宮下	中世	台地	蔵骨墓	建久年間(1190~1198)築城
44	山宮神社	志布志町安楽字宮下	古代, 中世	台地	蔵骨器・和鏡・直刀・青白磁四耳壺・合子他	銅鏡(唐草鴛鴦文様鏡)大正7年国指定
45	宮内遺跡	志布志町安楽字宮内・下原	弥生, 古代	台地		
46	宮ノ上遺跡	志布志町安楽字宮之上	古代	台地		平成12年東九州道分布調査
47	尖堀遺跡	志布志町安楽字尖堀	古墳, 古代, 中世	台地		
48	宮脇遺跡	志布志町安楽字宮脇・岩下	縄文後・晩, 古墳後, 古代	台地	竪穴状遺構, 指宿式・市来式・笹貫式土器, 土師器・須恵器	志布志町埋文報(28)
49	水神松遺跡	志布志町安楽字水神松・三郎丸・小井出手	古墳	平地	壺・磨製石斧	
50	安良遺跡	志布志町安楽字勢園	縄文後・晩, 弥生中, 古墳後, 古代~近代	台地	竪穴建物跡, 小牧3A式・納骨式・西平式・中岳式・黒川式土器, 打製石斧, 山ノ口式・須玖式土器, 溝, 笹貫式土器・須恵器, 土師器・焼塩土器・須恵器, 掘立柱建物跡・土坑, 土師器・青磁・白磁・備前焼・常滑焼, 石鍋, 炭化米塊	志布志市埋文報(7)
51	安楽小牧	志布志町安楽字小牧	縄文早	台地		
52	安楽小牧B	志布志町安楽字小牧	旧石器, 縄文草創・早, 弥生	台地	ナイフ形石器・細石刃・細石刃核, 集石, 隆帯文土器, 吉田式・妙見式・天道ヶ尾式・塞ノ神A式・塞ノ神B式・苦浜式土器, 耳栓, 打製石鏃・磨石・敲石・石皿・異形石器, 弥生土器, 石包丁	鹿島埋文調査セ(33)
53	小牧古墳群	志布志町安楽字小牧	古墳後	台地	円墳4基, 土師器・須恵器, 整石加工品	
54	次五遺跡	有明町野井倉字次五・横堀	旧石器, 縄文早, 古代	台地	細石刃・畦原型細石刃核, 落とし穴・連穴土坑・土坑・集石・磨石・集積, 前平式・加栗山式・吉田式・札ノ元VII式・石坂式・中原V式・下剝釜式・桑ノ丸式・押型文・手向山式・塞ノ神B式土器, 打製石鏃・磨製石鏃・石錘・局部磨製石斧	志布志市埋文報(13)
55	大原遺跡	志布志町安楽字権現原	古代	台地	土師器・須恵器	消滅
56	権現原遺跡	志布志町安楽字権現原	弥生・古代	台地	弥生土器・土師器	
57	八ヶ代遺跡	志布志町安楽字八ヶ代	弥生, 古墳	台地		平成8年確認調査
58	鳥井下遺跡	志布志町安楽字鳥井下	縄文早・前	台地	縄文土器	
59	別府(石踊)遺跡	志布志町安楽字別府	縄文早・前・中・晩, 弥生中	台地	集石, 吉田式・石坂式・平椀式・塞ノ神式・轟式・曾畑式・岩崎式・黒川式土器, 土偶?, 石鏃・石斧・石匙・スクレイパー・磨石・敲石・石錘・異形石器	志布志町埋文報(1)
60	別府上遺跡	志布志町安楽字別府上	古代	台地	土師器	
61	水ヶ迫横穴墓	志布志町志布志字水ヶ迫	古代	丘陵	土師器・須恵器壺	昭和8年発見
62	六月坂横穴墓	志布志町志布志字水ヶ迫	古墳	丘陵	土師器・須恵器・坏蓋・坏身	明治42年発見か
63	船磯遺跡	志布志町安楽字船磯・水ヶ迫	縄文前・中	海岸	轟式土器	
64	外堀遺跡	志布志町志布志字外堀	縄文早	台地		
65	大西遺跡	志布志町志布志字大西	古代	海岸	縄文土器	
66	愛甲喜春墓	志布志町志布志二丁目	近世	沖積平野		昭和36年県指定
67	大慈寺跡(即心院)	志布志町志布志二丁目	中世~近代	沖積平野	仁王像	興国元年(1340)開山 昭和46年県指定
68	大慈寺開山堂墓地	志布志町志布志二丁目	中世~近代	沖積平野		大慈寺止々庵跡 大慈寺開山堂
69	志布志城(新城)跡	志布志町帖字宇都ノ上	縄文早・中, 中世	台地	塞ノ神式土器, 石鏃, 壕・土塁・溝・柵列, 青磁・白磁・染付・陶器(中国・ベトナム・渥美・備前焼)	志布志町埋文報(14)・(34)
70	志布志城(高城)跡	志布志町帖字高城	中世	台地	壕・土塁, 青磁・白磁・染付・陶器(タイ・中国・常滑焼・備前焼)・金属製品・銭貨	志布志町埋文報(34)
71	志布志城(松尾城)跡	志布志町帖字松尾	中世	台地	青磁・白磁・染付・陶器(中国・瀬戸焼・楽焼・明三彩・天目茶碗・唐津焼), 碁石, 砥石, 銅製品・鉄製品	平成17年国指定 志布志町埋文報(34)
72	志布志城(内城)跡	志布志町帖字内城	縄文, 弥生, 中世	台地	石鏃, 壕・土塁・虎口, 土師器・青磁・白磁・染付・陶器(中国・タイ・瀬戸焼・備前焼・唐津焼), 瓦質土器・金属製品・古銭・鉄滓, 華南三彩	志布志町埋文報(34) 志布志市埋文報(1)・(8)・(12)
73	小淵遺跡	志布志町帖字小淵	縄文中・後	丘陵	岩崎下層式・岩崎上層式・指宿式・市来式・草野式土器, 石斧・叩石・石皿・石錘	鹿考古(5)
74	高濱遺跡	志布志町帖字高濱	縄文中・後, 近世	河川		
75	宝満寺跡	志布志町帖字宝満	古代・中世・近世・近代	河岸段丘	土師器, 土坑・排滓場, 炉壁, 土師質土器・陶磁器・羽口, 製錬滓, 台石・敲石, 古銭	志布志町埋文報(31)・(33)
76	向川原遺跡	志布志町帖字向川原	縄文早	丘陵	縄文土器	

### 第3節 都城志布志道路建設に伴う県内の遺跡

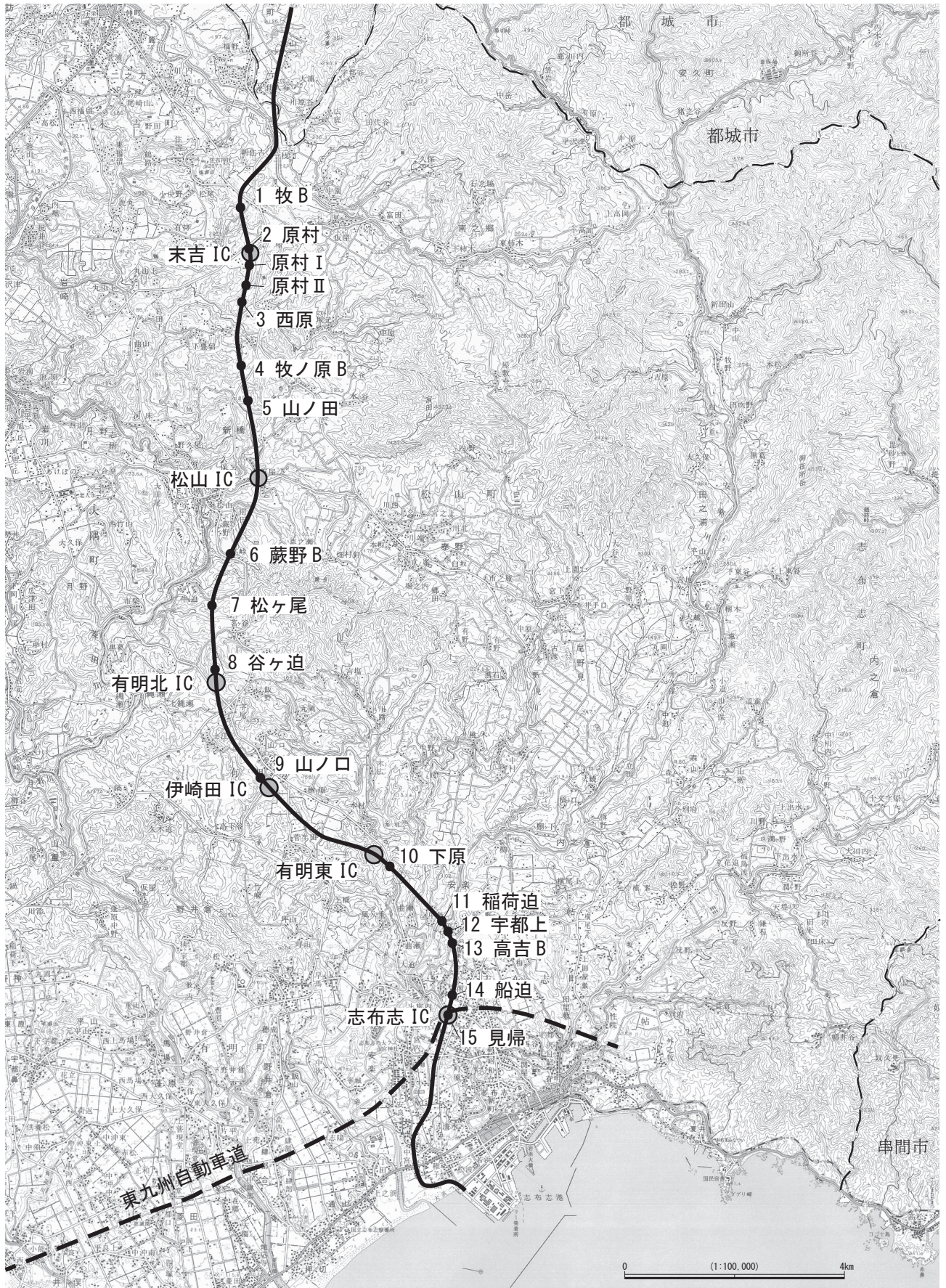
都城志布志道路は鹿児島県及び宮崎県に連なる道路である。その鹿児島県部分では、平成11年度から16年度にかけて末吉IC～有明北IC間、平成21年度から令和元年度

にかけてその他区間、計15遺跡の発掘調査が行われた。ここでは概要を下の表に示す。なお、今年度も整理作業を行っている遺跡があり、今後変更などが伴う可能性がある。詳細は各報告書を参考にされたい。

第2表 都城志布志道路に係る鹿児島県内の遺跡

番号	遺跡名	所在地	発掘調査	整理作業・報告書作成	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
1	牧B	曾於市末吉町岩崎牧	令和元年度	令和2年度刊行埋せ報告書(207)	縄文早期 縄文中～晩期 弥生早・中期 古代	土坑6基, 埋設土器1基 竪穴建物跡1基, ビット1基 — 土坑1基, ビット1基	石坂式・下剥峯式, 押型文土器, 打製石鏃・磨石等 御領式・中岳Ⅱ式・入佐式土器, 打製石鏃・打製石斧 刻目突帯文土器, 山ノ口式土器 土師器・黒色土器A類
縄文時代早期の土坑6基, 埋設土器1基が検出されている。縄文時代後期は土器を伴う竪穴建物跡を1基検出しており, 中央土坑には土器以外に拳大の軽石を多く含んでいる。							
2	原村	曾於市末吉町南之郷字原村	平成29年度 平成30年度	令和元年度 令和2年度刊行埋せ報告書(208)	旧石器	—	角錐状石器・剥片
					縄文早期	竪穴建物跡2軒, 集石41基, 土坑14基, 落とし穴2基, 連穴土坑2基	岩本式・前平式・加栗山式・吉田式・石坂式・押型文・下剥峯式・辻タイプ・平格式・塞ノ神式・苦浜式土器, 打製石鏃・石槍・スクレイパー・局部磨製石斧・打製石斧・環状石斧・石皿・環状石製品・砥石・石核
					縄文前・中期	落とし穴5基, 土坑2基	—
					縄文後期	竪穴建物跡2軒, 土坑13基, 溝状遺構1条	擬似磨滑縄文土器・中岳Ⅱ式・御領式・上加世田式土器, 打製石斧・磨石・線刻鏃
					縄文晩期	—	入佐式・黒川式・刻目突帯文・組織痕土器, 打製石鏃・打製石斧・磨製石製品
					弥生前・中期	土坑2基	高橋Ⅱ式・入来Ⅰ・Ⅱ式・山ノ口Ⅰ式・瀬戸内系土器, 磨製石鏃・勾玉
					古墳	土坑1基	成川式土器, 鉄鏃
					古代	土坑1基, 製鉄関連遺構1基	須恵器, 土師器, 輪の羽口, 鉄滓, 軽石
					中世	土坑2基, 溝状遺構1条	白磁, 青磁
					近世	土坑2基, 溝状遺構12条	染付, 薩摩焼, 寛永通宝, キセル
	原村I	平成14年度	平成19年度刊行埋せ報告書(124)	縄文早期 縄文後～晩期 弥生～古墳	集石1基 — 土坑5基	石坂式・塞ノ神式土器 指宿式・夜白式土器 弥生土器	
	原村II	平成14年度 平成15年度	埋せ報告書(124) 平成16年度刊行末吉町報告書(25)	縄文早期 縄文早期 近世	— 集石2基 土坑墓3基	前平式・平格式土器 押型文・平格式・塞ノ神式土器 人骨3体, 寛永通宝・永楽通宝	
	現末吉IC付近に広がる遺跡である。調査区や調査年度により主に3区に分かれており, IC北部分のⅢ区では, 縄文時代早期から晩期にわたる多くの土坑や竪穴建物跡等の遺構及び遺物が発見されている。古墳時代の異形鉄鏃の出土や古代の製鉄遺構の検出も注目される。						
3	西原	曾於市末吉町南之郷字西原	平成13年度	平成19年度刊行埋せ報告書(124)	旧石器	—	三稜尖頭器・ナイフ形石器
					縄文早期	集石17基, 大型土坑1基	押型文・塞ノ神式土器, 異形石器
					縄文後期	竪穴建物跡1基, 土坑17基	中岳式土器, 管玉
					古代～中世	溝状遺構1条	土師器
旧石器時代では, 三稜尖頭器の製作跡と考えられるブロックが2か所検出されている。縄文時代後期では, 1基の竪穴建物跡から中岳式土器や管玉が出土している。							
4	牧ノ原B	志布志市松山町新橋字牧ノ原	平成14年度	平成19年度刊行埋せ報告書(124)	旧石器	—	ナイフ形石器
					縄文前～中期	落とし穴1基	—
					縄文後～晩期	—	中岳式土器
旧石器時代では, ナイフ形石器が1点出土している。縄文前期～中期においては, 御池バミスを埋土に含んだ落とし穴が検出されている。							
5	山ノ田	志布志市松山町新橋字山ノ田	平成15年度	平成18年度刊行埋せ報告書(109)	縄文早期	集石6基, 土坑1基	吉田式・塞ノ神式土器, 石鏃・石匙・磨石・剥片石器等
			平成13年度	平成17年度刊行松山町報告書(16)	縄文早期	集石5基	下剥峯式・平格式・塞ノ神式土器, 石鏃
			縄文早期の集石が多く検出された遺跡である。遺物は縄文早期後半のものが多い。				
6	蕨野B	志布志市松山町新橋字蕨野	平成15年度 平成16年度	平成18年度刊行埋せ報告書(109)	旧石器	群葬5基, ブロック15基	ナイフ形石器・三稜尖頭器・台形石器・剥片石器等
			縄文早期	集石38基, ブロック18基, 土坑2基	吉田式・石坂式・下剥峯式・塞ノ神式土器, 打製石鏃・磨製石斧・打製石斧・磨石・叩石・礫器		
			縄文中・後期	集石1基	阿高式・指宿式土器		
			弥生中期	—	入来式土器		
旧松山町では本格的な旧石器時代の遺構・遺物が出土した遺跡である。縄文時代早期においても, 計50基以上の集石やブロックが検出されている。							
7	松ヶ尾	志布志市有明町伊崎田字松ヶ尾	平成15年度	平成18年度刊行埋せ報告書(109)	縄文早期	集石9基	前平式・石坂式・塞ノ神式土器, 打製石鏃・磨石
					縄文晩期	土坑1基	黒川式土器, 打製石鏃・磨製石斧・打製石斧
					古代	掘立柱建物跡1棟, 溝状遺構3条, 道跡遺構1条	土師器, 須恵器, 焼塩土器
縄文時代早期の集石が多く検出されている。古代の掘立柱建物跡も1棟検出されている。							
8	谷ヶ迫	志布志市有明町伊崎田字谷ヶ迫	平成15年度	平成18年度刊行埋せ報告書(109)	縄文後期	—	指宿式土器
					縄文晩期	—	黒川式・夜白式土器, 磨石
					縄文時代後期から晩期にかけての土器が出土している。		
9	山ノ口	志布志市有明町伊崎田字山ノ口	平成25年度 平成26年度 平成27年度 平成28年度 平成29年度刊行埋せ報告書(188)	—	旧石器	—	剥片
					縄文早期	集石2基, ブロック2基	知覧式・下剥峯式・塞ノ神式・山形押型文土器, 石鏃・石匙・スクレイパー
					縄文中期	—	春日式・大平式・阿高系土器
					縄文後期	土坑4基, 帯状硬化面11条	指宿式・市来式・中岳Ⅱ式土器, 石鏃・石匙・磨製石斧・打製石斧・磨石
					縄文晩期	—	精製浅鉢形土器
					弥生中期	—	入来式土器
近世	帯状硬化面3条, 溝状遺構5条	陶磁器					
科学分析の結果より, 縄文時代後期と考えられる帯状硬化面が11条検出されている。							

番号	遺跡名	所在地	発掘調査	整理作業・報告書作成	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
10	下原	調査区1 志布志市有明町伊崎田字下原	平成24年度 平成25年度 平成26年度 平成27年度 平成28年度 平成29年度 平成30年度刊行 理七報告書(198)		旧石器	礫群3基	細石刃・細石刃核・スクレイパー・剥片
					縄文早期	堅穴建物跡3軒、土坑9基、集石17基、埋設土器遺構1基	前平式・吉田式・石坂式・下剥峯式・桑ノ丸式・押型文・若浜式土器、打製石鏃・打製石斧・磨石・砥石・石皿
					縄文前～晩期	—	曾畑式・凹線文・中岳Ⅱ式土器、打製石鏃・打製石斧・磨石・砥石・石皿
		調査区2	平成27年度		縄文早期	集石17基、土器集中1か所	前平式・吉田式・倉園B式・押型文・下剥峯式・桑ノ丸式土器、打製石鏃・磨製石鏃・打製石斧・磨石・砥石
					縄文後～晩期	堅穴建物跡2軒、埋設土器遺構2基、集石・土坑1基、溝状遺構7条、硬化面1面	中岳Ⅱ式・入佐式・黒川式土器、打製石鏃・打製石斧・磨石・砥石・石刀
					弥生早～中期	堅穴建物跡3軒	早期・前期土器、山ノ口式土器
		調査区3	平成25年度 平成27年度		縄文早期	集石3基、ピット9基	吉田式・倉園B式・石坂式・下剥峯式・塞ノ神A式土器、打製石鏃・磨石・砥石
					縄文前～晩期	溝状遺構2条、土坑2基、土器集中1か所、炭化物集中1か所	野久尾式・中岳Ⅱ式土器、石鏃・打製石斧・磨石・砥石
					弥生中～後期	堅穴建物跡2軒、高床式建物跡1軒、ピット2基	中期末～後期土器
					近代	帯状硬化面2条	—
縄文時代早期の多くの型式にわたる土器とともに集石が37基検出されている。縄文時代後期から弥生時代にかけての堅穴建物跡や掘立柱建物跡もみられ、長期にわたり生活の場所として使用されていたと考えられる。							
11	稲荷迫	志布志市志布志町安楽字中島	平成21年度 平成22年度 平成23年度刊行 理七報告書(169)		旧石器	礫群1基	剥片尖頭器・細石刃・細石刃核
					縄文早期	集石64基、連穴土坑3基、土坑2基	岩本式・前平式・吉田式・倉園B式・石坂式・手向山式・平格式・塞ノ神式土器、打製石鏃・削器・石槍・二次加工剥片・石核・磨製石斧・礫器
					縄文後～晩期	土坑11基	市来式・丸尾式・北久根山式・中岳Ⅱ式・上加世田式・入佐式・黒川式土器、打製石鏃・石匙・削器・搔器・石錐・石槍・穿孔具・楔形石器・二次加工剥片・石核・石錐・打製石斧・磨石・砥石・礫器・磨石・砥石・砥石・石皿・台石
					弥生早～中期	土坑墓2基	刻目突帯文土器・夜白式・板付Ⅰ・Ⅱ式・入来Ⅰ・Ⅱ式・吉ヶ崎式・前山Ⅱ式・山ノ口式・須玖Ⅱ式土器、磨製石鏃・素材剥片・扁平磨製片刃石斧
					古墳	堅穴建物跡4軒、土坑1基	辻堂原式・笹貫式土器、勾玉・管玉
					古代	—	土師器、焼塩土器、韃の羽口
					時期不明	土坑15基	—
縄文時代早期においては、集石をはじめとする多くの遺構が検出している。縄文晩期から弥生時代にかけては北部九州系等の土器が出土しており、他地域との交流が窺える。古墳時代は成川式土器を伴う建物跡が4軒検出されており、編年の指標となる。							
12	宇都上	志布志市志布志町安楽字宇都上・高吉	平成30年度 令和元年度刊行 理七報告書(204)		旧石器	—	剥片
					縄文早期	集石33基、土坑7基、落とし穴1基	前平式・加栗山式・小牧3A式・札ノ元Ⅶ類・別府原式・石坂式・下剥峯式・桑ノ丸式・楕円押型文・手向山式・塞ノ神式土器、局部磨製石鏃・磨製石斧・削器・磨石・石核・剥片
					弥生、古墳	—	高橋式・入来式土器、成川式土器
					中世	大型土坑2基、土坑2基、溝状遺構4条、硬化面1条	土師器、土師質土器、青磁、白磁、染付、中国製陶器、タイ製陶器、常滑焼、瀬戸産、備前焼、東播系須恵器、軽石製品、砥石、大型石製品(五輪塔・板碑・石臼等)、鉄製品
					近世	石塔1基、溝状遺構2条、土坑4基	染付(肥前系)、薩摩焼(苗代川・龍門司系)、鉄製品、煙管、石硯
縄文時代早期前葉及び中世を主体とした遺跡である。縄文時代は谷部を挟み多数の集石が検出されている。中世においては大型の土坑から多くの陶磁器や石製品が出土しており、周囲に礫を敷いた石塔群が破壊を受け、廃棄されたと推測される。							
13	高吉B	志布志市志布志町安楽字高吉	平成23年度 平成24年度 平成25年度刊行 理七報告書(180)		旧石器	礫群1基	三稜尖頭器・剥片
					縄文早期	集石141基、土坑8基、土器埋設遺構1基、連穴土坑4基	前平式・石坂式・押型文・手向山式・平格式・塞ノ神式・若浜式土器、打製石鏃・局部磨製石鏃・削器・搔器・異形石器・打製石斧・石匙・磨石・石皿
					縄文前～晩期	落とし穴状遺構6基、土坑4基	深浦式土器
					弥生中期	堅穴建物跡7軒、掘立柱建物跡5棟、土坑7基、横穴をもつ土坑1基、石集積1基	山ノ口式・中溝式・須玖式・凹線文土器、土製勾玉・磨製石鏃・砥石・凹石・台石・樹皮布砥石
					中世～近世	溝状遺構1条、古道7条、土坑墓2基、石集積1基	土師器、陶磁器
縄文時代早期では、141基の集石や4基の連穴土坑などの遺構や多様な型式の土器が出土している。連穴土坑のブリッジ部から完形に近い石坂式土器が出土しており、注目される。弥生時代中期では、堅穴建物跡7軒や掘立柱建物跡5棟などの遺構が検出されている。特に横穴を土器片で塞いだ土坑は他に例がない。							
14	船迫	志布志市志布志町安楽字船迫	平成22年度 平成23年度 平成24年度 平成25年度刊行 理七報告書(180)		縄文早期	—	下剥峯式土器、石鏃
					縄文後期	落とし穴状遺構2基	中岳Ⅱ式土器、石鏃・磨石・砥石
					弥生中期	掘立柱建物跡4棟、集石1基	山ノ口式土器、磨製石鏃・磨石・砥石
					近世	帯状硬化面	二分金、銭貨、陶磁器
弥生時代中期を主体とした遺跡で、掘立柱建物跡4棟等の遺構や山ノ口式土器が出土している。近世においては、道跡と考えられる硬化面から、二分金が出土している。							
15	見帰	志布志市志布志町志布志字見帰	平成25年度 平成30年度 令和元年度 令和2年度刊行 理七報告書(206)		旧石器	—	砥石・磨石
					縄文早期	土坑10基、集石1基	吉田式・下剥峯式土器・縄文系土器、石鏃・石核
					縄文中期	土坑1基、落とし穴3基	石鏃・石皿
					縄文後期	溝状遺構1条	岩崎式・丸尾式・幸川式・西平式・中岳Ⅱ式土器、石匙・石錐・打製石斧・磨石・砥石
					弥生早・後期	—	突帯文・高付式土器
					時期不明	土坑2基、溝状遺構1条、硬化面	—
縄文時代中期では、落とし穴3基が検出されている。東九州道部分の調査でも同様の遺構が検出されており、この時期は狩猟場としての利用が考えられる。また、東九州道部分まで続く縄文時代後期の溝が1条検出されている。							



第4図 都城志布志道路建設に伴う県内の遺跡

## 第3章 調査の方法と層序

### 第1節 調査の方法

本節では、発掘調査の方法、遺構の認定と検出方法、整理作業・報告書作成作業の方法について記す。

#### 1 発掘調査の方法

見帰遺跡の発掘調査は、平成24年度に試掘調査、平成25年度に試掘実施部分の本調査、平成29年度に未調査部分の確認調査、平成30年度に平成25年度に実施した部分以外の本調査を実施した。本調査対象面積は、2回分を合わせ表面積2,850㎡、延面積6,790㎡である。

本遺跡の調査区割り（グリッド）は、世界測地系座標におけるX=-167230.000、Y=8190をA-1区の北東隅点（0・0）とした。区割りは10mおきにグリッドを設定し、北から南に向かって1・2・3・・・、東から西に向かってA・B・C・・・、と呼称した。なお、平成29年度の調査センターの調査においても同じグリッドを使用している。

発掘調査における調査対象地は安全上の措置として用地境界から約1～1.5m程度内側に控えて設定し、調査深度が2mを超える場合はさらに2m程度の段（控え）を設けて下層を掘削した。掘り下げは、表土や無遺物層は重機により除去し、包含層は人力により行った。地形測量は、IVb層・VIIIa層・XIa層上面で行った。包含層中の遺物の多くは縄文時代早期及び後期の土器であり、トータルステーションで座標位置を測量後、取り上げた。遺構内遺物は図面上に記載し、遺構番号及び遺構内遺物番号を付けて取り上げた。遺構の検出時や埋土半掘・完掘時などには写真撮影を行った。遺構内の炭化物は、位置を図面に記録し取り上げた。

#### 2 遺構の認定と検出方法

調査開始前の調査区内は、東側へゆるやかに傾斜する平坦な畑となっており、現代における耕地整理の影響を強く受けている。そのため、調査区西側を中心に、旧地形が高い場所では上部が削平されている。それらの遺構は検出できた層から記録し、内部に入っていた遺物等で時期判定を行った。

遺構の認定については、検出面の層位、埋土の色調、埋土半掘による確認を行い、調査担当者間で検討の上で判断した。主な遺構の認定は以下のとおりである。

縄文時代早期の遺構については、集石遺構は包含層であるVII層において、礫が明瞭に集中する1か所のみを認定した。土坑は、VIIb及びVIII層において、土色の異なるか所を半掘し、形状や深さを確認して認定を行った。縄文時代中期の土坑・落とし穴については、検出面及び埋土、底面

の形状を考慮し認定した。縄文時代後期の溝状遺構については、埋土内遺物や炭化物、埋土の状態や掘り込み面などを考慮し認定した。時代認定が難しいものに関しては、時期不明遺構とし、考えられる時期を記載してある。

なお、遺構は検出の写真撮影後、掘り下げ・実測等を行った。実測は、土坑や落とし穴は10分の1とするなど、遺構の大きさによって縮尺は変更している。溝状遺構や土坑・落とし穴等は、埋土断面や完掘の写真も撮影した。遺構内の炭化物は、年代測定のための科学分析を行い、年代決定の参考とした。

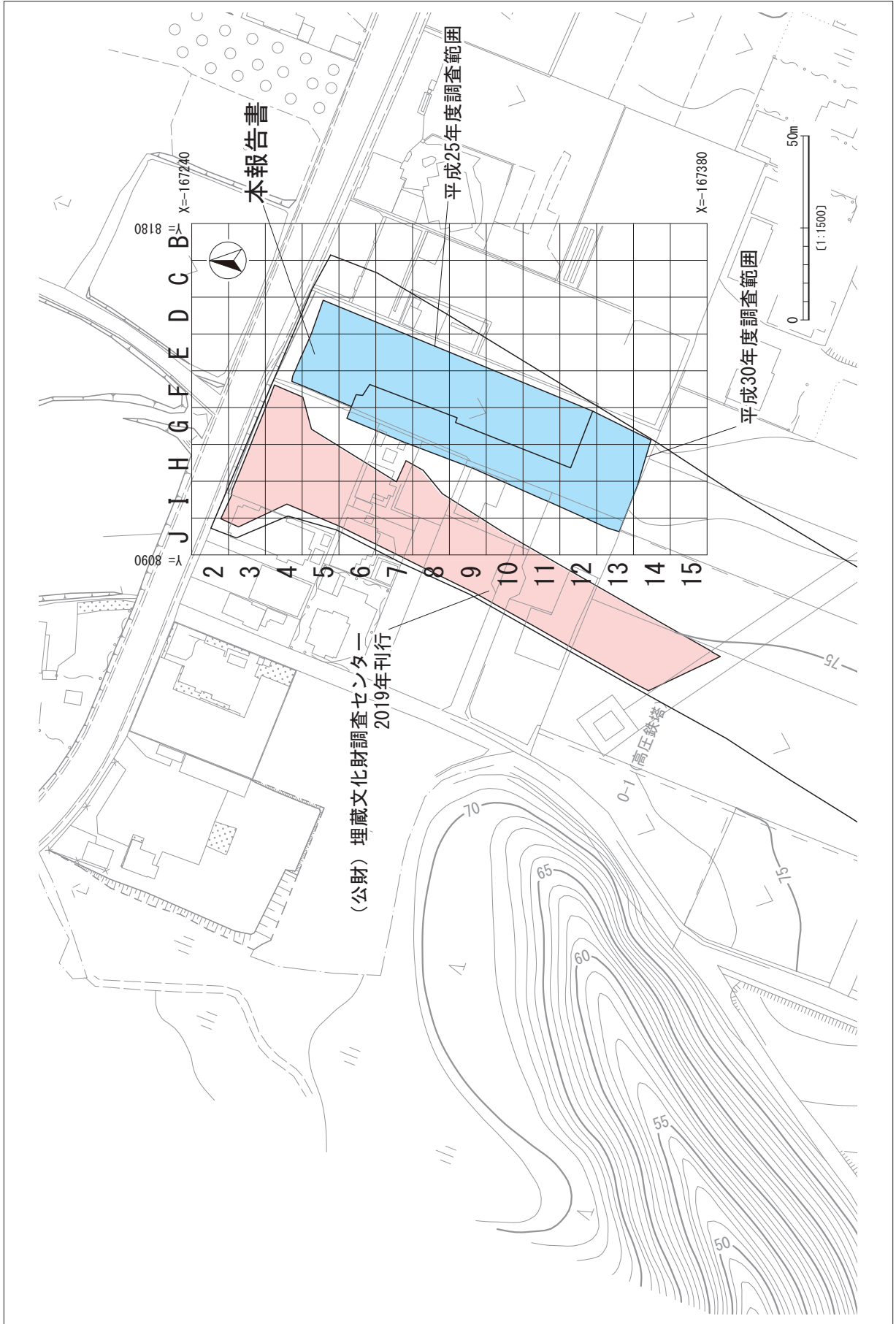
#### 3 整理作業・報告書作成作業の方法

遺物注記は、隣接部分を調査した調査センターと協議し、県埋文センター調査区出土のものは注記記号「ミカエ」を頭に、包含層資料は続けて「区」「層」「遺物番号もしくは一括」の順に記入した。遺構内資料は注記記号及び「区」の後に遺構記号を用いて遺構番号を記し、その後に「遺物番号もしくは一括」を記入した。なお、調査センターの調査区出土分は、注記記号の頭は「ミカ」である。遺物の選別は、層や遺構ごとに、時代や形式別で分類し、数や分布状況の把握に努めた。接合はすべてを行い、掲載遺物を決定し、実測・トレースを行った。遺構については、位置や形状など、調査センター検出分と比較・検討を行った。

### 第2節 層序

基本層序は、平成24年度の試掘調査時のものに準じた。調査範囲の地形は、西側が高く、東側に向け緩やかに下降する地形であり、平成28年度の調査センターの調査区との間が最も高くなり、尾根筋となる。表土下の地層については、F・G-6区やI・J-12・13区付近が高い丘状となっているため、IX層付近まで削平を受けているなど、残存度が悪い。なお、時期決定の目安となる主な火山灰については、特色を以下のように示した。

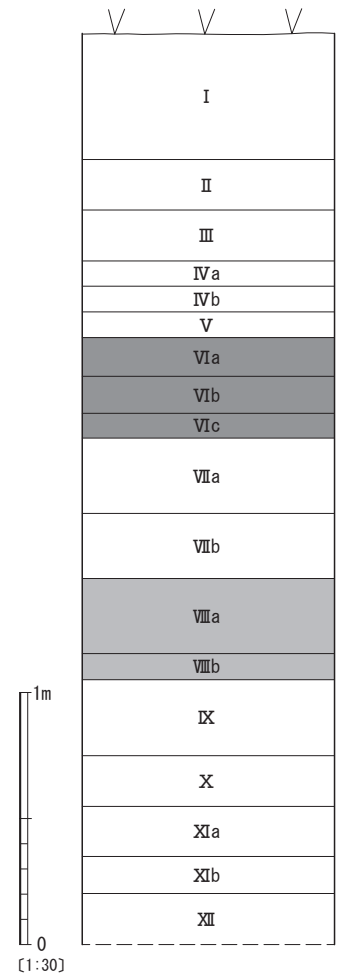
III層では、黒色土中に黄褐色の御池火山灰層のパミスが含まれる。基本的に御池火山灰のパミスは場所によりやや量が異なるが、場所によっては数cmの堆積がみられ、平均して20cm程度の厚みがある。IVb層は黒色土に径1cm程度の池田降下軽石を含む層で、10cm程度の厚みがある。VI層はアカホヤ火山灰で、黄褐色の砂質の土が堆積し、下位には1cm程度の豆粒状の軽石層が認められ、40cm程度の厚みがある。VIII層は薩摩火山灰層で、明黄褐色の火山灰が層を成し、40cm程度の厚みがある。XII層はシラス火山灰の上部で、茶褐色土に黄褐色のブロックが点在している。



第5図 調査範囲及びグリッド配置図

**基本層序**

- I 層：表土 砂利とシラスの造成土。層厚50cm程。
- II 層：黒褐色土（7.5YR3/2）灰白色・橙色パミスを含む。  
しまりやや有り。層厚20cm程。縄文時代後期の遺物包含層。
- III 層：黒褐色土（7.5YR2/2）御池火山灰を含む。しまりやや有り。  
層厚20cm程。
- IVa層：黒色土（5YR1.7/1）しまりやや有り。層厚10cm程。  
縄文時代中期の遺物包含層。
- IVb層：明褐色土（7.5YR5/6）池田降下軽石を含む。しまりやや有り。  
層厚10cm程。
- V 層：暗褐色土（10YR3/4）しまりやや有り。層厚10cm程。
- VIa層：黄褐色土（10YR7/8）アカホヤ火山灰層（腐植土）。  
しまり有り。層厚15cm程。
- VIb層：黄褐色土（10YR8/8）アカホヤ火山灰層。しまりやや有り。  
層厚15cm程。
- VIc層：黄褐色土（10YR7/8）アカホヤ火山灰層（パミス一次堆積）。  
しまりやや有り。層厚10cm程。
- VIIa層：黒色土（10YR2/1）灰白色パミスを含む。しまりやや有り。  
層厚30cm程。縄文時代早期の遺物包含層。
- VIIb層：暗褐色土（10YR3/4）黄褐色パミスを含む。しまり有り硬質。  
層厚25cm程。縄文時代早期の遺物包含層。
- VIIIa層：褐色土（10YR4/4）薩摩火山灰層。黄褐色パミスを含む。  
しまり有り硬質。層厚30cm程。
- VIIIb層：暗褐色土（10YR3/4）薩摩火山灰層。橙色パミスを含む。  
しまり有り硬質。層厚10cm程。
- IX 層：褐色土（10YR4/6）しまり有り粘質。層厚30cm程。
- X 層：暗褐色土（10YR3/3）しまりやや有り粘質。層厚20cm程。  
旧石器時代の遺物包含層。
- XIa層：黄褐色土（10YR4/3）しまりやや有り粘質。層厚20cm程。
- XIb層：黄褐色土（10YR5/8）しまりやや有り粘質。層厚15cm程。
- XII 層：黄褐色土 軽石を含む二次シラス。層厚20cm以上。

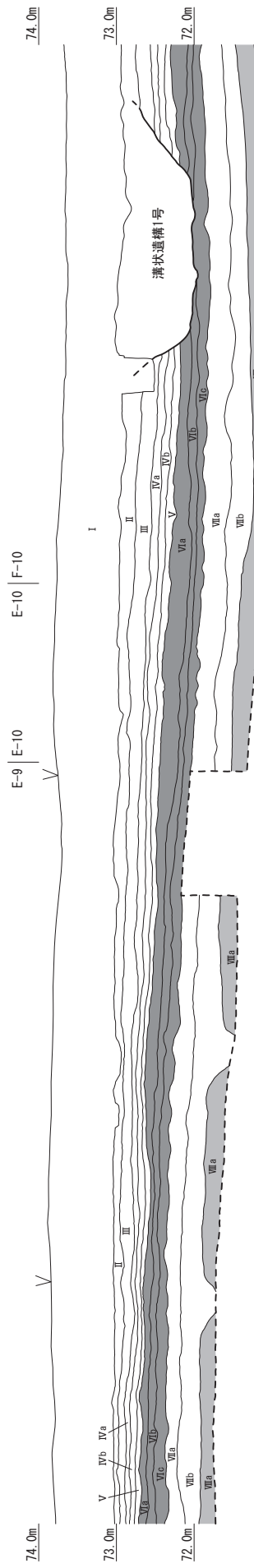
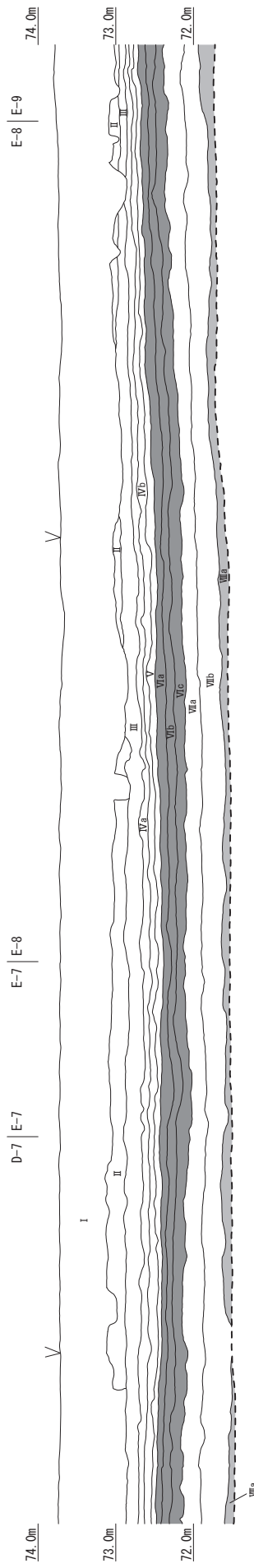
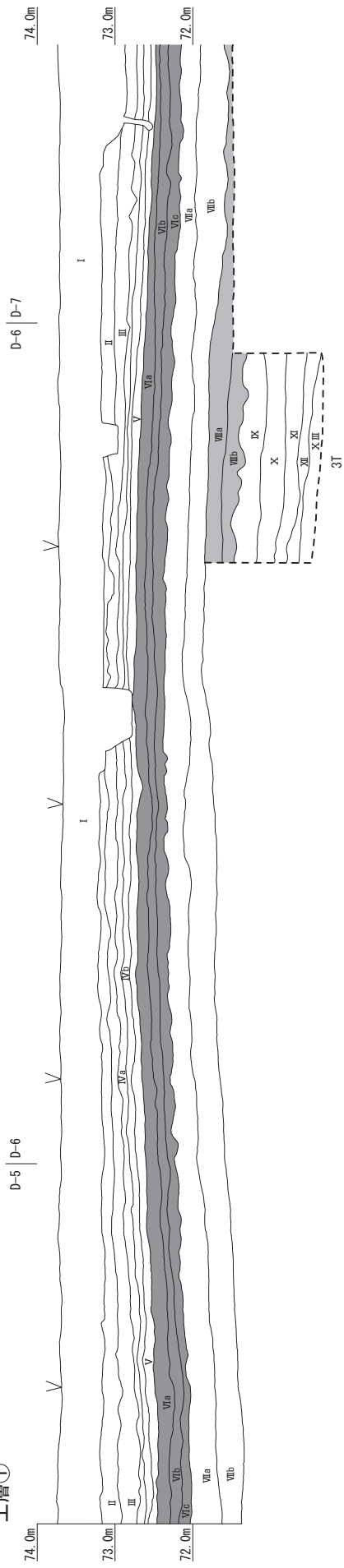


第6図 基本土層柱状図



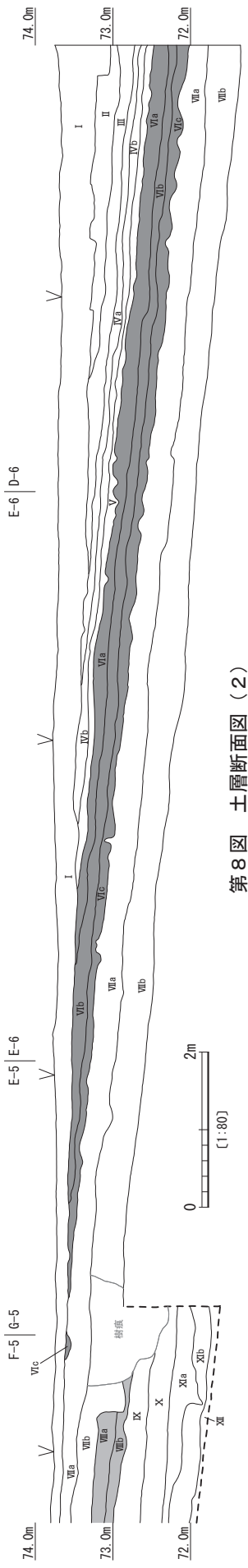
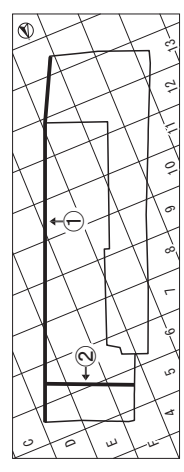
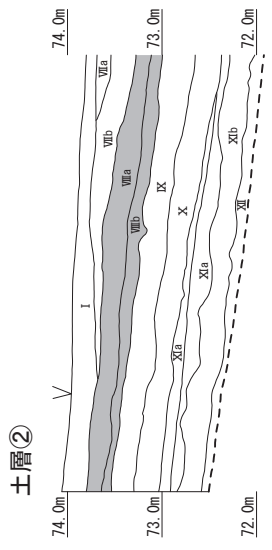
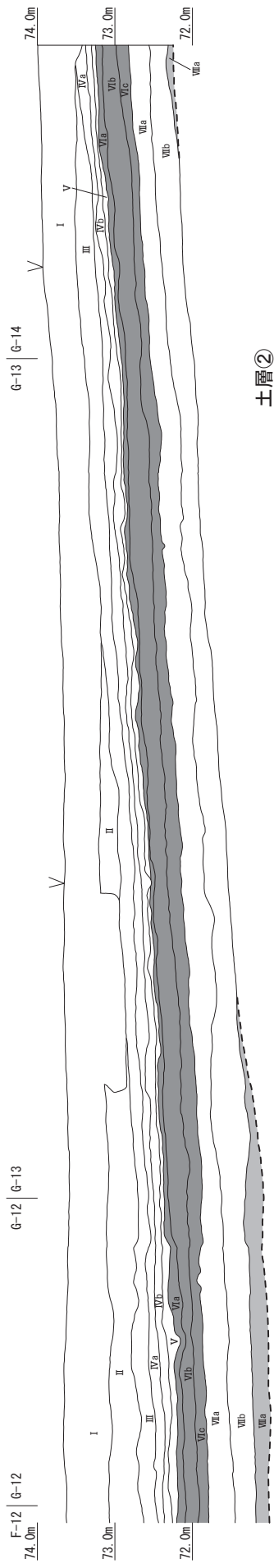
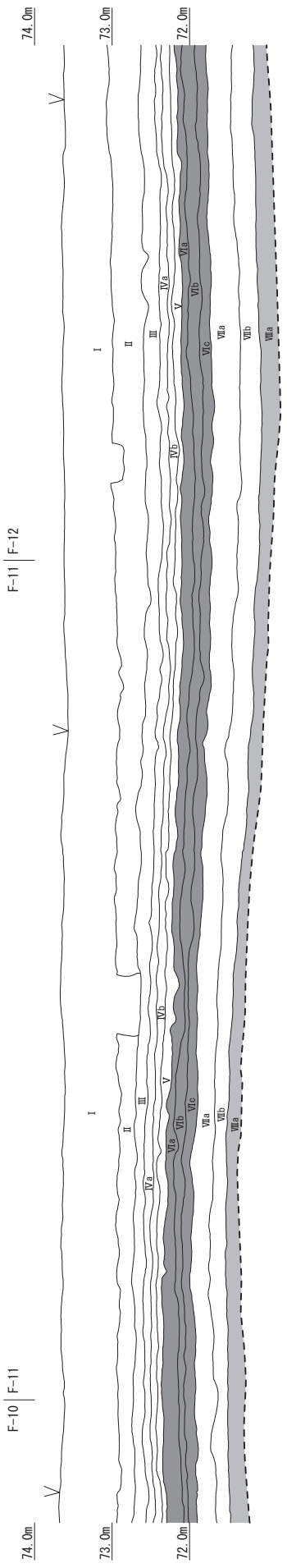
写真2 G-13区東壁土層断面

土層①

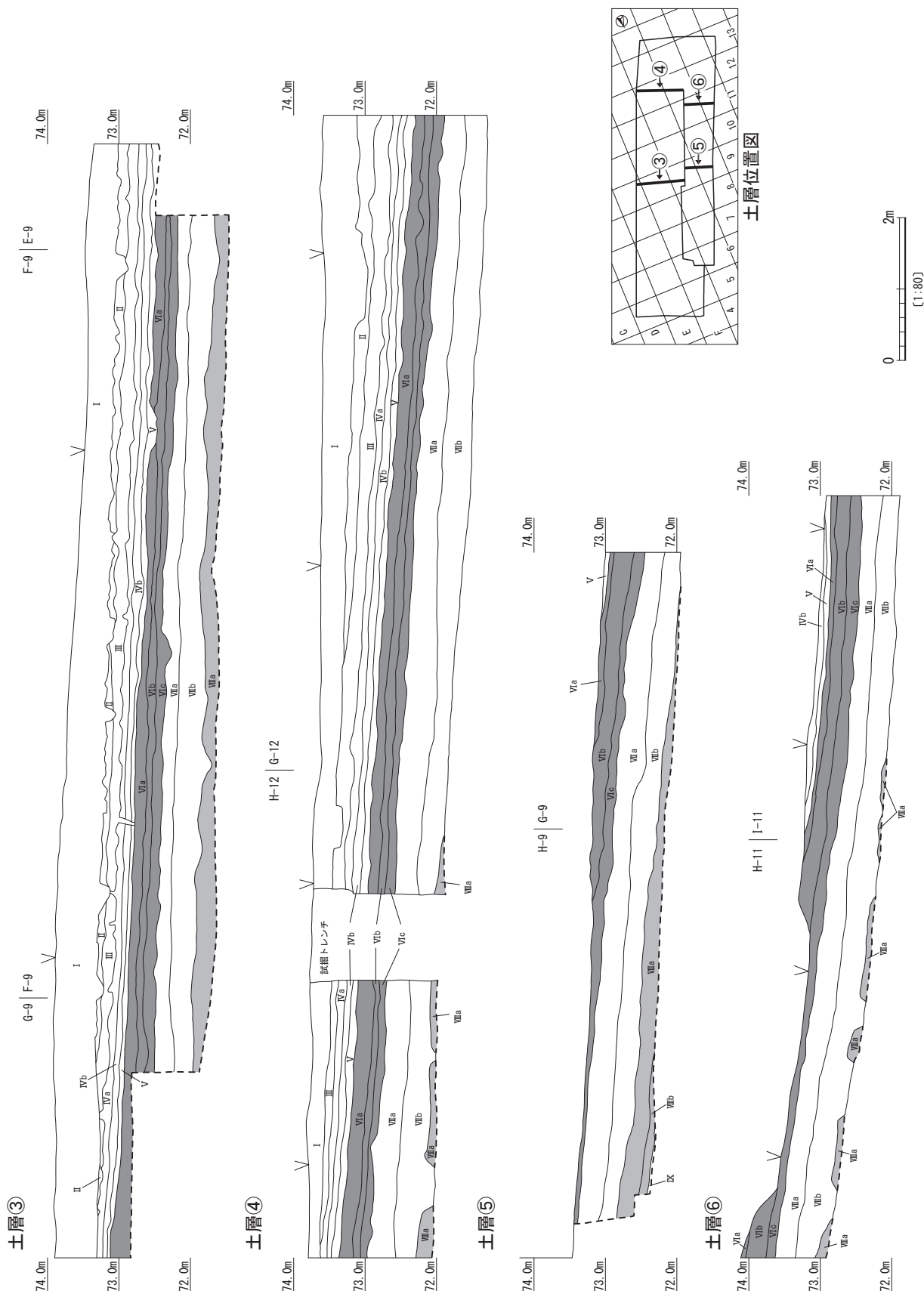


第7図 土層断面図(1)





第8図 土層断面図 (2)



第9図 土層断面図 (3)

## 第4章 調査の成果

### 第1節 旧石器時代の調査

#### 1 調査の概要

旧石器時代の調査は、部分的に先行トレンチ（1～9 T）を設けて調査範囲の拡張を行い、IX・X層を調査対象として人力掘削を行った。その結果、遺構の発見には至らなかったが、磨石や敲石などの礫石器6点の遺物が出土した（第10図）。

分布状況は、F-5区のX層から5点（1～5）がまとまって発見され、径1.5mの範囲に集中して、地形の傾斜に沿ったレベルからの出土であった（第11図）。また、F-8区の5 TからもX層で1点（6）認められた。なお、これらの石器はその出土層位から細石刃文化期の遺物であると考えられ、西側に隣接する東九州自動車道建設に伴う調査区では細石刃が発見されている。

#### 2 出土石器

##### 礫石器（第12図1～6）

河原石を素材として、石材はすべて砂岩である。

1は磨石で、表面の中軸に稜をもつ平たい円礫を用いている。平滑な裏面側が使用されており、弱い残痕ながら磨り面を有する。

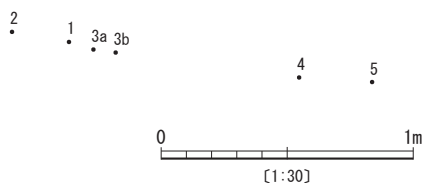
2は敲石で、やや縦長の楕円礫を用いており、主にその長軸の下端に敲打痕が生じている。特に磨り面はみられず、被熱による赤化が著しい。

3はやや小さな亜円礫であり、破片2点が接合したものである。風化が著しく、磨り面や敲打痕は観察できないが、敲打の使用により破砕した可能性がある。被熱による赤化が若干みられる。

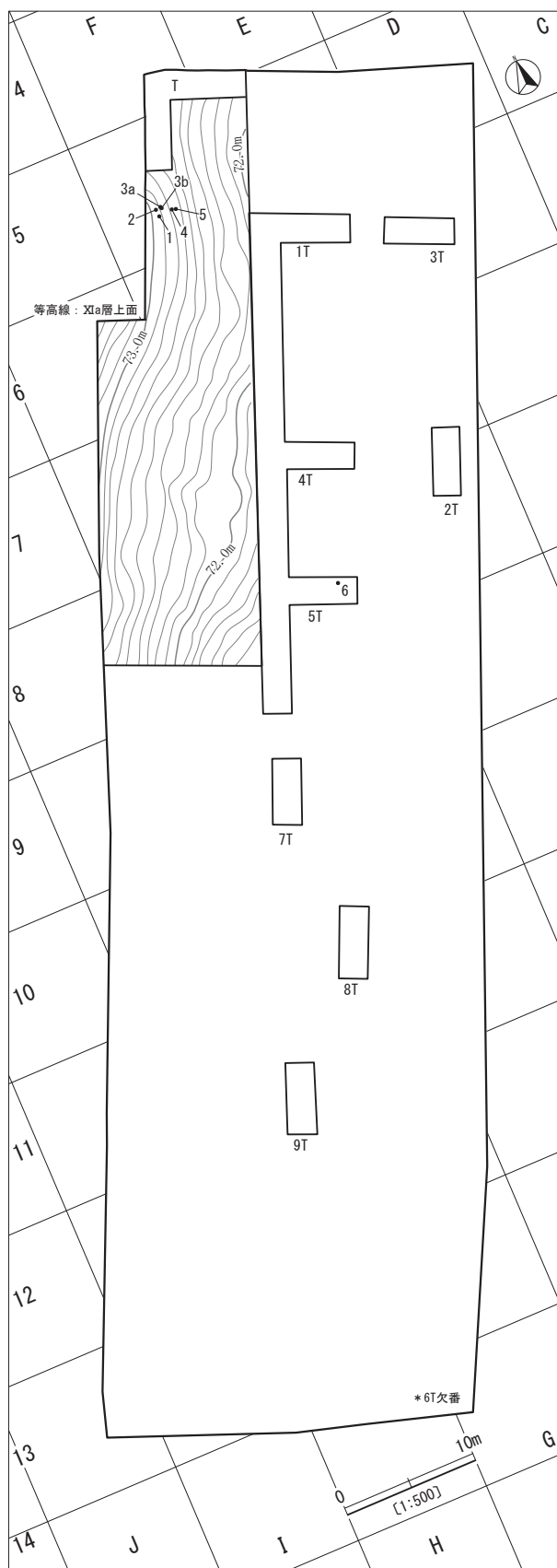
4は角柱状の小礫を用いた敲石である。楔形を呈する一端の片角に部分的な敲打痕が生じている。

5は上下両端が窄まった縦長の板状礫である。磨り面や敲打痕は認められないものの、使用痕が残りにくい状況なども考慮して、その形状の選択性から一応、石器として挙げておきたい。

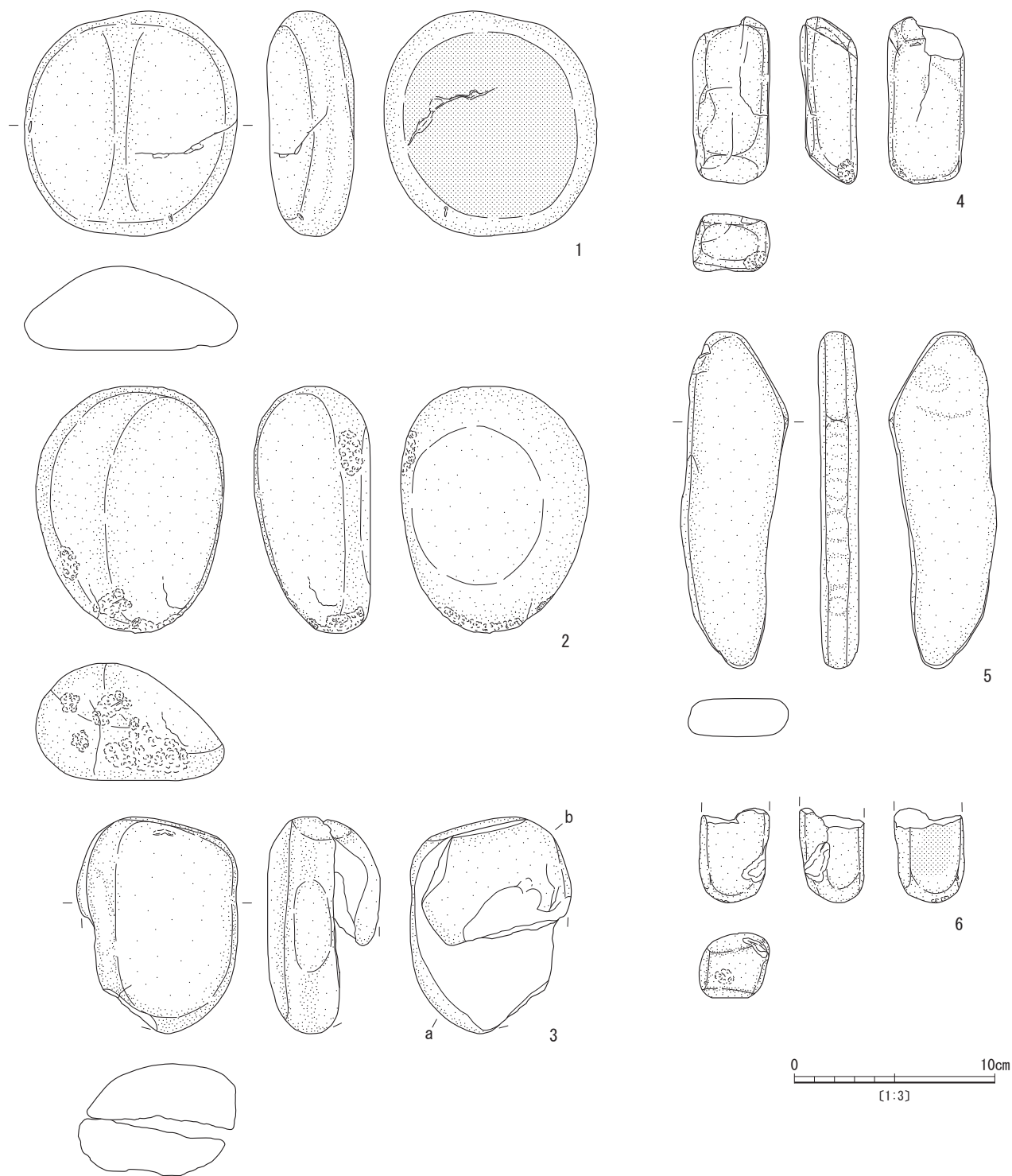
6も角柱状の小礫であり、明瞭な敲打痕はみられないが、敲打の使用により上半部を欠損している可能性が高い。また、側面にわずかながら磨り面がみられる。



第11図 F-5区の石器垂直分布図



第10図 旧石器時代の調査範囲と石器分布図



第 12 図 旧石器時代の石器

第 3 表 旧石器時代石器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
12	1	F5	X	1071	磨石	11.15	10.60	4.35	672.8	砂岩	
	2	F5	X	1070	敲石	12.25	9.40	5.80	799.3	砂岩	
	3a	F5	X	1069	敲石	10.80	(8.00)	(5.60)	(500.9)	砂岩	接合
	3b			1068							
	4	F5	X	1067	敲石	(8.30)	3.80	2.85	(136.6)	砂岩	
	5	F5	X	1066	板状礫	16.75	5.35	2.00	261.5	砂岩	
6	F8	X	518	敲石	(4.70)	3.50	(3.20)	(70.8)	砂岩		

## 第2節 縄文時代早期の調査

### 1 調査の概要

縄文時代早期の調査は、VI層のアカホヤ火山灰を重機で取り除いた後、包含層であるVII層を人力により掘り下げて行った。遺構及び遺物は平成25年度調査区に集中しており、平成30年度調査区のG～I-6～14区付近は台地の縁でやや高く傾斜地となることから、居住に適さない場所であることが原因と考えられる。

遺構は集石遺構1基及び土坑10基が検出されている(第13図)。土坑の多くはVIIb層からVIIIa層上面において検出され、径1m程度で、埋土は黄橙色パミスを多量に含むものが多い。埋土から遺物は出土せず、周辺に住居跡等も検出されていないため、用途は不明である。

遺物はE～G-5～10区付近で出土しているが、量が少なく、ごく短い利用であったと考えられる。土器は吉田式土器や下剥峯式土器が、石器は主に石鎌が出土している。

### 2 遺構

#### (1) 集石遺構(第14図)

F-8区のVIIb層上面で検出された。礫は周囲に散在しており、集中する部分のみを遺構と認定した。約2m四方に広がっているが、中心部は100×60cm程度の範囲にまとまる。構成礫は36点で、径10cm以下の小角礫がほとんどである。破碎したものもあり、被熱を受けた可能性がある。掘り込みは確認されなかった。炭化物が中心部で1点出土し、放射性炭素年代測定により、2σ暦年代範囲で8828calBC-7938calBCの結果を得られた。土器は1点出土している。

7は下剥峯式土器の深鉢である。外面に低い突帯をナデつけた後、突帯の上位は密な貝殻刺突文を横方向に、下位にはハの字状の縦に施している。

#### (2) 土坑

##### 土坑1号(第15図)

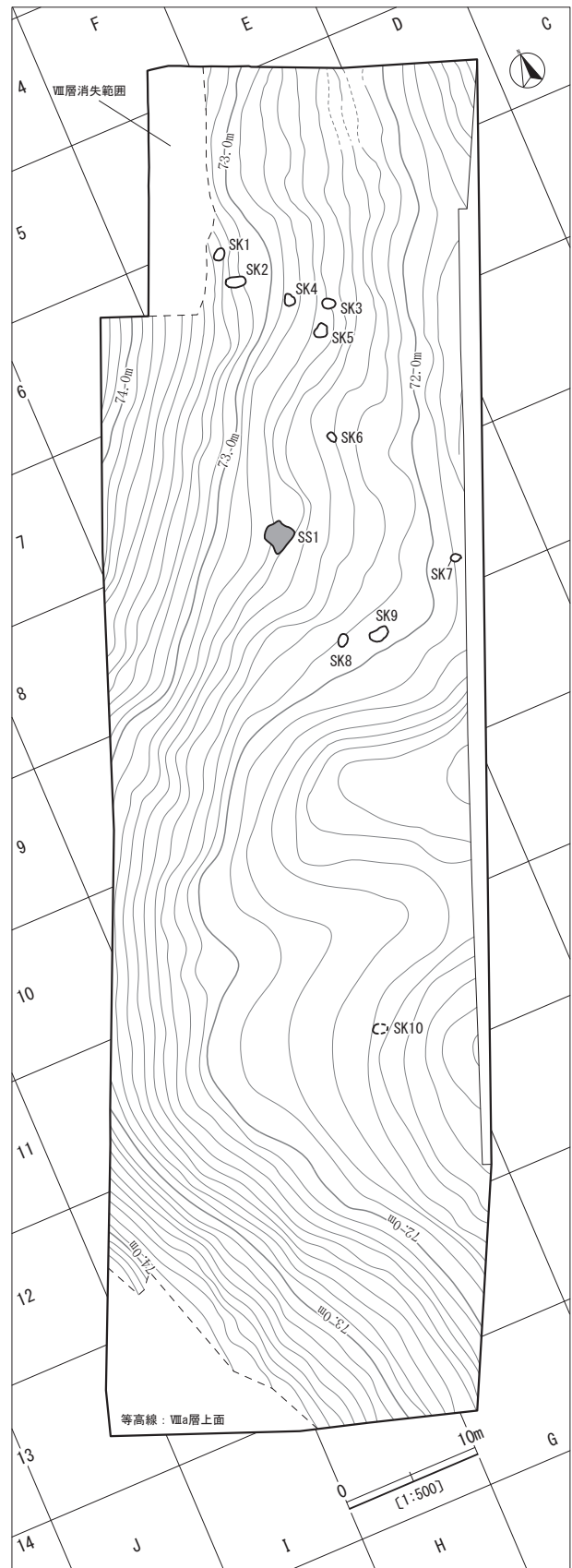
F-6区のVIIIa層上面で検出された。平面はやや不整な楕円形であり、検出面での大きさは約90×60cm、深さは約30cmで、底面はやや平坦となる。埋土はVIIb層土と考えられる暗褐色土で黄橙色パミスを多く含むが、下部は少ない。

##### 土坑2号(第15図)

F-6区のVIIIa層上面で検出された。平面は楕円形で、検出面での大きさは約140×80cm、中央部はやや円形に落ち込み、深さは30cm程度である。埋土はVIIb層土と考えられる暗褐色土に黄橙色パミスを多く含んでいる。

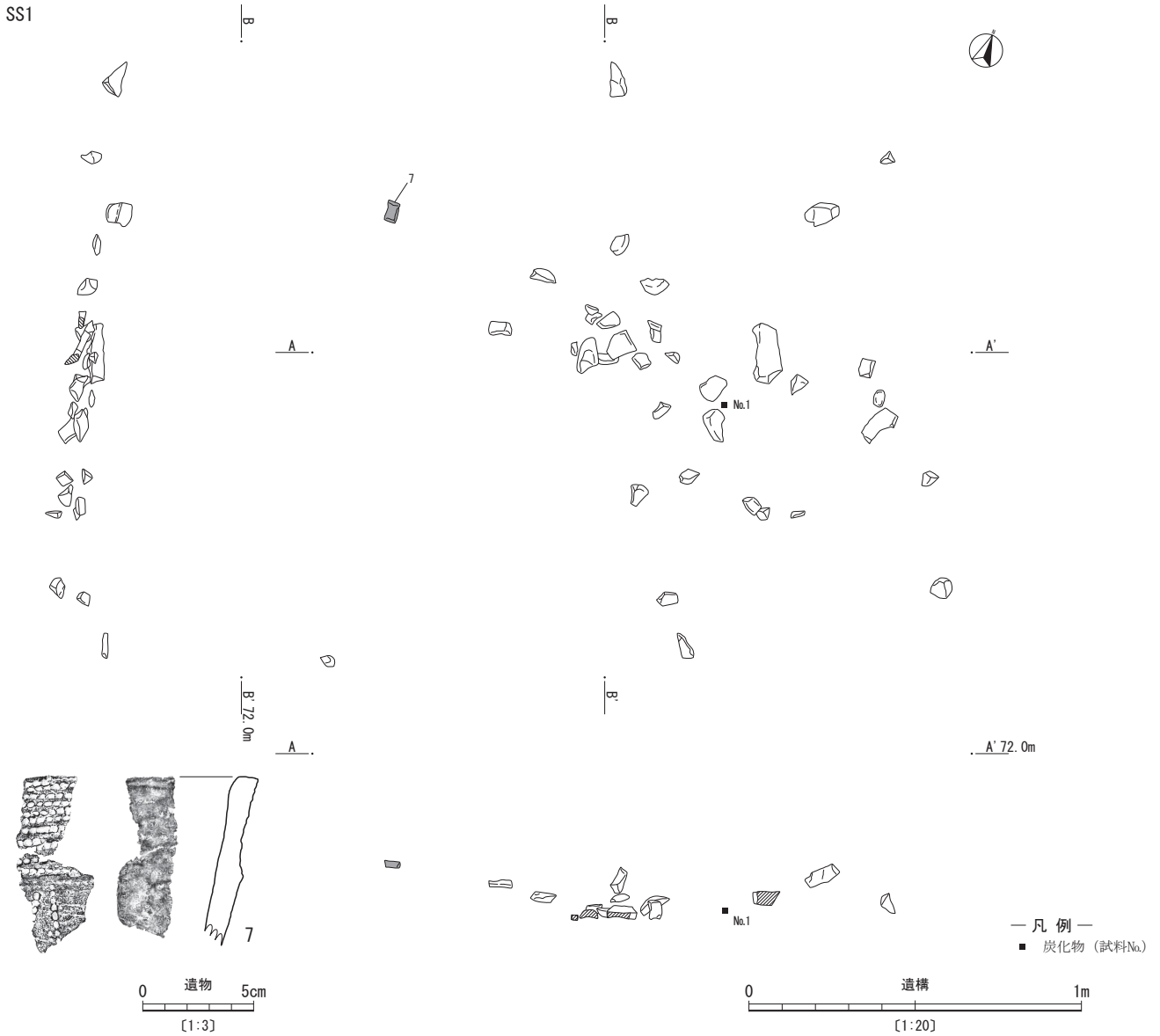
##### 土坑3号(第15図)

E・F-6区のVIIIa層上面で検出された。平面は不整形で、検出面での大きさは約90×80cm、底面は平坦で、



SS: 集石遺構 SK: 土坑

第13図 縄文時代早期の遺構配置図



第14図 集石遺構と出土土器

第4表 縄文時代早期の集石遺構出土土器観察表

挿図 番号	掲載 番号	出土区	層位	取上 番号	型式	器種	部位	外面 (調整・文様)	調整	色調		胎土			焼成	備考
									内面	外面	内面	白石	石英	黒石		
14	7	F8	VII b	91	下剥峯	深鉢	口縁～ 胴部	口縁から突帯まで横方向の二枚貝押圧, 胴下綾杉状二枚貝押圧	丁寧な横ナデ	にぶい褐	にぶい赤褐	○	○		普通	

深さ約30cmである。埋土は黄橙色パミスを多く含むVIIa層土と考えられる黒褐色土で、部分的に茶褐色土が含まれる。

#### 土坑4号 (第15図)

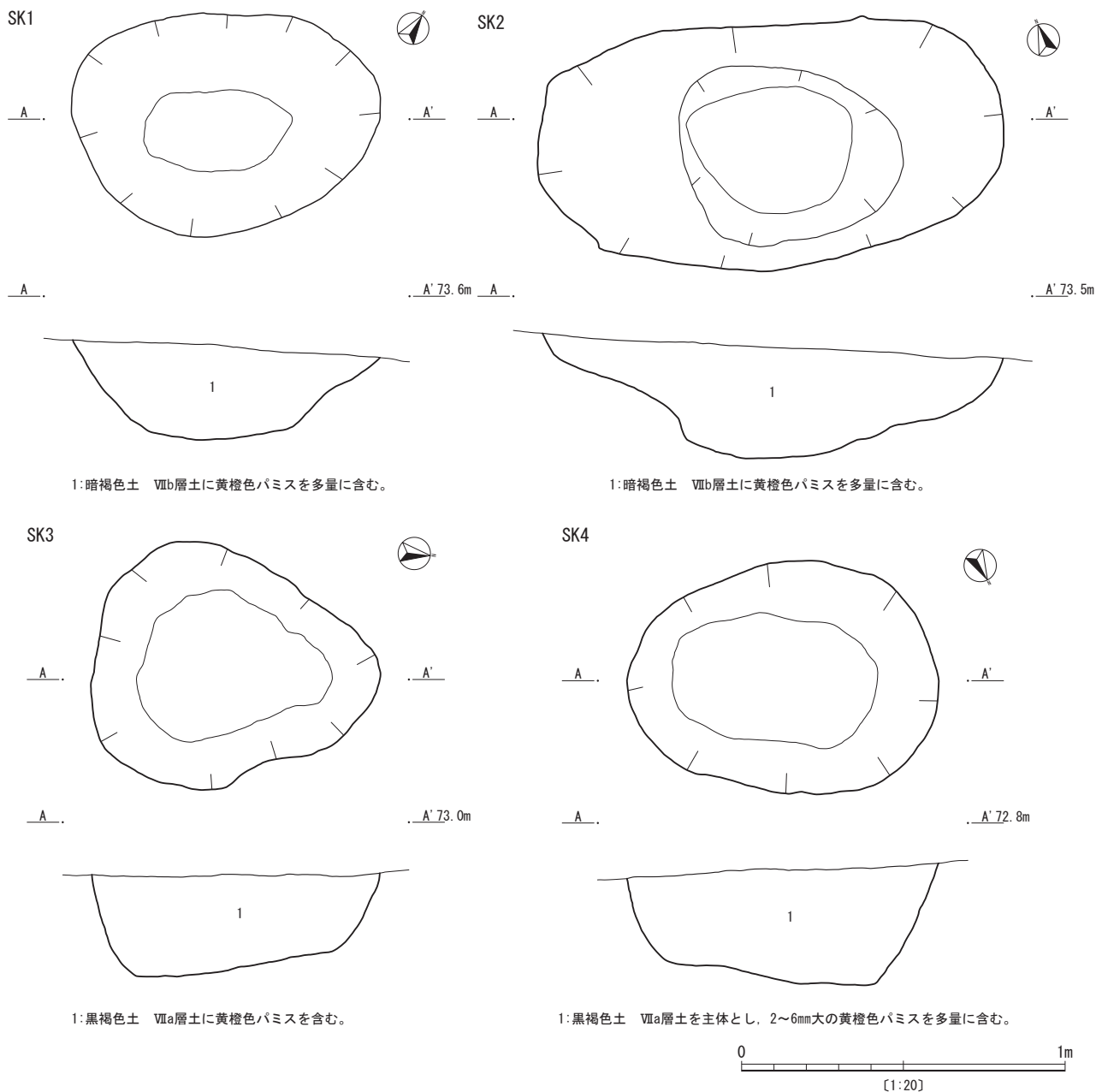
E-6区のVIIIa層上面で検出された。平面は楕円形で、検出面での大きさは約95×70cm、底面は北側がやや深く、深さは30～40cm程度である。埋土は黄橙色パミスを多く含むVIIa層土と考えられる黒褐色土で、部分的に茶褐色土の部分が見られる。

#### 土坑5号 (第16図)

E-6区のVIIIa層上面で検出された。平面は不整形で、検出面での大きさは約110×80cm、底面はほぼ平坦で、深さは25cm程度である。埋土はVIIa層土と考えられる黒褐色土に黄橙色パミスを多く含む。

#### 土坑6号 (第16図)

F-7区のVIIIa層上面で検出された。平面はやや不整形な隅丸方形で、検出面での大きさは約75×50cm、底面はほぼ平坦で、深さは20cm程度である。埋土は黒褐色土で底面付近は茶褐色が強く、全体的に黄橙色パミスを多量に含んでいる。



第15図 土坑1号～4号

**土坑7号 (第16図)**

F-8区のVIIb層上面で検出された。平面はやや張り出しをもつ円形で、検出面での大きさは約70×60cm、底面に向け播鉢状に狭まり、径30cm程度の底面をもつ。深さは25cm程度である。埋土は茶褐色土で黄橙色パミスを多量に含んでいる。

**土坑8号 (第16図)**

F-9区のVIIb層上面で検出された。平面は楕円形で、検出面での大きさは約95×65cm、底面は40×20cm程度の大きさで、深さは30cm程度である。埋土はVIIa層土で、黄橙色パミスを多量に含む。

**土坑9号 (第16図)**

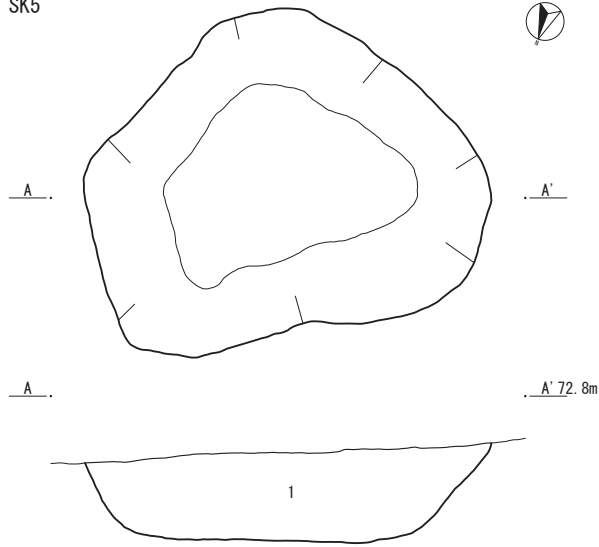
F-9区のVIIIa層上面で検出された。平面は楕円に近

い不整形で、検出面での大きさは約140×80cmである。中央に突出部があるため、底面は凹字形となり、深さは25cm程度である。埋土は黒褐色土で、全体に黄橙色パミスを含んでいる。

**土坑10号 (第16図)**

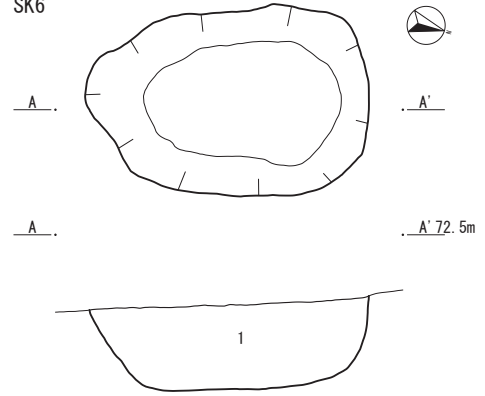
G-11区で検出された。北西側はVIIb層上面、南東側はVIIIa層まで掘り下げた後に検出されている。平面は楕円形で、VIIb層上面での大きさは約100×70cmと推測される。深さは40cm程度で、底面の南東側が深くなっている。埋土は暗褐色土で、黄橙色パミスを多く含み、所々に薩摩火山灰と思われる明黄褐色のブロックを含んでいる。

SK5



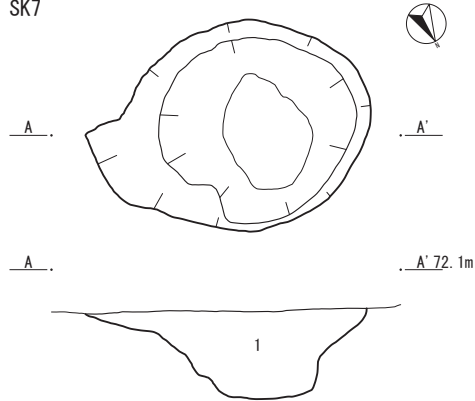
1: 黒褐色土 VIIa層土に2~5mm大の黄色パミスを多く含む。

SK6



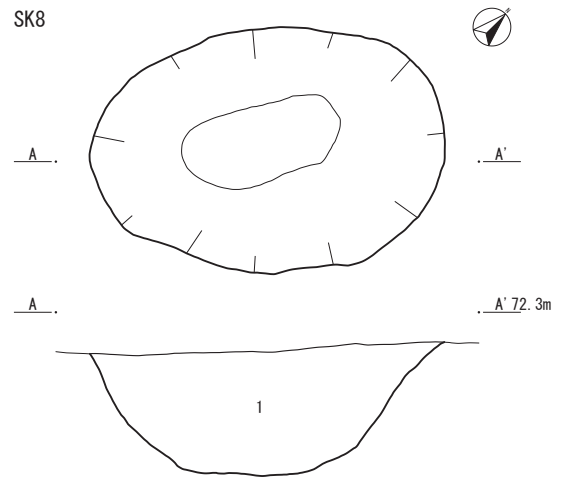
1: 黒褐色土 VIIa層土に黄橙色パミスを多量に含む。所々に茶褐色ブロックを含む。

SK7



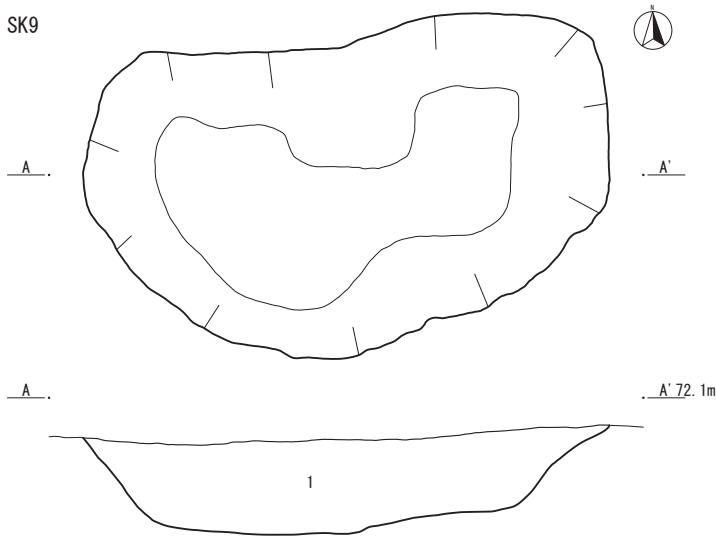
1: 茶褐色土 VIIa層土に2~7mmの黄橙色パミスを多く含む。

SK8



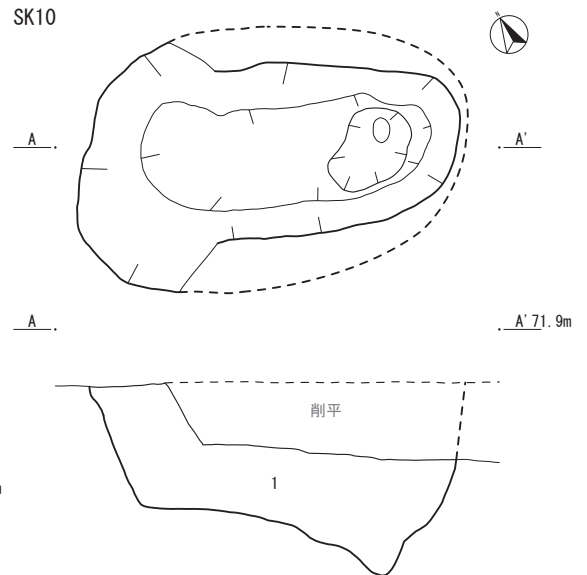
1: 黒褐色土 VIIa層土に黄色パミスを多く含む。

SK9

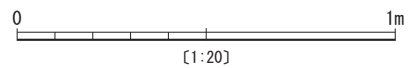


1: 黒褐色土 VIIa層土に黄橙色パミスを含む。

SK10



1: 暗褐色土 (10YR3/3) 黄橙色パミスを多く含む。暗黄褐色ブロックを含む。



第 16 図 土坑 5 号~10 号



### 3 遺構外出土土器

#### (1) 概要

縄文時代早期の土器は18点あり、そのほとんどはVIIa層とVIIb層で出土している。個体数は少なく、型式は吉田式土器・下剥峯式土器・縄文系土器の3種である(第17図)。

#### (2) 出土土器

##### 吉田式土器(第18図8)

G-9区VIIb層で1個体分出土している。口縁直径12.0cmの円筒形をした小型深鉢である。口縁へ向かって開きながらまっすぐ伸び、端部はやや丸みをおびて分厚い作りである。内外とも丁寧な横ナデ仕上げである。外面は2段の横方向貝殻押し文があり、その間には長さ3cmほどの縦方向押し文がみられる。

##### 下剥峯式土器(第18図9~16)

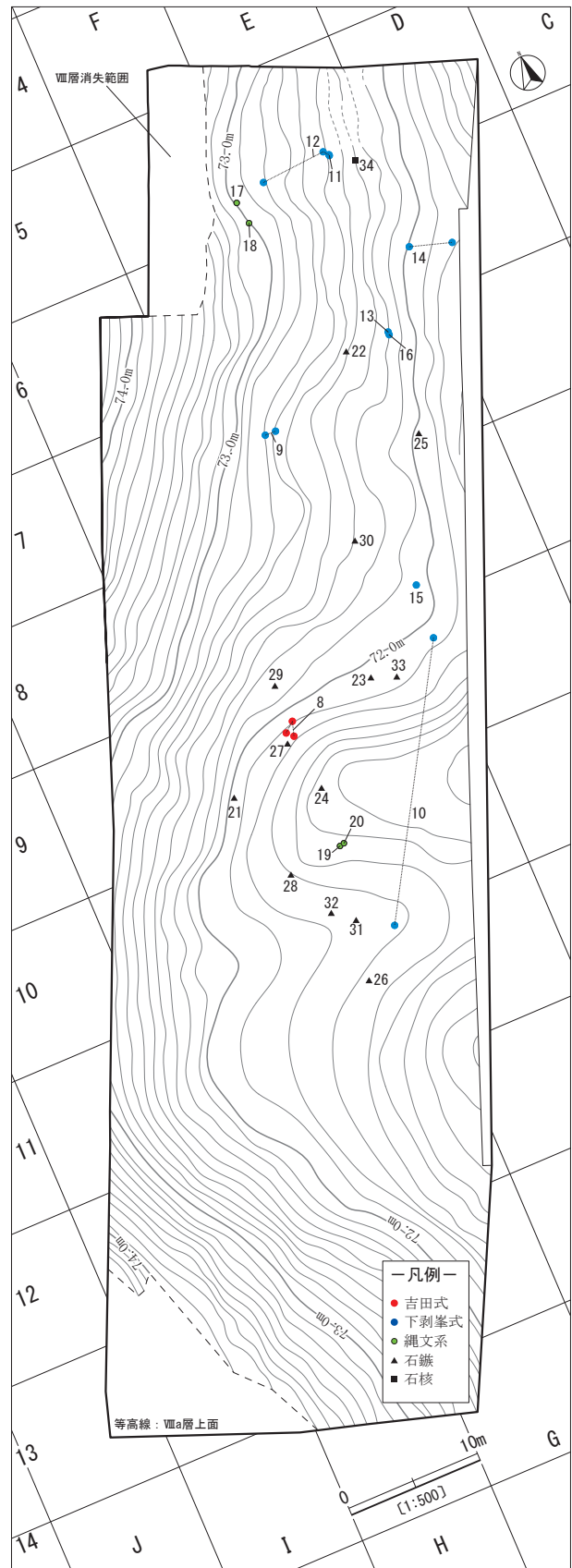
胴部から外へ開きながら立ち上がり、口縁部近くでややふくらみ、さらに外へ開く器形をしている。口縁近くは横方向、胴部は鋸歯様の貝殻押し文が施されている。色調は褐色、にぶい褐色を呈するものが多く、黄色っぽいもの、黒っぽいものもある。胎土には石英が多く含まれ、他に黒色石・白色石・長石などもある。焼成度は普通だが、15は硬質である。

9は口縁直径28.4cmと大型の深鉢で、磨耗が著しい。内面は横ナデで、外面は口縁部と胴部の間に突帯があり、突帯の上は6~7段の貝殻腹縁による横方向押し文が、下は3条の鋸歯様の押し文が施されている。口唇部は矩形を呈し、胴に向かって細くなっている。10も9と同じような器形を呈し、口縁直径は30.4cmと大きい。外面には7段の横方向二枚貝押し文が施されている。11・12は横方向の二枚貝腹縁押し文が9段ほどあり、厚さが違うが、文様・色調・胎土などからして同一個体と思われる。13・14は突帯付近の破片で、上が横方向、下が鋸歯様の二枚貝腹縁押し文がみられる。15・16は突帯より下の破片で鋸歯様の二枚貝押し文がみられる。

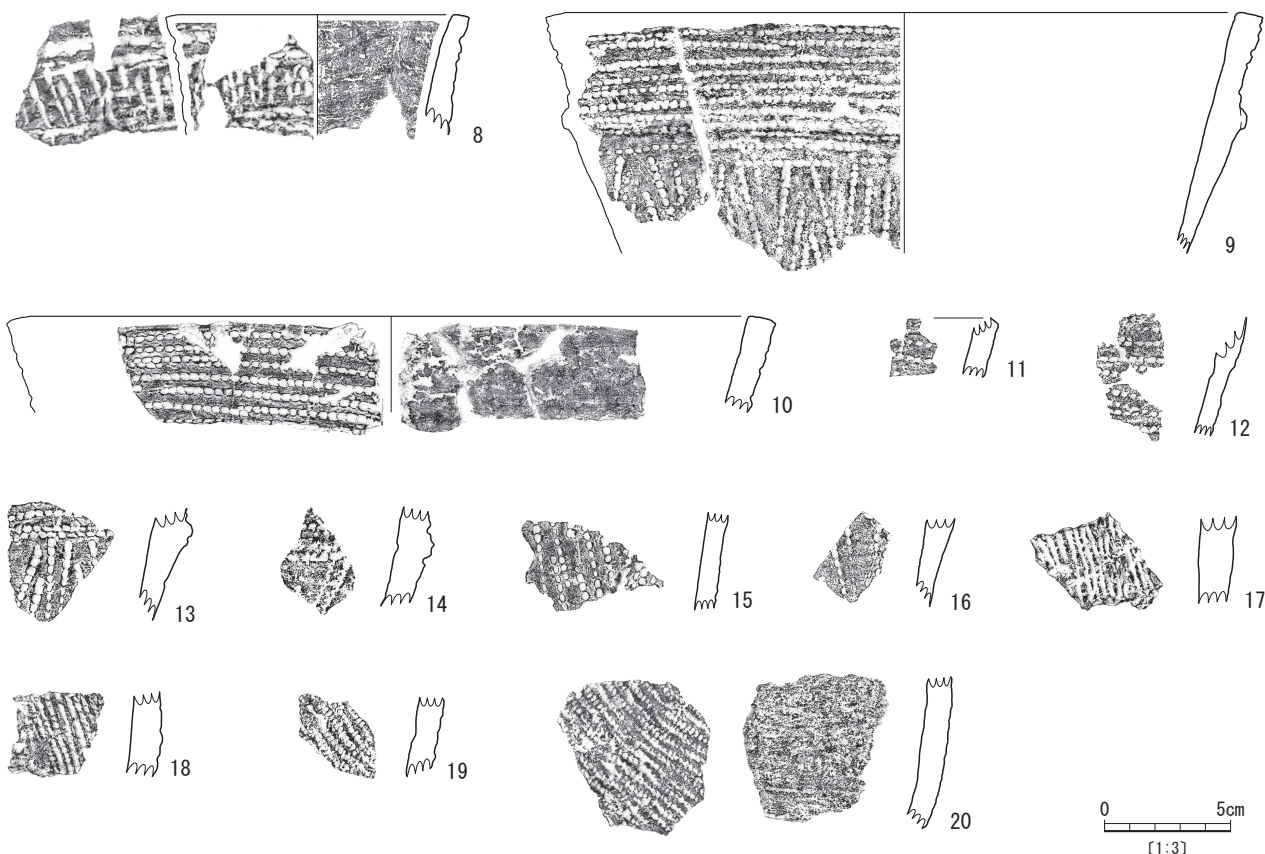
##### 縄文系土器(第18図17~20)

胴部の破片が4点あり、全体に撚糸文、あるいは縄文が転がされている。石英・白色石・黒色石などを含み、焼成は良好である。

17・18は外面に撚糸文を縦方向に転がしており、内面は縦ナデで仕上げている。外面は明赤褐色、内面はにぶい褐色を呈している。17は厚めの器厚で五十市式土器に近い。19・20の外面はRL縄文を横に近い左下がり方向に転がしており、内面は横ナデ調整である。外面はにぶい橙色、内面は浅黄褐色を呈している。天道ヶ尾式土器かと思われる。



第17図 縄文時代早期の遺物分布図



第 18 図 縄文時代早期の土器

#### 4 遺構外出土石器

##### (1) 概要

縄文時代早期の遺構外出土石器は合計14点であり、包含層のⅦ a 層とⅦ b 層から7点ずつ出土している。器種は打製石鏃13点を主体として、他に石核が1点ある。分布状況は、谷頭となる斜面のF・G-9・10区に石鏃が割合多くみられている。石核は離れてE-5区のⅦ b 層から出土した(第17図)。

以下、個々の特徴について述べる。実測図の並びは調査区での出土状況に関係なく、順不同である。また、石材鑑定は肉眼観察による。

##### (2) 出土石器

###### 打製石鏃(第19図21~33)

13点図化し、Ⅰ~Ⅲ類に形態分類を行った。

Ⅰ類：平基で、正三角形に等しい長幅比のもの

21の1点のみである。石材は黒曜石で、入念に突出させた先端部の作りが特徴的である。

Ⅱ類：凹基で、正三角形にほぼ等しい長幅比のもの

22~28の7点がみられる。石材は、23~25・28が黒曜石、22・26は緻密安山岩、27はチャートである。形態は、基部の挟入が弧状に浅いものが多く、27・28はやや深い挟入を有する。また、特に23は尖鋭な先端部を有する。

Ⅲ類：凹基で、二等辺三角形の縦長の長幅比のもの

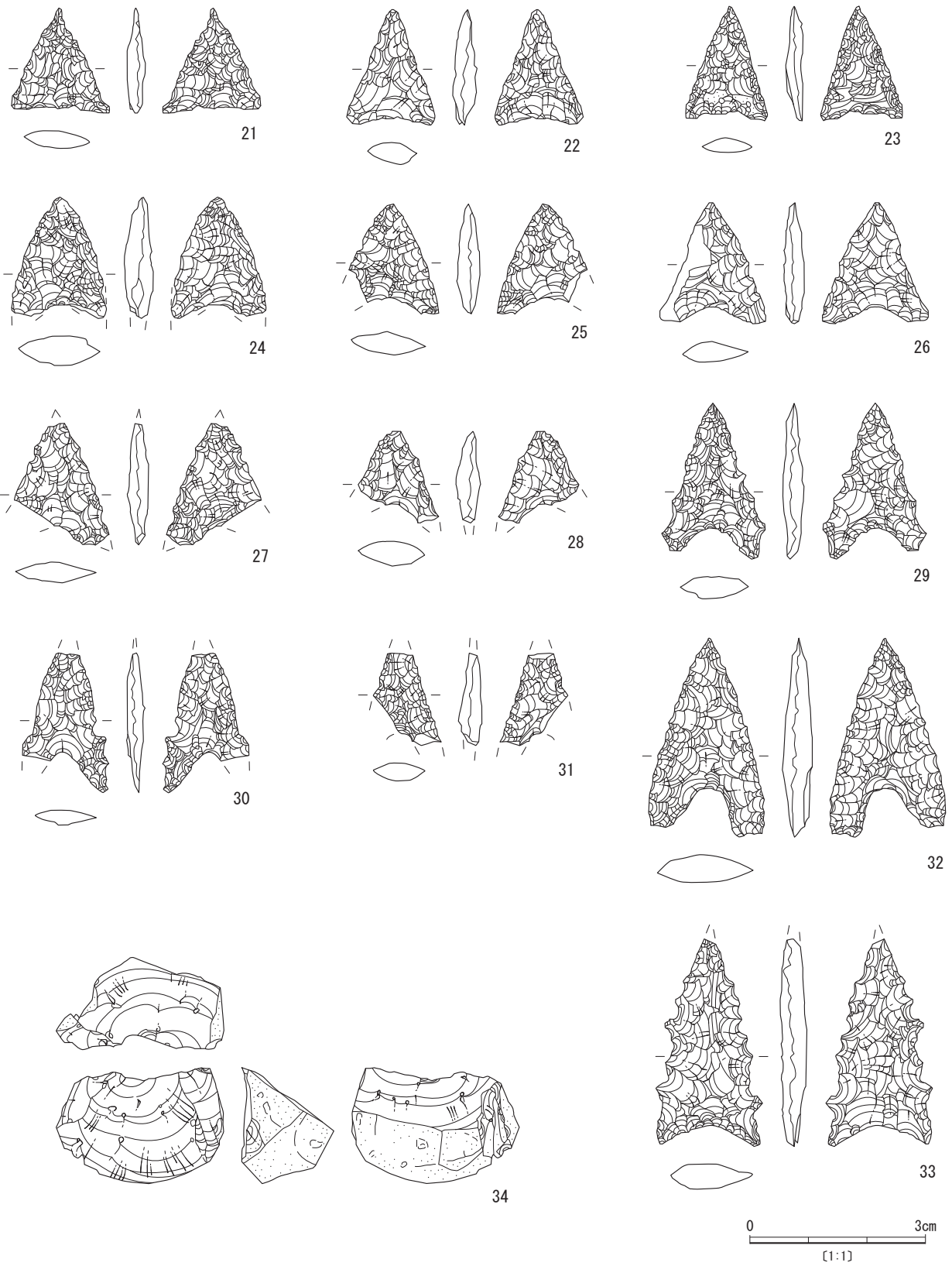
29~33の5点がみられる。石材は、29・30・32が黒曜石、31は玉髄、33はチャートである。形態は、長幅比が1.5:1及び2:1で、32・33は大型品となり、基部の挟入が弧状に浅い33の他は比較的深い挟入を有する。また、29・30は基部の側縁が屈曲した特徴があり、他に33は両側縁が鋸歯縁となる粗い調整剥離が施されている。

欠損については、24・25・27・28・30・31・33には先端部や脚部に破損がある。このうち27・28は先端に対向方向から生じた砕けがみられ、30では先端の折れ面から生じた小剥離面がみられる。おそらくは使用による衝撃剥離痕と考えられる。

石材では、石材別による形態差といった傾向はうかがわれず、13点中8点を占める黒曜石が主要石材となっている。そのうち21・23は桑ノ木津留産、24は上牛鼻産、25・29は針尾産、28・30・32は姫島産とみられ、多様性がある。

###### 石核(第19図34)

34はやや不透明な黒曜石製で、単剥離面を打面として、正面から不定形剥片を剥離した残核である。小礫を素材としており、裏面に丸みをおびた自然面表皮を留めている。



第19図 縄文時代早期の石器

### 第3節 縄文時代中期の調査

#### 1 調査の概要

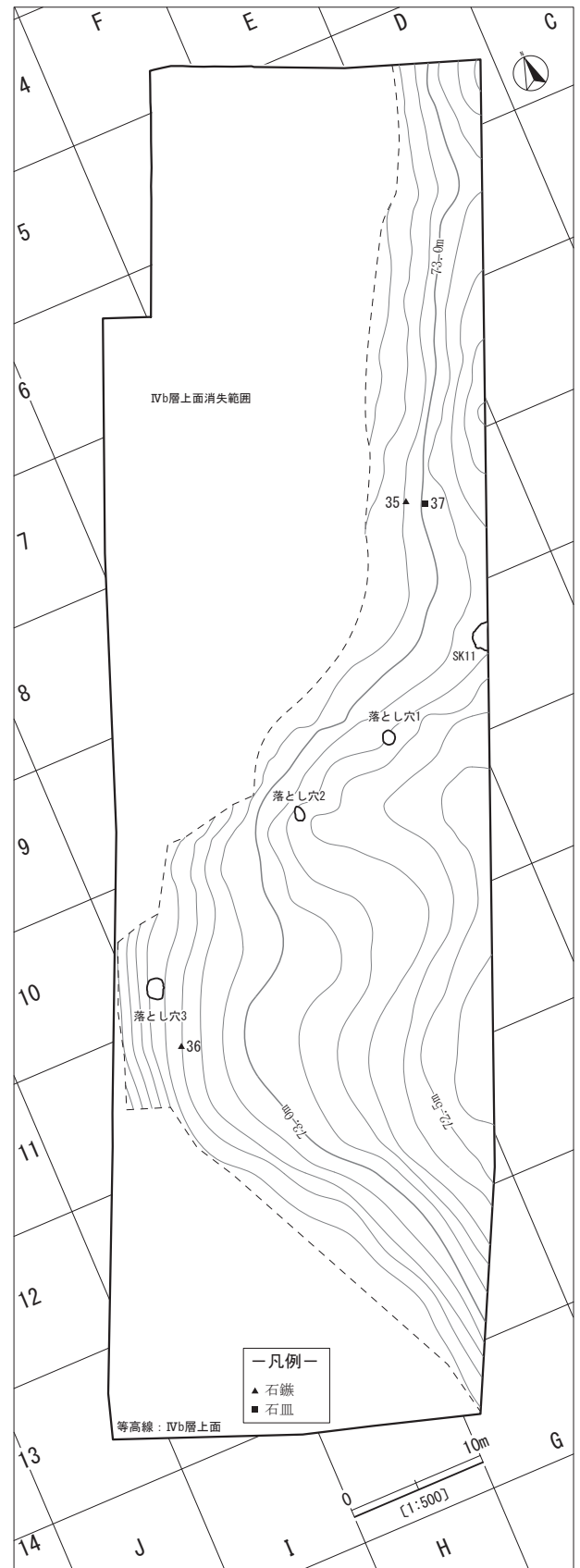
縄文時代中期の調査は、Ⅲ層を人力で取り除いた後、Ⅳa層を掘り下げて行った。Ⅳb層上面で精査を行い、土坑1基、落とし穴3基が検出された（第20図）。これらの遺構については、Ⅲ層の御池火山灰を含む層を取り除いて検出されていること、埋土に御池火山灰が含まれず、多くの池田降下軽石を含んでいることから、池田降下軽石堆積後、御池火山灰が堆積する以前の時期である縄文時代中期の遺構と判断できる。これら4基の遺構は直線状に並んでおり、埋土は極めて類似する。

遺物としては、包含層から打製石鏃と石皿が出土している。

なお、西側に隣接する東九州自動車道建設に伴う調査部分においても縄文時代中期の土坑が5基検出されている。

第5表 遺構番号振替表

新旧対応表			
時代	遺構	掲載番号（新）	調査番号（旧）
縄文時代早期	集石遺構	SS1	SS1
	土坑	SK1	SK25
		SK2	SK24
		SK3	SK14
		SK4	SK12
		SK5	SK10
		SK6	SK15
		SK7	SK9
		SK8	SK11
		SK9	SK16
SK10	SK20		
縄文時代中期	土坑	SK11	SK2
	落とし穴	落とし穴1号	SK19
		落とし穴2号	SK18
落とし穴3号		SK26	
縄文時代後期	溝状遺構	SD1	SD2
時期不明	土坑	SK12	SK1
		SK13	SK17
	溝状遺構	SD2	SD1
	硬化面	硬化面	硬化面



SK：土坑

第20図 縄文時代中期の遺構配置図及び石器分布図

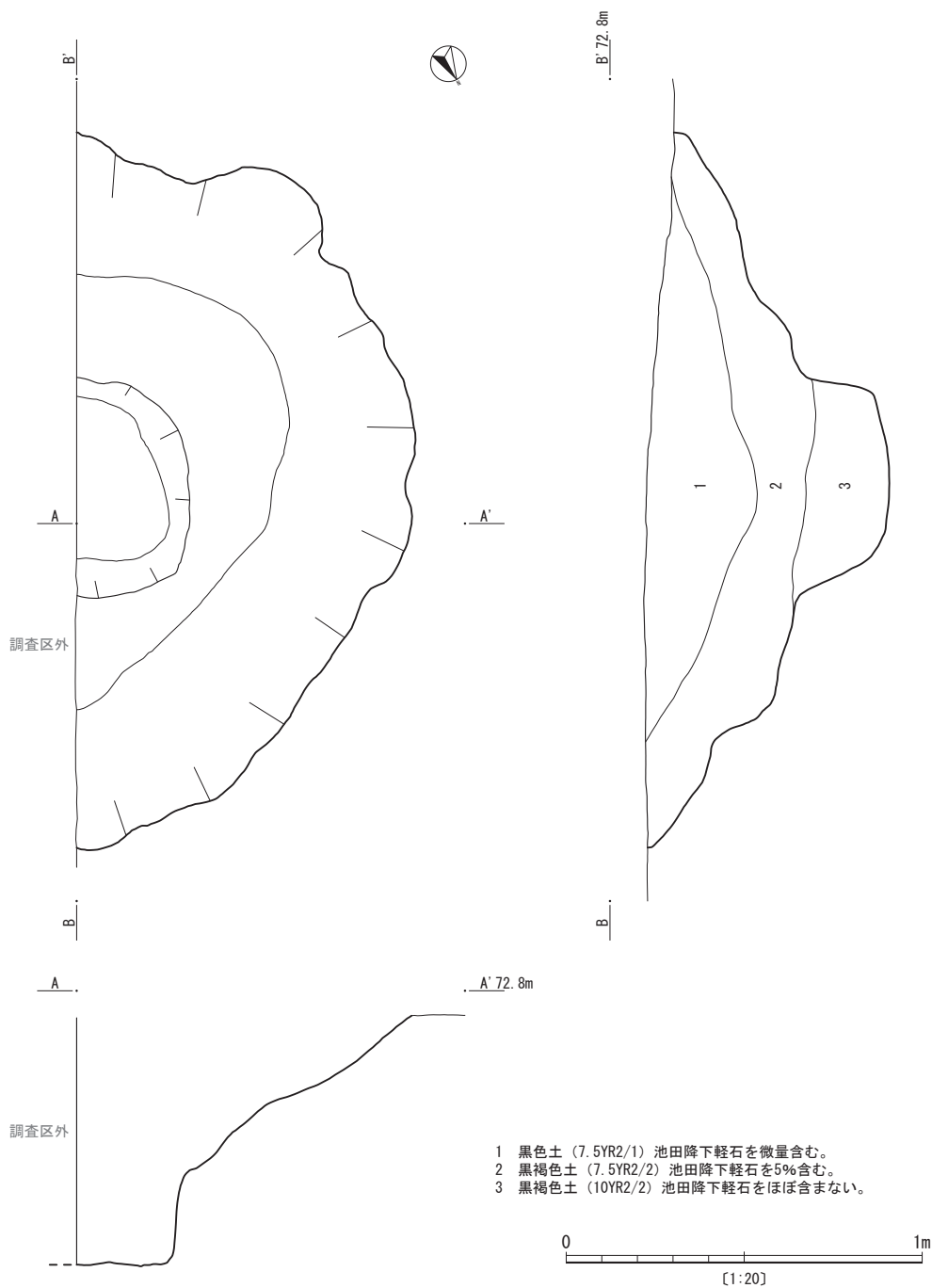
## 2 遺構

### (1) 土坑

#### 土坑11号 (第21図)

E-9区のIVb層上面で検出された。調査区境にあるため、東半分は調査対象外に延びている。平面は直径約200cm程度の円形で、中心に向け、およそ3段ほどの段

をもち強く狭まる。底面の最も深い部分まで検出面から70cm程度である。断面の観察によればⅢ層堆積前に埋没したことが確認できる。埋土は上部が黒色土で、下部や側面付近は黒褐色土となる。埋土内の池田降下軽石は、落とし穴と比較し量が少ない。



第21図 土坑11号

(2) 落とし穴

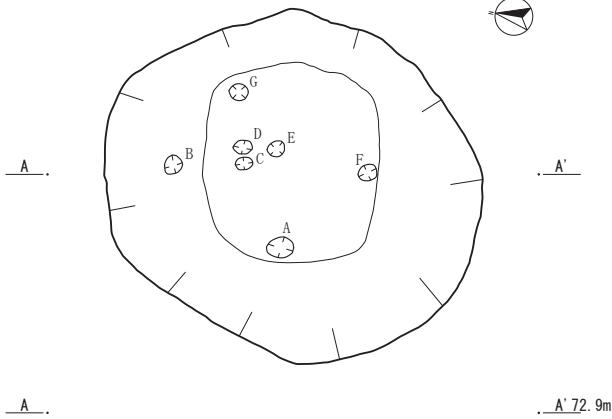
落とし穴1号 (第22図)

F-9区のIVb層上面で検出された。平面は検出面で約100×90cmの円形となる。深さは検出面から約110cmで、VIIIa層上面付近まではほぼ垂直に掘り込まれている。底面に直径3～7cmのピットが周囲に4基、中央部に3基検出され、深さは15～20cmである。いずれも逆茂木痕とみられる。埋土は、下部の埋土3・4は褐色が強く、上部の1・2は黒色が強くなる。池田降下軽石はほぼ全体に入っている。

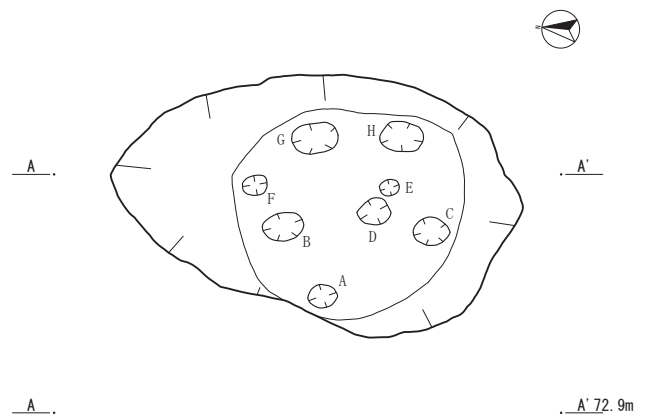
落とし穴2号 (第22図)

G-9・10区のIVb層上面で検出された。平面は約100×60cmの楕円形で、深さは検出面から約110cmで、VIIIa層上面付近まで掘り込まれている。底面では直径5～12cmのピットが8基検出され、周囲に6基、中央付近に2基みられ、深さは10～25cmとばらつきがある。いずれも逆茂木痕とみられる。埋土は、落とし穴1号と似ており、池田降下軽石を多く含み、上部は黒色が、下部は褐色が強くなる。

落とし穴1

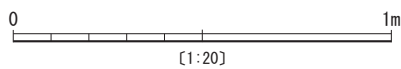


落とし穴2



- 1 黒色土 (7.5YR1.7/1) 池田降下軽石を5%含む。
- 2 黒色土 (10YR2/1) 池田降下軽石を10%含む。
- 3 暗褐色土 (7.5YR3/3) 池田降下軽石を10%含む。
- 4 暗褐色土 (7.5YR3/1) 池田降下軽石を5%含む。
- 5 明褐色土 (7.5YR5/6)

- 1 黒色土 (7.5YR1.7/1) 池田降下軽石を5%含む。
- 2 黒色土 (10YR2/1) 池田降下軽石を10%含む。
- 3 暗褐色土 (7.5YR3/3) 池田降下軽石を10%含む。
- 4 暗褐色土 (7.5YR3/1) 池田降下軽石を5%含む。
- 5 暗褐色土 (10YR3/3)
- 6 黄褐色土 (10YR5/6) 黄橙色パミスを含む。
- 7 褐色土 (10YR4/4)



第22図 落とし穴1号・2号

### 落とし穴3号 (第23図)

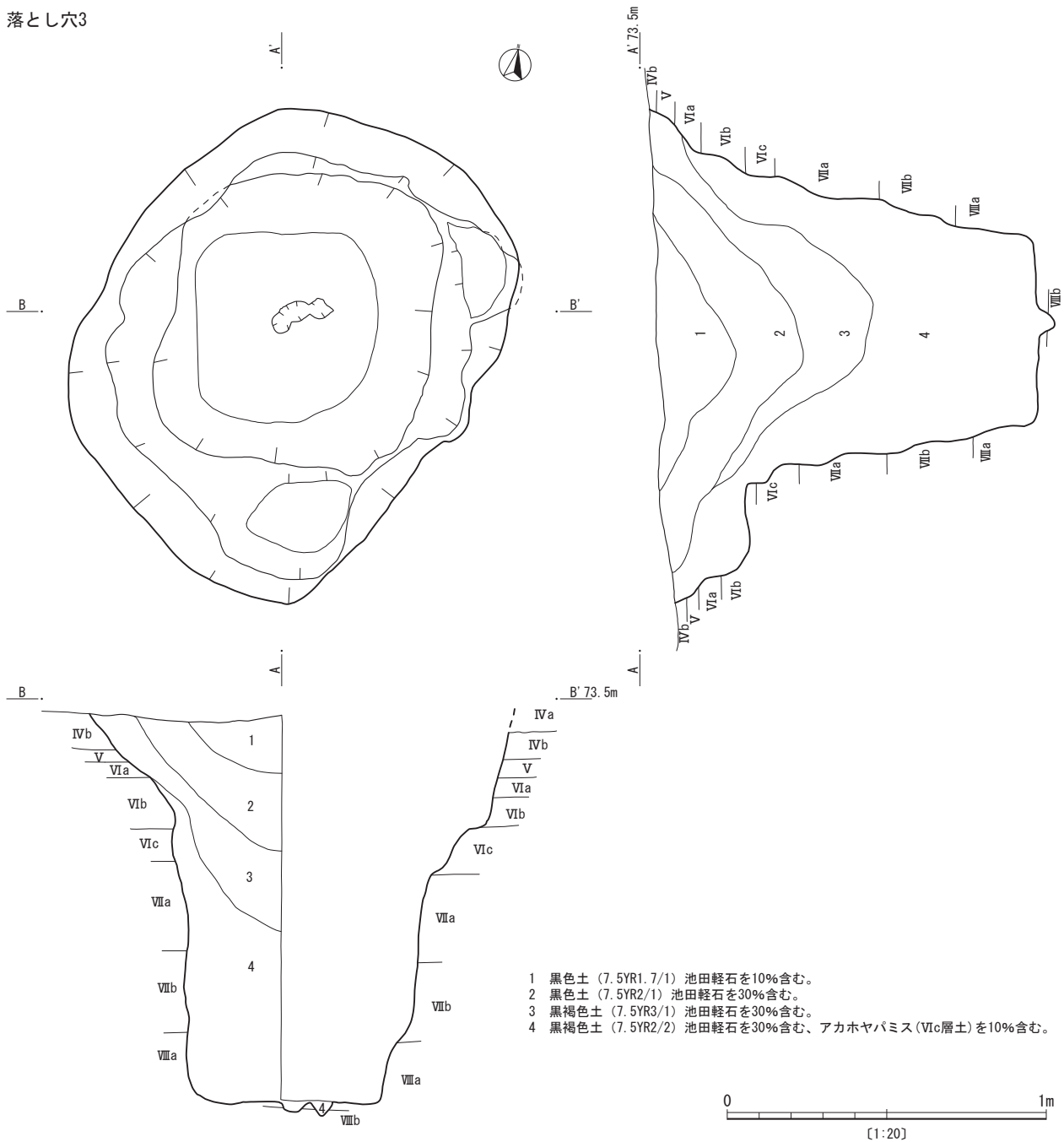
H-10区のIVb層上面で検出された。平面は約150×120cmの隅丸方形で、深さは検出面から約120cmで、VIIIa層まで掘り込まれている。地表面は東南側が低く、南側と東側にステップ状の段があることから、掘り上げの際、東南側から出入りしたと考えられる。底面の中央部でピットがつながった状態で3基検出された。下層確認を行ったが、深さが5cm程度と浅いため、逆茂木痕であったかは不明である。埋土4はアカホヤ火山灰を含むことから、埋没時に周辺にあった掘り上げ土の一部が入り込んだと考えられる。

### 3 遺構外出土石器

#### (1) 概要

縄文時代中期の遺構外出土石器は少なく3点である。器種は打製石鏃2点、石皿片1点である。分布状況は、石鏃がE-8区とH-11区のIVa層から、石皿片はE-8区のV層から出土しており、やや低く窪地にあった可能性がある(第20図)。

落とし穴3



第23図 落とし穴3号

(2) 出土石器

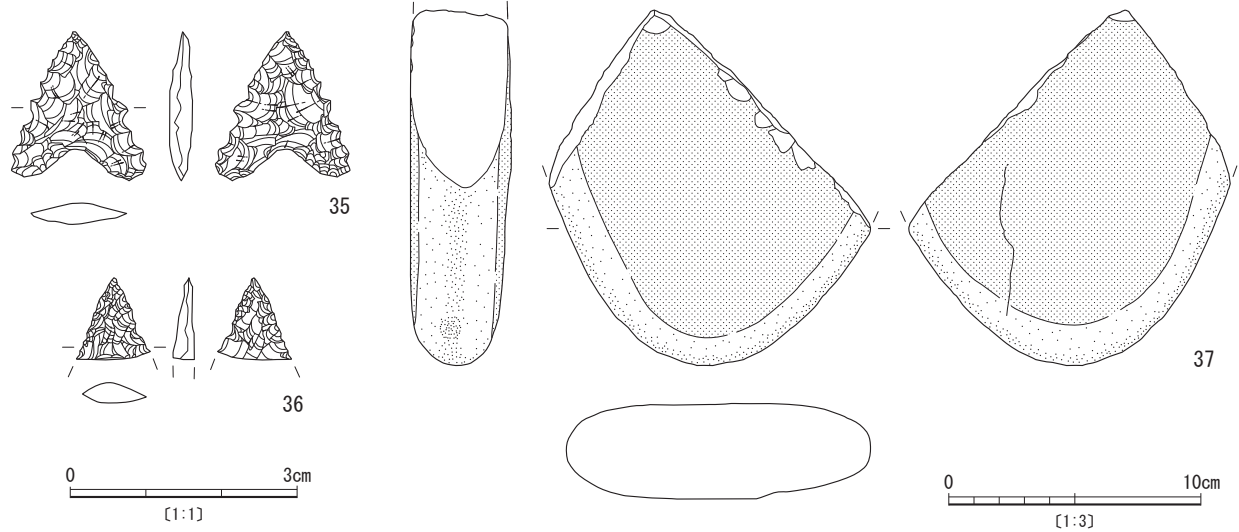
打製石鏃 (第24図35・36)

35は挟入がやや深い正三角形の長幅比に形作られ、鋭い先端部と鋸歯状の側縁を有する。緻密安山岩製である。

36は欠損した上半部で、良質の黒曜石製である。

石皿 (第24図37)

37は楕円形の平石を用いた扁平石皿の欠損品であり、表裏両面に磨り面を有する。石材はやや脆い砂岩である。



第 24 図 縄文時代中期の石器

第 6 表 縄文時代早期の土器観察表

挿入番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	型式	器種	部位	外面 (調整・文様)	口径 (cm)	調整		色調		胎土				焼成	備考
										内面	外面	内面	白	石	黒	長			
18	8	G9	VII b	1028 他	吉田	深鉢	口縁部	2 段の横方向貝殻押圧, 間に約 3 cm の縦方向押引文	(12.0)	丁寧な横ナデ	明赤褐	にぶい橙	○	○			良好		
	9	F7	VII a	18 他	下剥峯	深鉢	口縁部	口縁と胴部の間に突帯, 口縁は横方向, 胴部は鋸歯縁の二枚貝押圧	(28.4)	横ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○	○			普通	内面摩耗	
	10	E9, G11	VII ab	17 他	下剥峯	深鉢	口縁部	横方向の二枚貝押圧	(30.4)	丁寧な横ナデ	褐	にぶい褐	○	○	○		普通		
	11	E5	VII a	1061	下剥峯	深鉢	胴部	横方向の二枚貝押圧	—	ナデ	褐	褐	○	○			普通	同一個体	
	12	E5	VII ab	1054 他	下剥峯	深鉢	口縁部	横方向の二枚貝押圧	—	丁寧な横ナデ	にぶい褐	灰褐	○	○	○		普通		
	13	E7	VII a	16	下剥峯	深鉢	胴部	口縁～突帯は横方向, 胴部は鋸歯縁の二枚貝押圧	—	斜めナデ	にぶい褐	灰褐	○	○	○		普通		
	14	D・E6	VII ab	11 他	下剥峯	深鉢	胴部	口縁～突帯は横方向, 胴部は鋸歯縁の二枚貝押圧	—	丁寧なナデ	にぶい黄橙	にぶい黄	○	○	○	○	普通		
	15	E8	VII b	35	下剥峯	深鉢	胴部	綾杉状二枚貝押圧	—	丁寧な横ナデ	黒	灰褐	○	○			良好	焼成硬質	
	16	E7	VII a	15	下剥峯	深鉢	胴部	綾杉状の貝殻押圧	—	丁寧な横ナデ	褐	にぶい褐	○	○	○		普通		
	17	F5	VII a	1052	—	深鉢	胴部	撚糸	—	縦ナデ	明赤褐	にぶい褐	○	○	○		良好		
	18	F6	VII a	1060	—	深鉢	胴部	撚糸	—	縦ナデ	明赤褐	にぶい褐	○	○			良好		
19	G10	VII b	1021	—	深鉢	胴部	縄文 RL	—	横ナデ	橙	黒褐	○	○			良好			
20	G10	VII b	1020	—	深鉢	胴部	縄文 RL	—	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○		普通			

第 7 表 縄文時代早期の石器観察表

挿入番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
19	21	G9	VII b	2100	石鏃	1.76	1.65	0.30	0.6	黒曜石	
	22	E7	VII a	47	石鏃	1.95	1.50	0.40	0.8	緻密安山岩	
	23	F9	VII b	97	石鏃	1.93	1.40	0.30	0.5	黒曜石	
	24	G9	VII a	1024	石鏃	(2.05)	(1.60)	0.50	(1.4)	黒曜石	
	25	E7	VII a	37	石鏃	(1.83)	(1.50)	0.40	(0.8)	黒曜石	
	26	G11	VII b	1005	石鏃	(2.05)	(1.82)	0.35	(0.9)	緻密安山岩	
	27	G9	VII b	1049	石鏃	(2.05)	(1.60)	0.35	(0.8)	チャート	
	28	G10	VII a	1046	石鏃	(1.54)	(1.35)	0.43	(0.5)	黒曜石	
	29	G9	VII a	94	石鏃	2.62	1.77	0.38	1.0	黒曜石	
	30	F8	VII b	88	石鏃	(2.37)	1.49	0.30	(0.7)	黒曜石	
	31	G10	VII b	992	石鏃	(1.56)	(1.16)	0.40	(0.5)	玉髓	
	32	G10	VII a	951	石鏃	3.38	1.98	0.50	2.2	黒曜石	
	33	F9	VII a	30	石鏃	(3.52)	1.84	0.45	2.5	チャート	
	34	E5	VII b	1058	石核	2.00	2.85	1.55	7.0	黒曜石	

第 8 表 縄文時代中期の石器観察表

挿入番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
24	35	E8	IV a	6	石鏃	1.95	1.80	0.30	0.7	緻密安山岩	
	36	H11	IV a	2025	石鏃	(1.06)	(0.96)	(0.27)	(0.2)	黒曜石	
	37	E8	V	5	石皿	(14.00)	(12.73)	4.10	(891.1)	砂岩	



## 第4節 縄文時代後期の調査

### 1 調査の概要

縄文時代後期の調査は、表土を取り除き、Ⅱ層が残存している調査区東側部分を中心に人力で掘り下げて行った。この時期が、本遺跡で最も遺物数が多い。

土器は岩崎上層式・丸尾式・辛川式・納屋向タイプ・西平式・中岳Ⅱ式土器などが、石器は石匙や石錐・打製石斧・磨石が出土している。遺構は、東西に延びる溝状遺構が1条検出された。なお、この遺構は西側に隣接する調査センター調査区において検出されている溝状遺構1号とつながる位置にあり、形状や出土遺物もほぼ類似することから、連続する遺構と考えられる(第26図)。

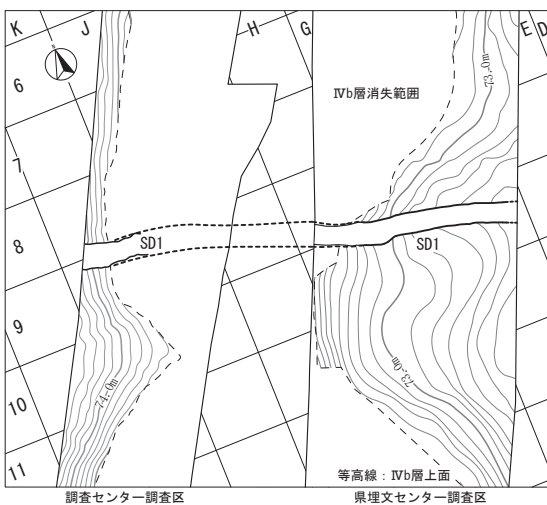
### 2 遺構

#### (1) 溝状遺構

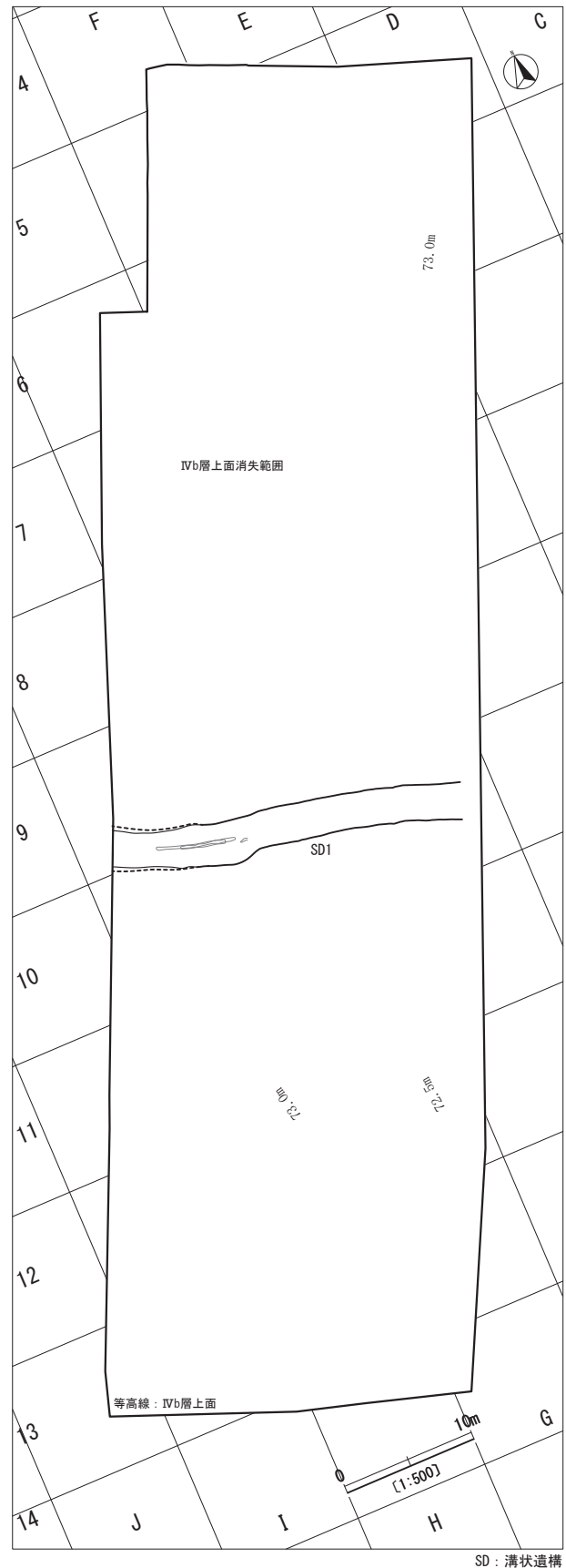
##### 溝状遺構1号(第25図)

F～H-9・10区で検出された。ほぼ直線的に東西に延びており、標高が高い西側はⅥ層まで削平を受けている。検出面では長さ約25.5m、幅約2.5～3mで、断面形状は深さ70cmほどの逆台形である。床面はほぼ平坦で、幅は約1.5mである。底面は西から東へ向かって下がっており、両端の比高差は1.4mある。埋土断面をみると、Ⅱ層土が堆積する途中で溝状遺構が造られている。また硬化面は2面みられ、硬化面2は底面、硬化面1は埋土3の上面に幅40cm程度で、溝状遺構の中央に広がっている。硬化面2は西側に6m程度、硬化面1は全体にわたり残存していることから、造られてから比較的早く埋土3が入り込み、その上面で長く使用されたと考えられる。

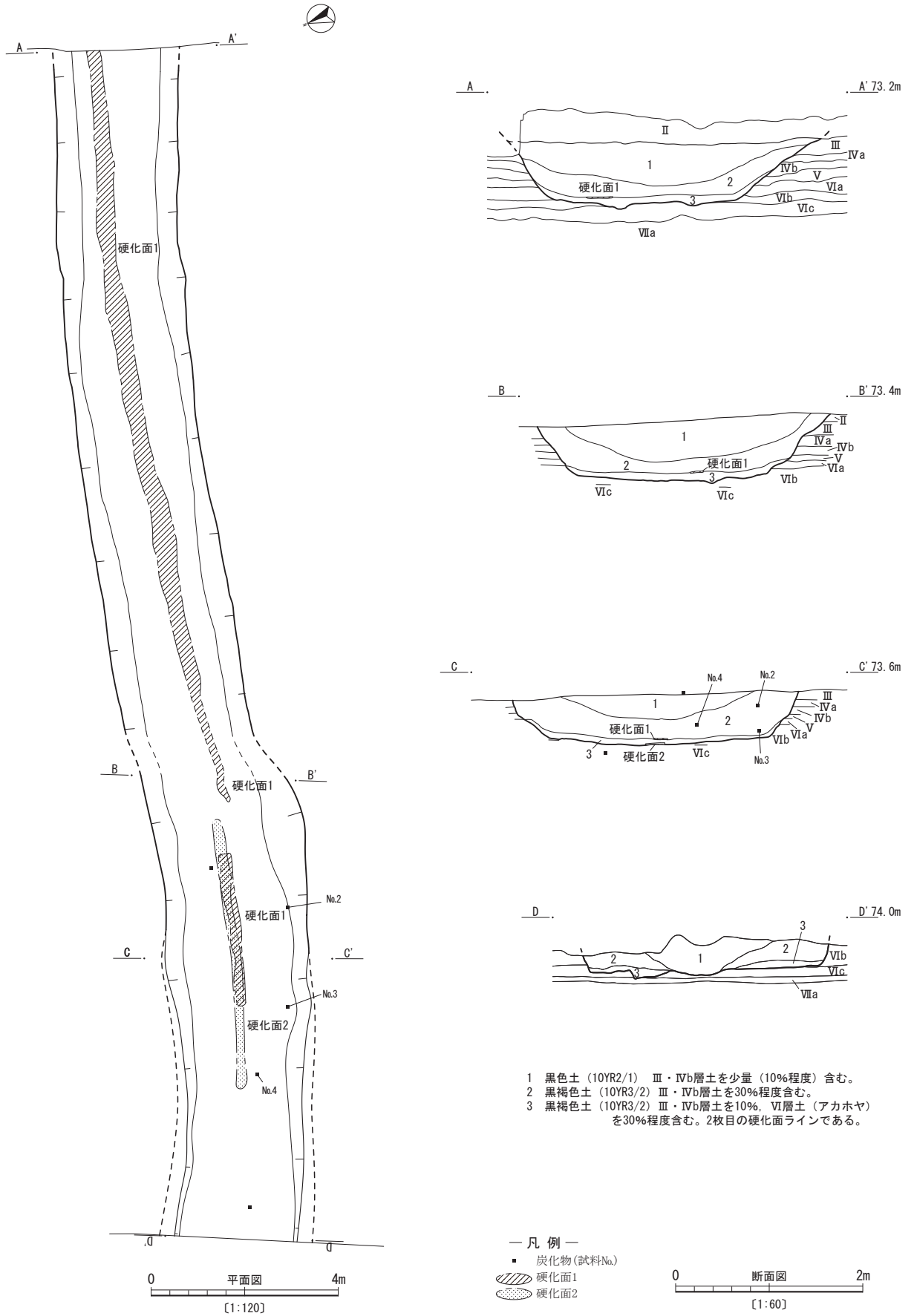
埋土1・2はⅢ・Ⅳb層土を含んでおり、周辺に置かれた溝掘り上げ土が入り込んだと考えられる。調査センター調査区において検出されている部分を含め、台地の平坦部と河川沿いの傾斜地をつなぐように造られてお



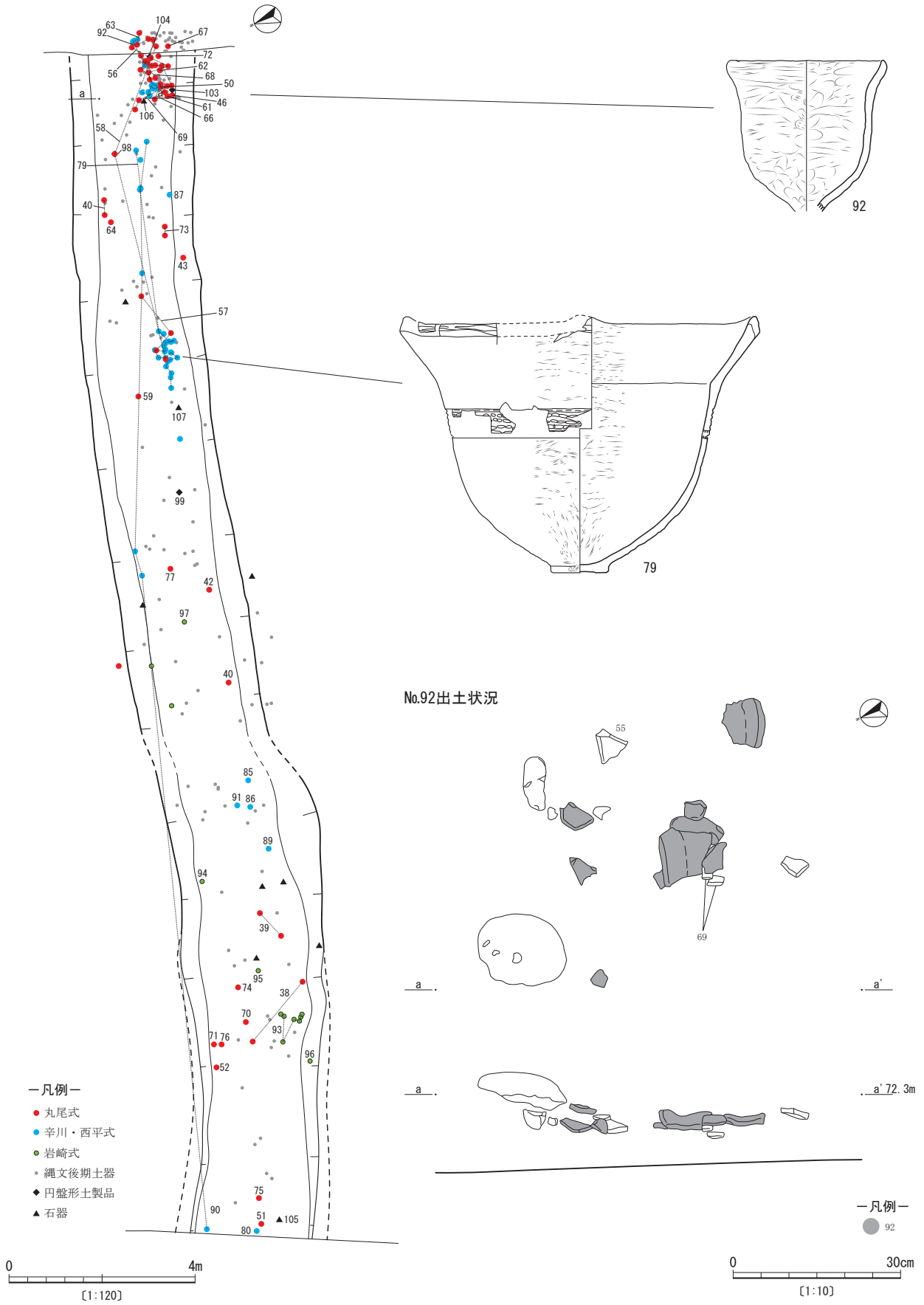
第26図 溝状遺構1号合成図



第25図 縄文時代後期の遺構配置図



第27図 溝状遺構1号



第 28 図 溝状遺構 1 号遺物出土状況

り、中央に硬化面がみられることから、台地部から河川がある低地との往来に利用された道跡と考えられる。

遺構内から土器や石器などが出土しており、東側の調査区境付近では、完形に近い深鉢も出土している(第28図)。これらの土器がすべて縄文時代後期のものであることや、床面付近の炭化物の年代測定が縄文時代後期中葉を示すこと(第5章参照)からこの時期と判断した。

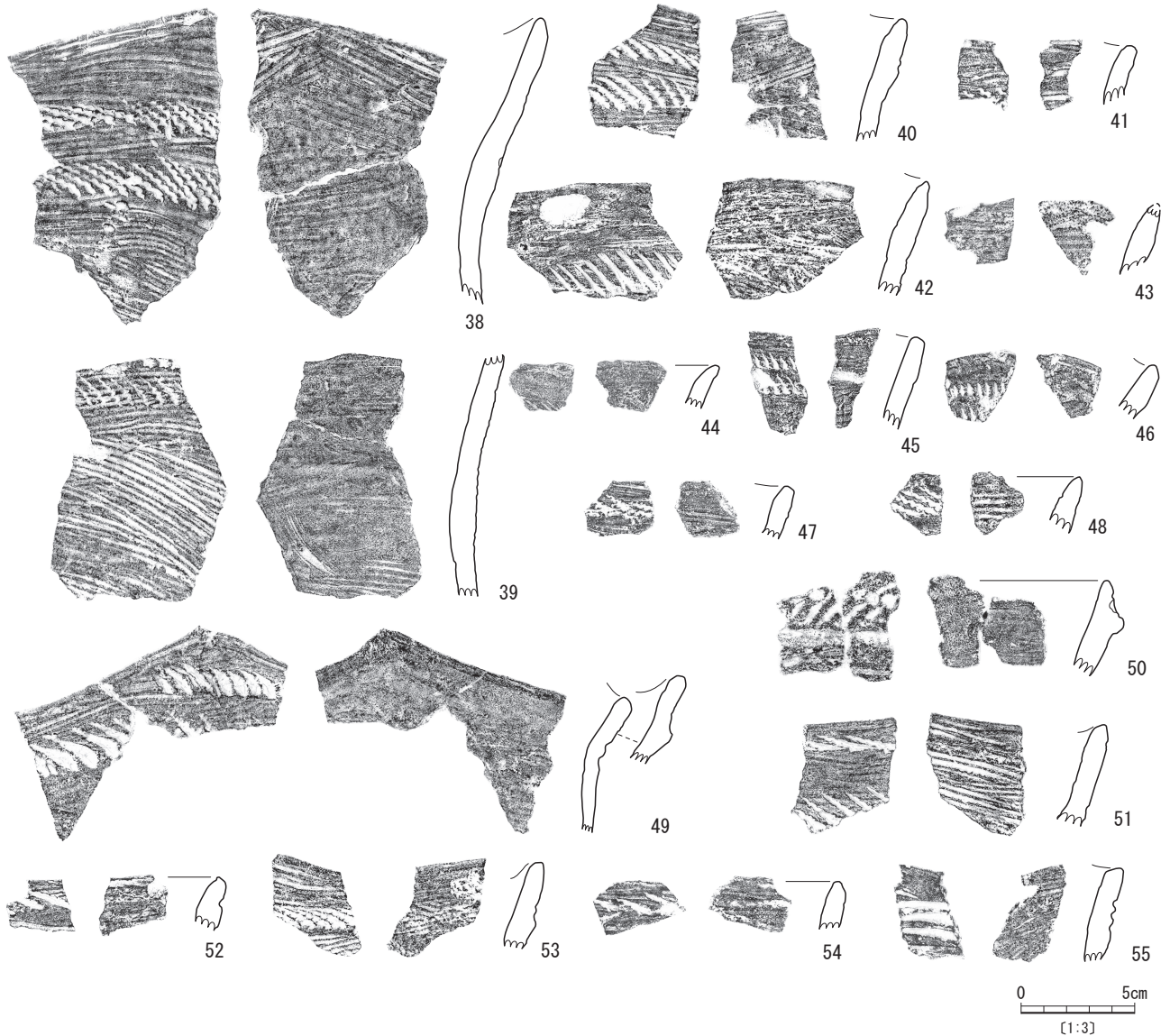
## (2) 遺構内遺物

溝状遺構1号からは438点の遺物が出土しており、そのうち69点を図化した。

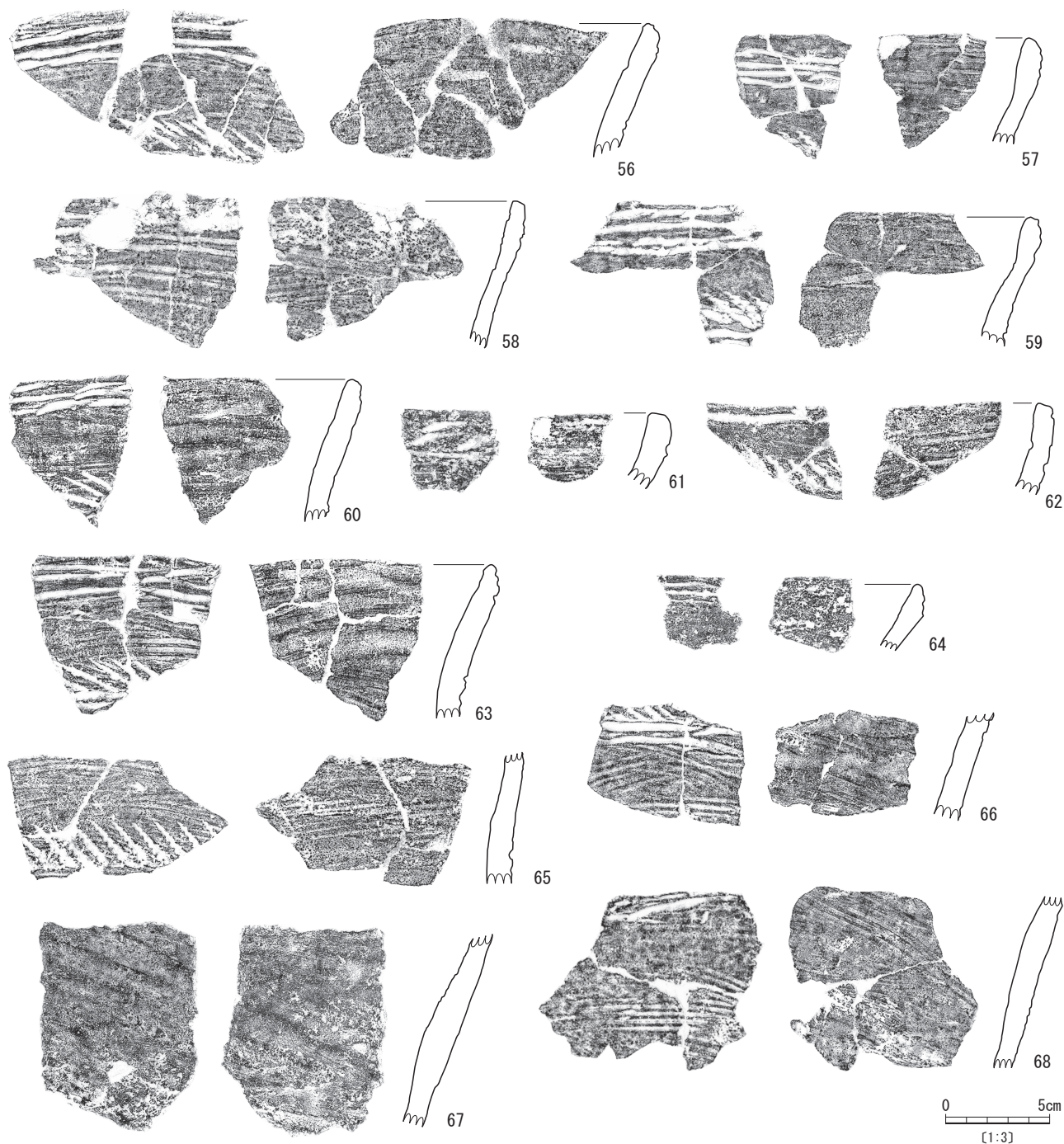
38~75は丸尾式土器の深鉢である。38~55は外傾する口縁部で、内外面とも貝殻条痕整形である。38・39は波状口縁で、屈曲部上面に長さ1.5cm程度の右下がり二枚貝貝殻刺突文が2段施されており、文様・色調などから同一個体とみられる。40は2段の貝殻刺突文の間がやや

肥厚する。41は端部で、右下がりの貝殻刺突文がわずかに残る。42は横位の沈線を引いた上に右下がりの刺突文がみられるが、工具は不明である。43は波頂部付近である。44は端部が強く外反する。45・46は貝殻刺突文の中央部をナデ消している。47は貝殻刺突が重なり合っている。48は外面に貝殻刺突文の一部が残る。49・50は波状口縁を呈し、口縁部が肥厚し逆「く」の字形となるもので、外面に貝殻刺突文が施される。51~54は右下がりの貝殻条痕がみられるもので、51・53は波状口縁で貝殻刺突文が2段、52・54は1段施される。55は横位の沈線を3条確認できる。

56~64は先端部がやや内弯するもので納屋向タイプといわれているものを含む。56~60は外面最上部に3条程度、横位の沈線を施している。線の引き方は雑で、1回転せず途切れた部分から引き直している。58以外は沈線の下に右下がり貝殻刺突文の一部が残る。61・62は口唇



第29図 溝状遺構1号出土土器(1)



第30図 溝状遺構1号出土土器(2)

部が平坦で、61は外面上部、62は残存部の下部に貝殻刺突文がみられる。63は残存部分の下部に貝殻で刺突した後、横位の沈線が施される。64は口唇部を垂直に立ち上げ、口唇部に横位の沈線を3条施している。

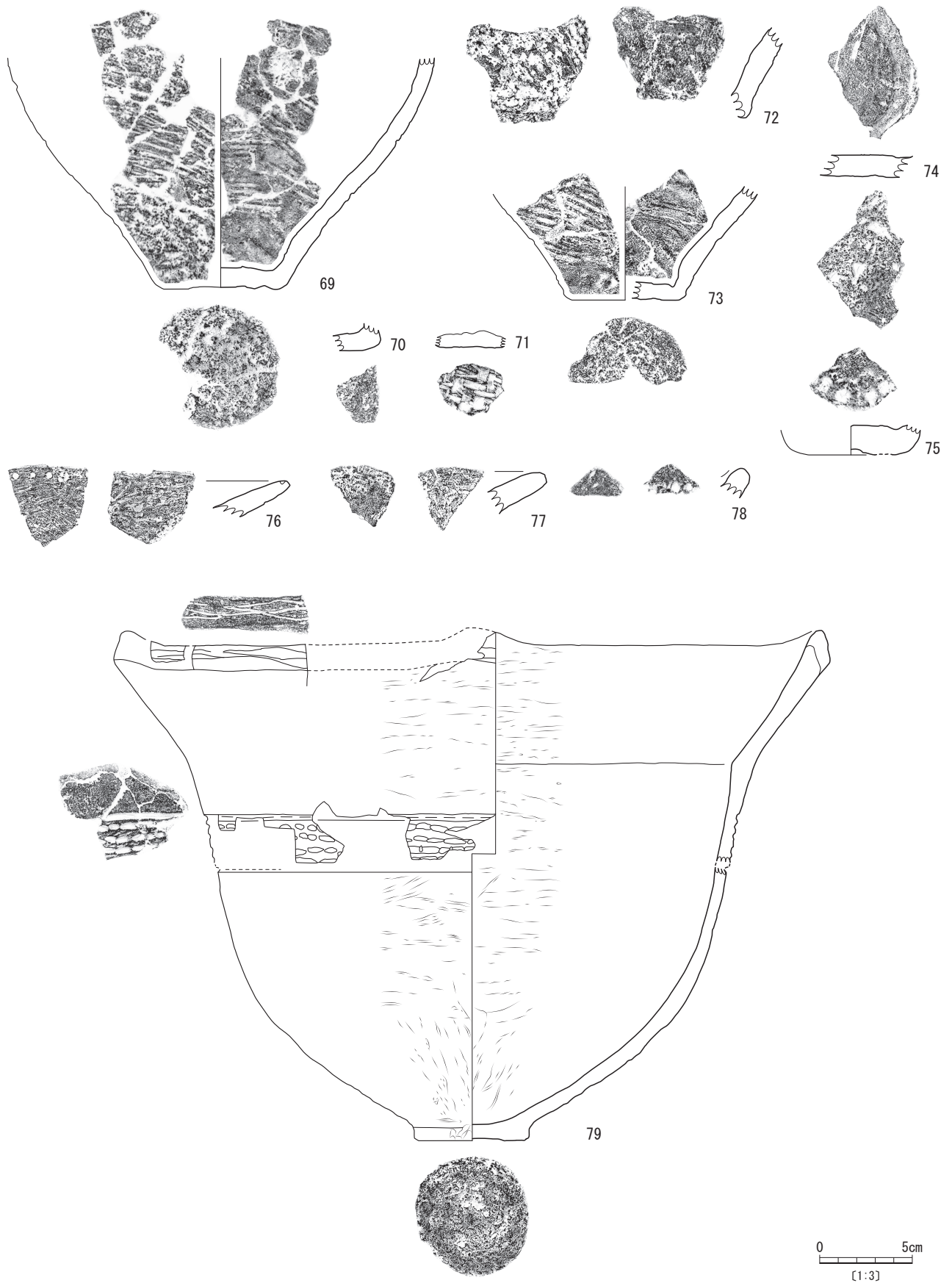
65～68は胴部である。65・66は貝殻刺突文の一部が、66・68は凹線の一部が残る。67は貝殻条痕をナデ消しており、分厚い作りだが、厚さも不規則で、雑な仕上がりである。

69～75は胴部の一部を含む底部で、69は底径6.8cmで、やや膨らみながら立ち上がる。表面の剥脱が目立つ70は

底面がナデ消し、71は硬質の網代底である。72は外面の剥離が激しいが、残存部に貝殻条痕の一部が残る。73は底径6.6cmで、内面の胴部との境付近に指で押さえた痕が残る。底に粒状圧痕が見えるが、全体は不明である。

74・75は底部内面の周縁を、74はへら状の工具で、75は指押さえで一段凹ませている。外面にはともに白粉が付着している。

76～78は丸尾式土器の台付皿形土器の口縁部である。76は口縁部内面先端に直径2～3mmの円錐状の工具で連続刺突した痕がみられるが、他は施文部分があったか



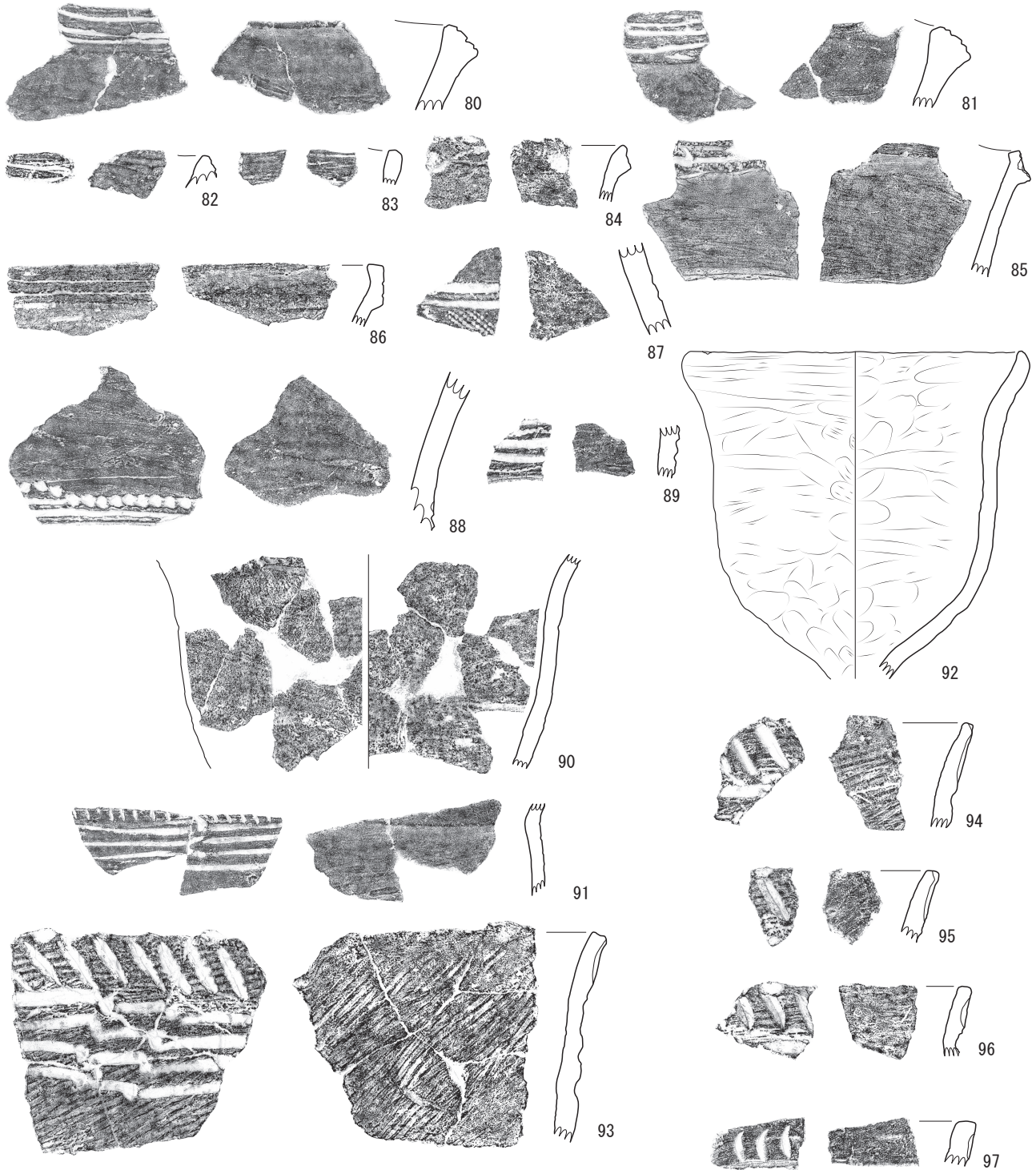
第 31 图 沟状遗構 1 号出土土器 (3)

は不明である。78は突起部である。

79～92は辛川式・西平式土器の鉢である。79は接合できないが、ほぼ完形に図上復元できたもので、内・外面とも丁寧にナデられ薄く作っており、光沢がある。口径37.6cm、高さ26.7cmで、4か所と推定される頂部をもち、口縁外面がやや肥厚し、3条の細い沈線を横位に不規則

に施している。胴部の外反部分のやや下には横位の施文が施され、上下1条ずつの沈線間に断面円形の棒状工具で押し引きした4段の文様がある。底部は底径6.2cmで、やや上げ底である。

80～83・85・86は波状口縁である。80～82は口縁部が肥厚し、口唇部に2～3条の沈線が施される。内面調整



第32図 溝状遺構1号出土土器(4)

は丁寧である。83の残存部に文様は見られない。84はやや肥厚する口縁部で、外面に左下がりの貝殻刺突文が施される。突起部がみられるが、破損しており形状は不明である。85は全体を丁寧に磨き、肥厚した口唇外面に縄文のあと2本の沈線を引き、波頂部には半竹管状の工具で刺突を施している。頸部にも沈線がみられる。86は口縁の肥厚部外面に2条の細沈線を施し、口唇部を内弯させ水平に整えている。

87~90は胴部で、87は2本の凹線の下に縄文が施される。88は数条の横沈線を引いた後、円形の棒状工具で横位に連続刺突している。89は横位の貝殻刺突文の間に2本の沈線が、90は外反する屈曲部の外面に縄文と横沈線の一部が残る。ススが多く附着している。

91は丁寧に仕上げられた肩部である。屈曲部の上に斜方向の刻み、下に横位の沈線を4条巡らせている。

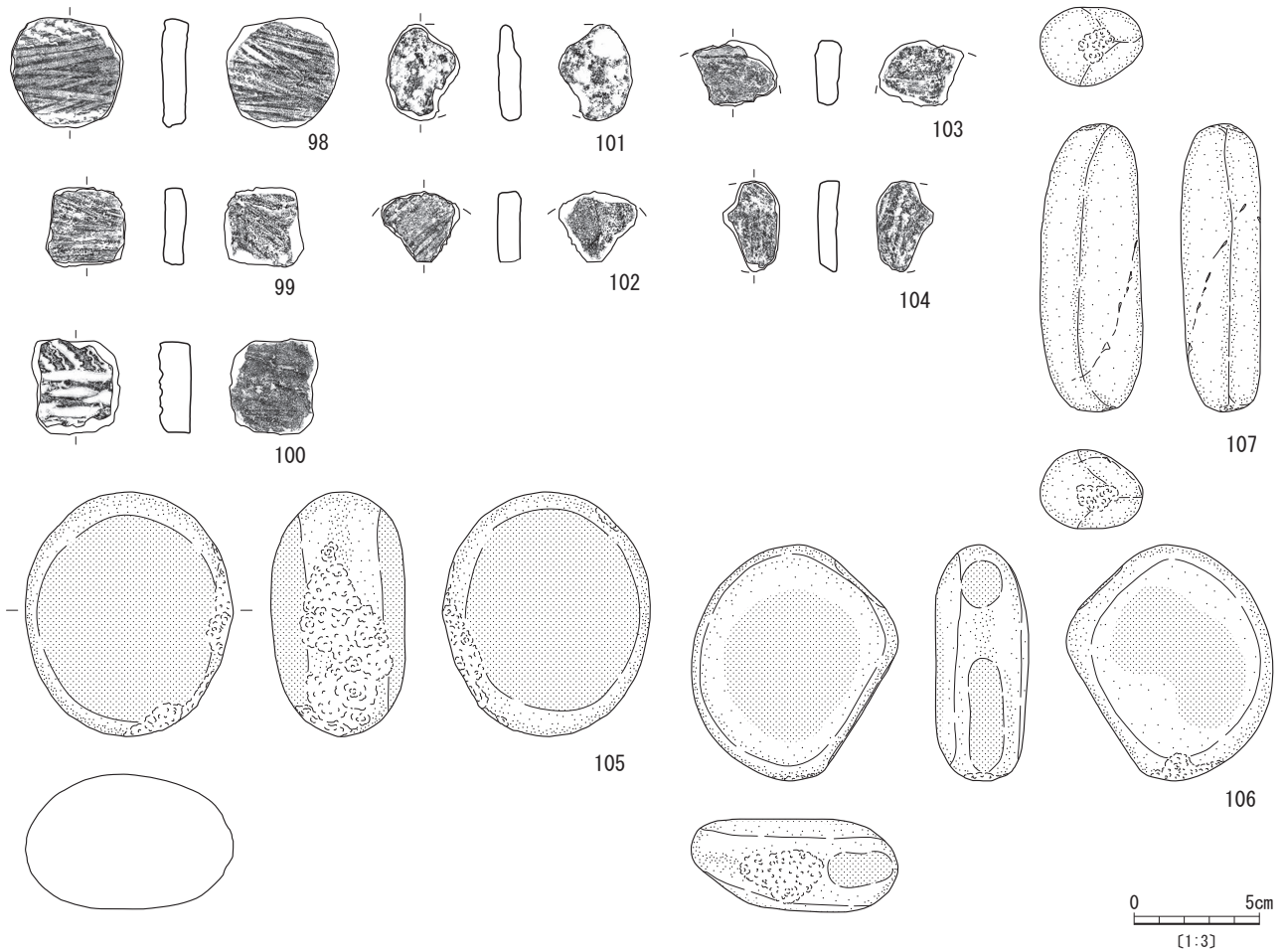
92は底面近くで出土しており、出土状況は第28図のとおりである。底部以外は残存しており、文様は見られず、全体をへら状の工具で粗くナデて仕上げている。口縁部に向け外反し、先端部がやや内弯する。底部は細くくびれている。

93~97は岩崎上層式土器の深鉢で少量のみの出土であ

り、他のものより古く、まぎれ込みと思われることから、最後に掲載した。色調・文様や胎土などから、93~95は同一個体とみられる。内外とも全体を貝殻条痕で調整した後、外面は口縁部付近に斜方向の右下がり沈線を施し、その下に幅5mm程度の横位の沈線を階段状に段を付けた入組文を4段施文している。96も同様の施文であるが口縁上部の右下がり沈線の幅が狭く、97は弧状の工具で押しして施文している。

98~104は、円盤形土製品で、すべて丸尾式土器の破片を利用した加工品である。99・100は方形で、あとは円形である。98は両面に貝殻条痕、片面に2段の貝殻刺突文が残る。99は貝殻条痕の後ナデて仕上げている。100は横位の粗い沈線と貝殻刺突文が残る。101は表面の摩耗が激しく、円形という形状以外は不明である。102は貝殻条痕の後ナデ、103・104はナデて仕上げている。103は沈線の一部が残る。

105~107は石器で、石材はすべて砂岩である。105・106は磨石・敲石類で、105は表裏面に磨面が、側面の1面に顕著な敲打痕が残る。106は表裏面及び側面の3か所に磨面が、側面の最も鋭角となる部分に敲打痕が残る。107は棒状の敲石で、端部に敲打痕がみられる。



第33図 溝状遺構1号出土土器(5)と出土石器



### 3 遺構外出土土器

#### (1) 概要

包含層（Ⅱ層）や表土で484点の土器片が出土しており、丸尾式・辛川式・納屋向タイプ・西平式・中岳Ⅱ式土器などがある。F～H-10～12区の谷頭部分に広く丸尾・西平式土器は分布しており、中岳Ⅱ式土器はF・G-10～12区のやや低いほうで出土している。辛川式土器はG-10, 12区で出土している（第34図）。

#### (2) 出土土器

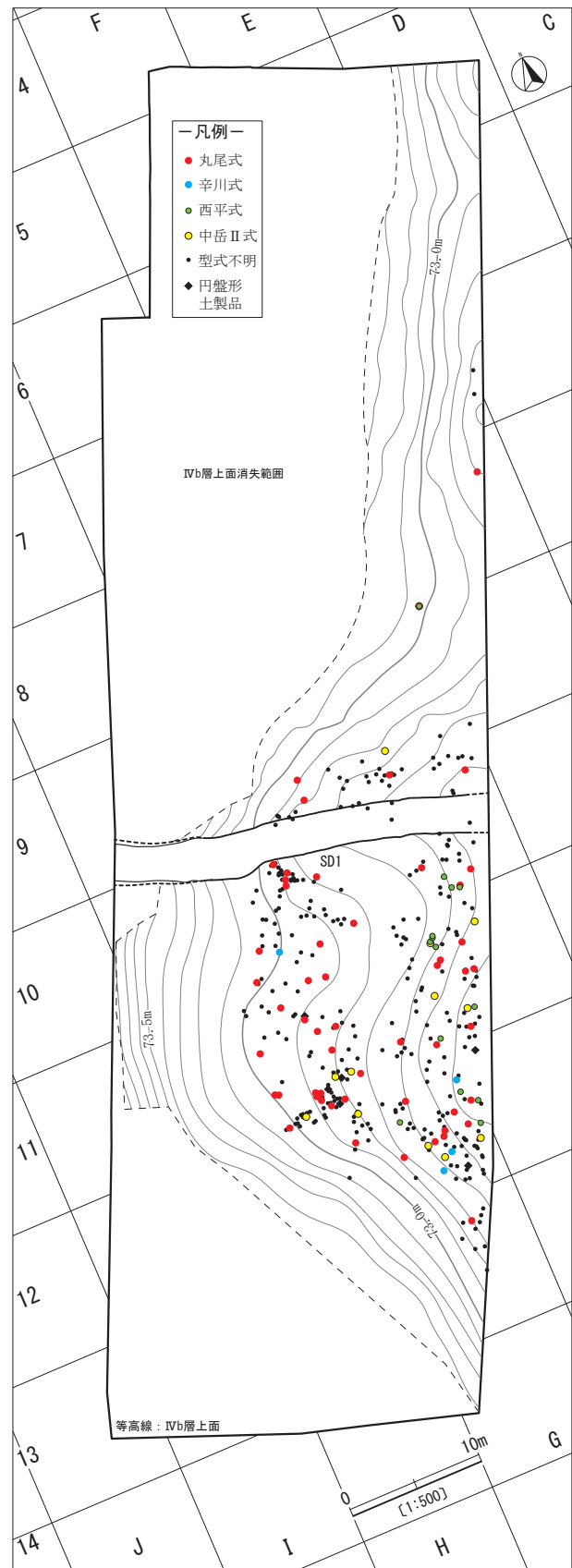
##### ① 丸尾式土器（第35・36図108～159）

施文具に主に貝殻を用いた深鉢が多い土器で、平底から外へ開く器形をしているが、口縁までまっすぐ伸びるもの、口縁部が外反するもの、口縁近くで屈曲して口縁部が直立するもの、口縁近くが内弯するものがある。

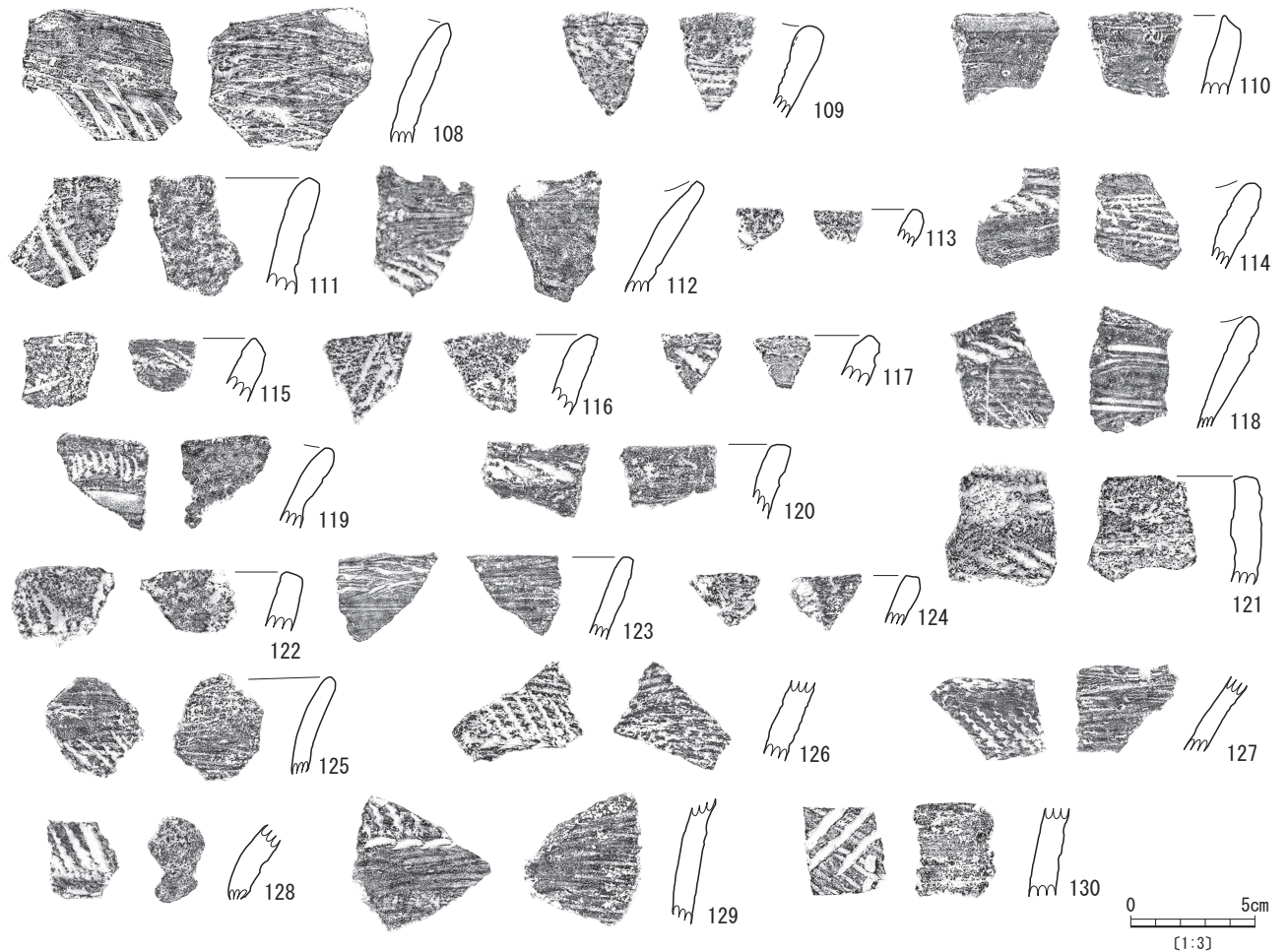
108～124は口縁部までまっすぐ伸びる外傾形をしたものである。口縁端は多くが丸みをおびているが、110は端部をナデて三角形状を呈している。ほとんどが小破片のため不明なものが多いが、108・109・112・114・118・119のように波状を呈するものもあることから、多くは波状を呈すると考えられる。内外面とも浅い横方向の貝殻条痕で仕上げるものが多いが、貝殻以外のものでも横方向にナデるものもある。108は口縁のやや下に二枚貝様のもので右下がりの斜線を繰り返し押し、その下には横方向の凹線が巡っている。111は生乾きの状態で2条の右下がり凹線を引いている。112は口縁端が薄くなっており、口唇部の一部に押した痕跡がある。口縁のやや下に短い二枚貝腹縁による右下がり押圧文がある。114は口縁下に浅い横方向の凹線があり、その下に巻貝様の押圧文が繰り返されている。115はやや摩耗しており、左下がり沈線がみられる。口縁端外面はナデているため、三角形状を呈する。116は摩耗しており、はっきりしないが、左下がり沈線様のものがみられる。117・118は口縁端近くに右下がりの短い二枚貝押圧文が繰り返して施されている。118はさらにその下に二枚貝による右下がりの浅い押圧文がみられる。119は口縁下に短い二枚貝押圧が密に施され、さらにその下に丁寧な幅広の横凹線がある。120は口縁下に短い二枚貝押圧が右下がりに施されている。121は口縁部が磨滅している。口縁下に横方向の二枚貝押圧が2段あり、その下に右下がりの二枚貝押圧がある。122は色調がやや異なっており、口縁下に二枚貝による鋸歯状押圧がある。123は薄手の丁寧な作りの口縁部で、端部近くに2段の短押圧線がある。

125は外反する口縁部で、口縁端のやや下に右下がりの二枚貝押圧がみられる。

126～130はまっすぐ伸びる胴部である。126～129は右下がりの二枚貝押圧の上に横方向の二枚貝押圧、下に巻



第34図 縄文時代後期の土器・土製品分布図



第 35 図 縄文時代後期の土器（1）

貝様押圧がある。130は左下がり二枚貝押圧の右に巻貝押圧文がある。二枚貝押圧は鋸歯状となる可能性がある。やや分厚い。

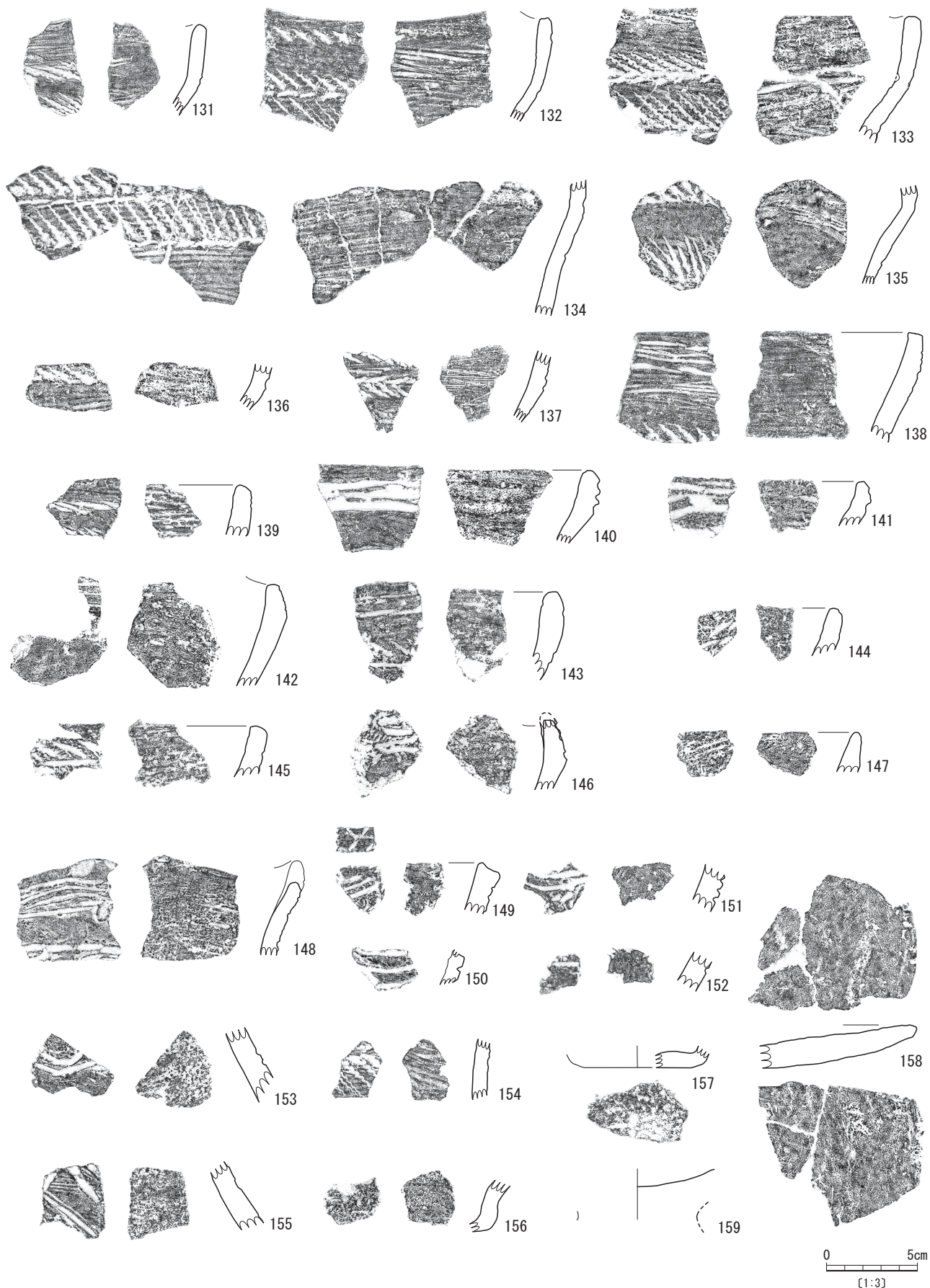
131～137は外へ開きながら伸び、口縁近くで内側に屈曲し、口縁端まで直立するものである。口縁端は丸みをおびた矩形をしており、いずれも波状口縁となる。131は内外とも丁寧な横ナデで、屈曲部とその下に右下がりの二枚貝押圧がある。132は上から巻貝様、二枚貝、巻貝様、二枚貝と交互に異なる押圧文が繰り返される。133は二枚貝と巻貝で、異なる傾き、深さなどで頸部まで5段の文様を施している。屈曲部で積み上げている。134は133と同じような文様を施している。135は口縁部と胴上部に右下がりの二枚貝押圧を施している。136も135と同じような文様の胴部である。137は短い二枚貝腹縁押圧を施しており、上から右下がり、横方向の連点文、右下がりときて、少し間をあけて巻貝様押圧、横方向連点文と続けている。

138～147は外へまっすぐ伸び、口縁部が屈曲して内弯するもので、納屋向タイプと呼ばれているものを含んでいる。138の内面は丁寧にナデているが、外面は横方向

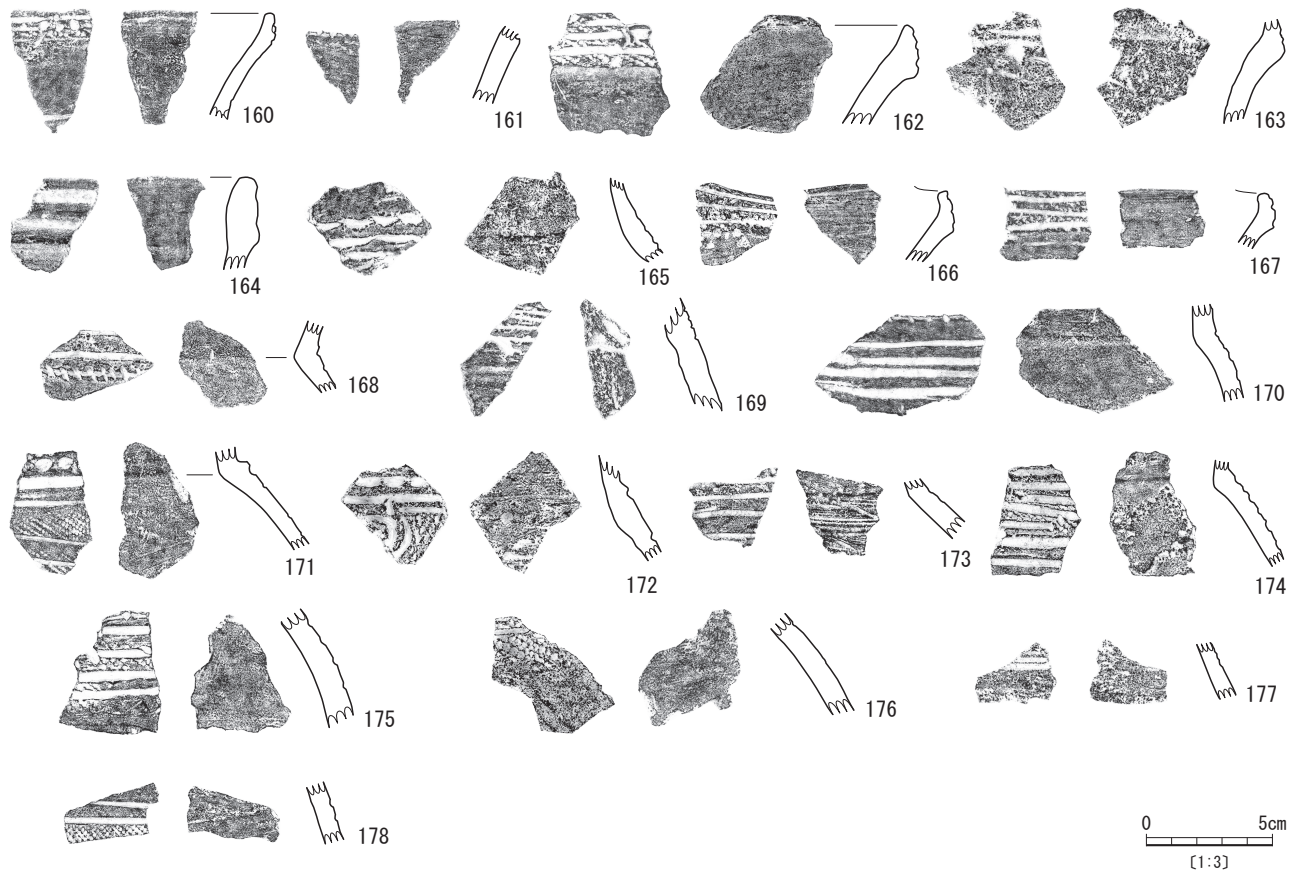
の貝殻条痕で、口縁近くに短い横方向沈線を連続して、4段に施し、少し間をあけて右下がりの二枚貝押圧文を施している。口縁端は矩形に近い。139は138と逆に内面が貝殻条痕、外面が丁寧なナデで、外面には右下がりの短沈線を少し間をあけて2段に施している。

140・141は、3条の凹線が施されており、140は波状口縁となる。142は表面の剥離が目立つ。波状口縁で、口縁部に3条の細沈線がみられる。143は端部近くに細沈線があり、その下に短い横凹線が連続して施されている。少し間をあけて右下がりの短沈線を引き、その下に凹線がある。144は波状口縁となり、左下がりの短い沈線が繰り返し2段に施されているが、上段に比べ、下段は横向きとなっている。145は凹線の上に右下がり短凹線が連続して引かれている。146は波状口縁となるもので、4条の凹線が引かれるが、波頂部で最上部と3条目の凹線が下に下がり、コの字状に閉じている。端部に小さな穴があることから施文具は先端の鋭いものであることが想定できる。147には2条の細沈線がある。

148は外傾する波状口縁で、波頂部外面を押して薄くしている。端部近くに3～4条の波状沈線と1条の横沈



第 36 図 縄文時代後期の土器 (2)



第 37 図 縄文時代後期の土器 (3)

線があり、波頂部の最下には押圧文がある。少し間をあげて横方向に連続短凹線が数条引かれている。外面は丁寧な横ナデだが、内面は粗い横ナデである。

149～152は接合できないが、文様・厚さ・色調・胎土などから同一個体と考えられる。小破片だけのため傾きが不明だが、やや内傾ぎみの口縁で、口唇部は分厚く、左下がりのへら様押圧が刻まれている。外面には先端の鋭い施文具で3条の弧状沈線が波状に引かれ、その下に同じ施文具の押圧文がある。内外とも丁寧にナデであり、150は内面が剥離している。

153は分厚く、波状沈線が引かれている。154は薄い作りで、小さな二枚貝腹縁で浅い押し引き文がある。155は分厚く、右下がりの凹線と短い凹線がある。

156・157は端部が丸みをおびた平底である。ともに小さく、157の底径は6.0cmである。157の底には網代状の圧痕があり、白粉が付着している。

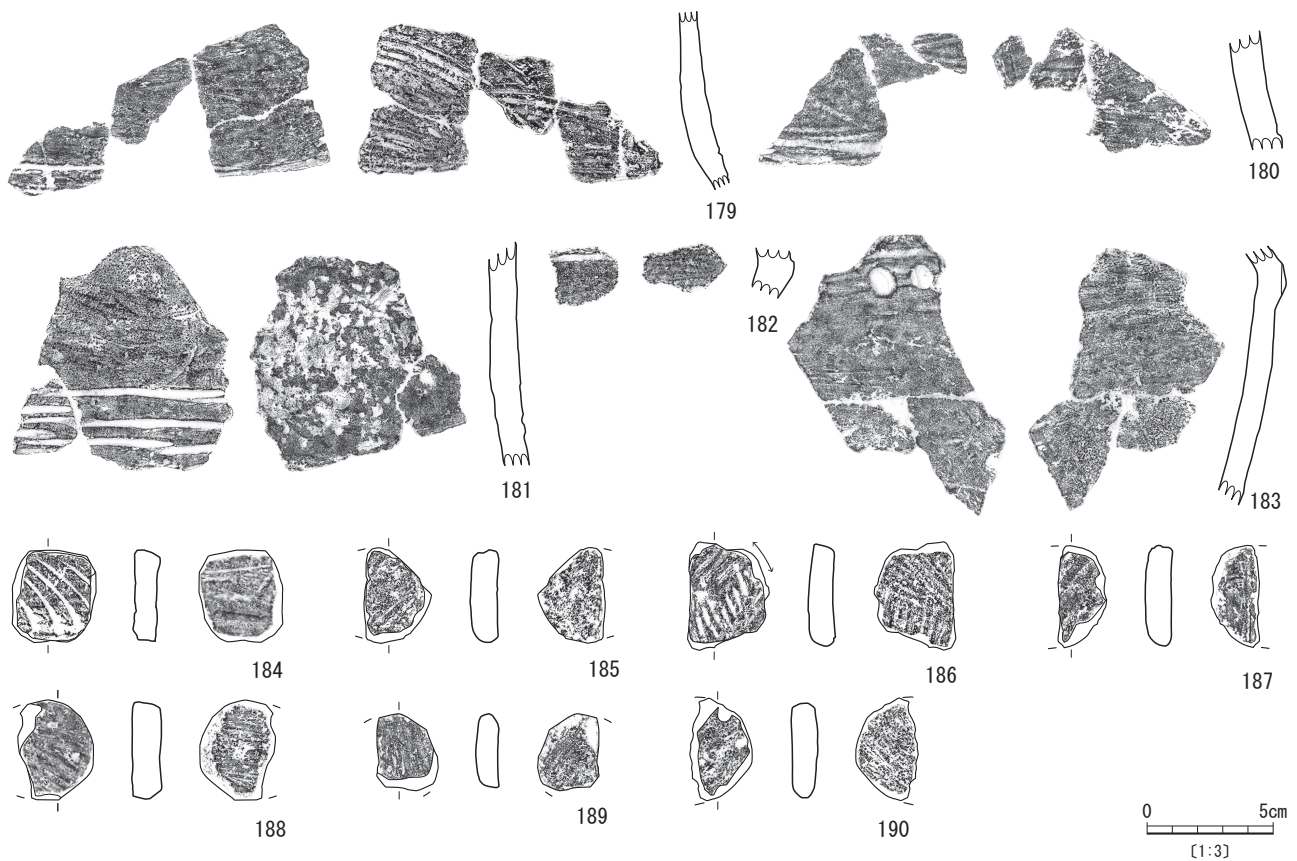
台付皿形土器は3点出土している。158は分厚い作りの浅い無文の皿口縁部である。内面は丁寧なナデ整形だが、外面は粗い横ナデで仕上げている。部分的に暗赤灰色を呈しているが、全体的には赤色である。長石・白色石・石英・灰色石・茶色石などの細礫が多い胎土を用い、焼成良好である。159は皿部の底から脚台の付け根の破片で、脚台の接合部径は3.6cmほどである。内底はナデ

調整で、丸みをおびた器形を呈している。にぶい赤褐色を呈している。図化してないが、他の1点も底の部分で、内底はナデ仕上げである。

## ② 辛川式土器 (第37図160～165)

口縁部は外傾し、端部近くで内側へ屈曲し、端部外面が直立する。端部外面に沈線や縄文がある。頸部で屈曲し、胴部はふくらんで袋状を呈するが、胴部上半に短沈線文や刺突文がある。

160は内面の屈曲がゆるやかな薄い作りで、口縁端の外面に3条の浅い横沈線が引かれ、間には4つの刺突文が十字状に配されている。頸部には1条の細沈線と刺突文がみられる。内面に多くのオコゲが付着している。161は口縁端部を欠いているが、口縁下部に刺突連点文と沈線がある。162はやや分厚い作りで、端部内面がやや上に立ち上がり、外面には3本の沈線が引かれ、間に右下がり縄文が転がされている。内外とも横方向のミガキで、外にはススが付着している。163は全体的に磨滅しており、口縁端を欠いている。口縁端外面に2条の沈線がある。164は口縁部が分厚く、外面に2条の凹線が引かれている。これは中岳Ⅱ式土器併行の可能性がある。165は肩部の下半部で、4段の文様がある。最上段は右から左への斜め刺突文、その下2段は連続する短い横沈線、その下は左下がり短沈線となっている。



第38図 縄文時代後期の土器（4）

③ 西平式土器（第37図166～178）

頸部内面に稜があり、くの字状に屈曲して長い口縁部に至り、口縁端近くで内側へ強く折れる器形を呈している。胴部は丸みをもった鉢状を呈し、肩部に横線などの文様がある。口縁端の屈曲外面には3条ほどの磨消縄文がある。

166・167は口縁端で内側へ強く屈曲する波状口縁で、外面は縄文を転がしたあと、3条の横沈線を引き、167は磨消縄文となっている。内外とも丁寧な横ナデ仕上げで、166はミガキに近い。168は頸部で、稜をもって屈曲し、外面に2条の凹線・沈線を引いている。下の沈線には右下がり刻みが連続して施され、外面にはススが付着している。169～174は頸部から肩部上半部である。169はやや分厚く直線的である。4条の沈線が上部にある。170は肩部に4条の横沈線、頸部に横沈線と刻み目がある。171は頸部外面に押圧文があり、その下に凹線がある。肩部には3条の沈線があり、その間は磨消縄文になっている。172は横凹線の上に連続短絡線が引かれ、その下には凹線と縄文・下向き渦文がある。173は4条の横凹線があり、その上に渦文らしきくぼみがみられる。174は縄文を転がした上に密な7条の横凹線が引かれているが、途切れている凹線もある。ススやオコゲが厚い。175も174と同じような文様で5条の凹線が

縄文の中に引かれ、その間に押圧文が押されている。176は縄文の中に1条の細い凹線が引かれている。177は3条の細沈線が引かれている。178は2条の凹線があり、磨消縄文となる。

④ 中岳Ⅱ式土器（第38図179～183）

底から外傾して伸び、胴部中頃で屈曲し、内傾して口縁へ向かう器形で、概して分厚い作りである。上半の屈曲部の上には2～3条の凹線が巡っている。内外とも丁寧な横ナデ調整である。182は丸みを帯びた屈曲部で、上に凹線がある。183の屈曲部には突帯が貼り付けられ、2つの押圧文がある。181は納屋向タイプである。

(3) 土製品（第38図184～190）

土器破片の周辺を打ち欠いたり研磨して方形や円形に作った円盤形土製品が7点出土している。円盤形土製品は溝状遺構1号でも7点出土している。完形品は184のみで、他は半分近くに欠けている。文様・胎土・色調などからしていずれも丸尾式土器深鉢の破片と考えられる。184は3.3×3.7cmの隅丸方形を呈しているが、他はほぼ円形を呈し、径が3.8～4.2cm、厚さ1cm前後と似た大きさを呈している。重さは184が14.1gで、他は全容不明だが6.5～15.1gである。ほとんど周辺を磨いているが、全周を丁寧に磨いたものと、一部のみ磨いたものがある。

## 5 遺構外出土石器

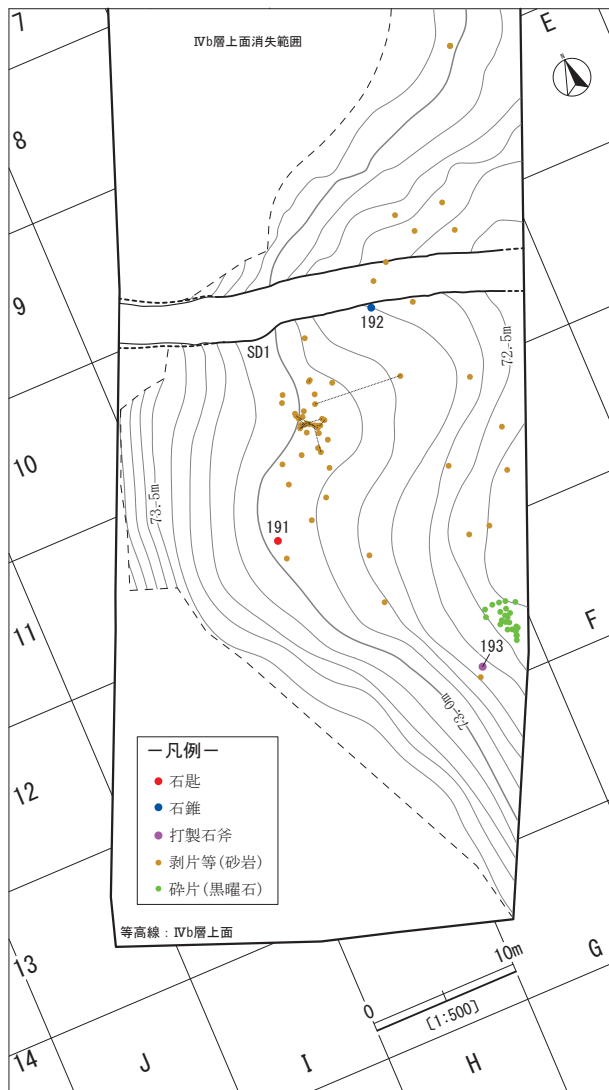
### (1) 概要

縄文時代後期の遺構外出土石器は包含層のⅡ層から出土し、石匙、石錐、打製石斧片の3点がある他、砂岩の礫片とその剥片・碎片類が合計67点、黒曜石の碎片が合計23点みられている。

その他、石器以外として、包含層から小円礫300点余りの散漫な出土があった。

分布状況は、石匙がH-11区、石錐がG-10区、打製石斧片はG-12区から出土している。また、砂岩の礫片と剥片・碎片類はG-10・11区を中心に出土し、数点の接合関係がみられている。黒曜石の碎片はG-12区の径3mの範囲からまとまって出土している。

定形石器の3点を図化した。なお、砂岩製剥片等については、すべて二次加工がなく、径10cm前後の不定形なものである。他、小円礫においては、平均で径5cm、64gを有する。



第39図 縄文時代後期の石器分布図

### (2) 出土石器

#### 石匙 (第40図191)

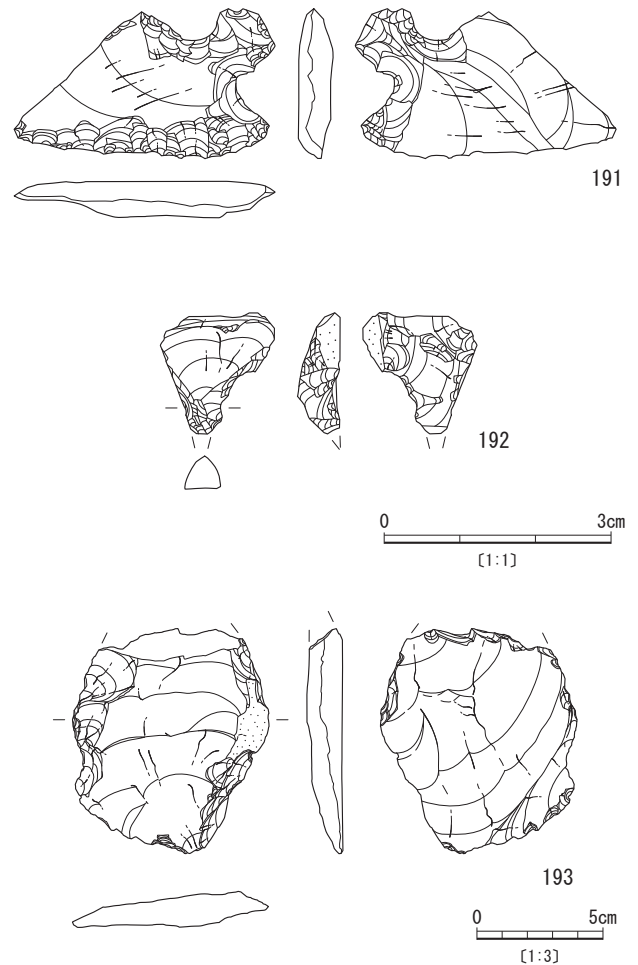
191は略二等辺三角形を呈する一方の縁辺に摘み部を作出した横型の石匙である。薄手の不定形剥片を素材としており、摘み部の整形剥離は表裏両面から施し、鋭い下縁の刃部は素材背面側からの片面調整で済ませている。また、未加工の片側の背縁に微小剥離痕がみられる。石材は姫島産の黒曜石である。

#### 石錐 (第40図192)

192は不整形な摘み部をもつ短身のもので、不定形剥片の背面側から両側縁に急斜度の整形剥離を施して錐先端部を作出している。先端をわずかに欠損する。石材はチャートである。

#### 打製石斧 (第40図193)

193は打製石斧製品の破損した破片、あるいは加工時の調整剥片ともみられ、表面に両極打撃による二次加工の剥離面構成をもつ。石材はホルンフェルスである。



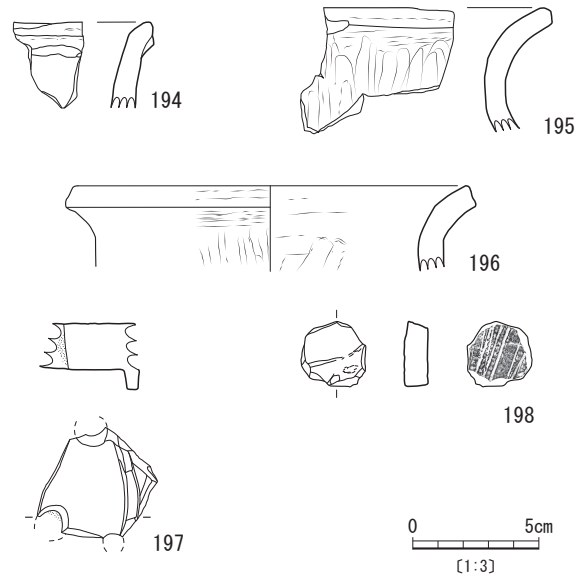
第40図 縄文時代後期の石器

### 第5節 弥生時代以降の遺物

弥生土器と、近世以降の土器・土製品が少量出土している。(第41図194~198)

194~196は弥生土器である。194は口縁部が外反する小型の甕形土器で、口縁端近く外面に三角突帯が貼り付けてある。端部はやや尖って丸みをもつ。内外とも横ナデである。195・196は高付式土器の壺形土器で、接合できないが、同一個体と考えられる。この2点の他に10点(接合して6点になっている)の胴部破片が出土しており、これらも同一個体と考えられる。口縁部直径は15.4cmで、口縁部は外反して立ち上がり、端部は中央がややへこむ矩形形状となる。口縁付近は内外とも横ナデで、胴部は縦ナデだが、外面はミガキ状となるところもある。口縁部は赤っぽい所もあり、丹塗りの可能性もある。図化していない胴部も外面は縦ナデである。

197と198は近世あるいは近代のものと考えられる。197は低い貼付高台のある硬質に焼けた土師質土器である。平らな底をし、底にはオコゲ(又はス)が付着している。3か所に孔があいており、内側のやや大きな孔には灰がつまっている。硬質に焼けた土師質土器である。198は薩摩焼播鉢破片の周辺を打ち欠いた円盤形土製品で、直径2.5cm、厚さ1.0cmである。



第41図 弥生時代以降の土器・土製品

第9表 溝状遺構1号出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	型式	器種	部位	文様	調整		色調		胎土					焼成	備考	
							外面	内面	外面	内面	白石	茶石	雲母	石英	黒石			長石
29	38	2047他	丸尾	深鉢	口縁~胴部	波状口縁 斜位の二枚貝押圧2段	貝殻条痕, ナデ	貝殻条痕, ナデ	灰黄褐	明赤褐	○		○	○	○	○	良好	
	39	2068他	丸尾	深鉢	胴部	波状口縁 斜位の二枚貝押圧2段	貝殻条痕	貝殻条痕, ナデ	暗赤褐	黒褐	○	○	○	○	○	○	良好	
	40	895	丸尾	深鉢	口縁部	斜位の二枚貝押圧2段	貝殻条痕, ナデ	貝殻条痕, ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○		○	○	○	○	良好	
	41	—	丸尾	深鉢	口縁部	斜位の二枚貝押圧	貝殻条痕, ナデ	貝殻条痕, ナデ	黒褐	にぶい赤褐	○		○	○	○	○	普通	
	42	896	丸尾	深鉢	口縁部	横位の沈線上に斜位の沈線	貝殻条痕, ナデ	貝殻条痕, ナデ	黒褐	にぶい褐	○		○	○	○	○	良好	スス
	43	939	丸尾	深鉢	口縁部	—	貝殻条痕, ナデ	貝殻条痕, ナデ	黒褐	にぶい赤褐	○	○	○	○	○	○	普通	口唇部欠
	44	—	丸尾	深鉢	口縁部	斜位の沈線	横ナデ	横ナデ	灰黄褐	灰黄褐	○		○	○	○	○	普通	
	45	—	丸尾	深鉢	口縁部	斜位の二枚貝押圧の中央をナデ消し	貝殻条痕, ナデ	貝殻条痕, ナデ	明赤褐	明赤褐	○		○	○	○	○	普通	同一個体
	46	868	丸尾	深鉢	口縁部	斜位の二枚貝押圧の中央をナデ消し	横ナデ	横ナデ	橙	橙	○		○	○	○	○	普通	同一個体
	47	—	丸尾	深鉢	口縁部	斜位の二枚貝押圧	貝殻条痕, ナデ	貝殻条痕, ナデ	赤褐	明赤褐	○		○	○	○	○	普通	
	48	—	丸尾	深鉢	口縁部	斜位の二枚貝押圧	貝殻条痕, ナデ	貝殻条痕, ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○		○	○	○	○	良好	
	49	902他	丸尾	深鉢	口縁部	波状口縁 波頂部下と屈曲部に斜位の二枚貝押圧	貝殻条痕, 丁寧なナデ	貝殻条痕, 丁寧なナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○		○	○	○	○	良好	
	50	470他	丸尾	深鉢	口縁部	波状口縁 口縁部に斜位の二枚貝押圧と連続の円形刺突	丁寧なナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○	○	○	○	普通	
	51	2032	丸尾	深鉢	口縁部	波状口縁 斜位の二枚貝押圧2段	貝殻条痕, ナデ	貝殻条痕, ナデ	黒褐	にぶい赤褐	○		○	○	○	○	良好	
	52	2043	丸尾	深鉢	口縁部	斜位の二枚貝押圧	貝殻条痕, ナデ	貝殻条痕, ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○		○	○	○	○	良好	
	53	—	丸尾	深鉢	口縁部	波状口縁 斜位の二枚貝押圧2段	貝殻条痕, ナデ	貝殻条痕, ナデ	灰褐	明赤褐	○		○	○	○	○	良好	
	54	—	丸尾	深鉢	口縁部	斜位の二枚貝押圧	貝殻条痕, ナデ	貝殻条痕, ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○		○	○	○	○	良好	
55	—	丸尾	深鉢	口縁部	横位の沈線3条	貝殻条痕, 丁寧なナデ	貝殻条痕, ナデ	暗赤褐	にぶい赤褐	○	○	○	○	○	○	普通		
30	56	809他	丸尾	深鉢	口縁部	横位の沈線3条	貝殻条痕, 丁寧なナデ	貝殻条痕, ナデ	にぶい橙	赤褐	○		○	○	○	普通	納屋向タイプ	
	57	873他	丸尾	深鉢	口縁部	横位の沈線3~4条, 斜位の二枚貝押圧	貝殻条痕, ナデ	貝殻条痕, ナデ	暗赤褐	暗赤褐	○	○	○	○	○	普通	納屋向タイプ	
	58	759他	丸尾	深鉢	口縁部	横位の沈線	貝殻条痕, ナデ	貝殻条痕, ナデ	黒褐	灰褐	○		○	○	○	普通	納屋向タイプ	
	59	877他	丸尾	深鉢	口縁部	横位の沈線, 斜位の二枚貝押圧	貝殻条痕, ナデ	貝殻条痕, ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○	○	○	○	普通	納屋向タイプ	
	60	288	丸尾	深鉢	口縁部	横位の沈線, 斜位の二枚貝押圧	横ナデ	貝殻条痕, ナデ	灰褐	明赤褐	○		○	○	○	良好	納屋向タイプ	
	61	849	丸尾	深鉢	口縁部	斜位の二枚貝押圧, 横位の沈線	横ナデ	横ナデ	明褐	明褐	○	○	○	○	○	普通	納屋向タイプ	
	62	286他	丸尾	深鉢	口縁部	横位の沈線, 斜位の二枚貝押圧	貝殻条痕, 丁寧なナデ	貝殻条痕, ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○		○	○	○	普通	納屋向タイプ	
	63	774他	丸尾	深鉢	口縁~胴部	横位の沈線, 斜位の二枚貝押圧	貝殻条痕, 丁寧なナデ	貝殻条痕, 丁寧なナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○		○	○	○	良好	納屋向タイプ	
	64	745	丸尾	深鉢	口縁部	横位の沈線3条	ナデ	横ナデ	暗赤褐	暗赤褐	○	○	○	○	○	良好	納屋向タイプ	









## 第6節 時期不明の遺構

ここでは、時期の判断ができなかった土坑2基と溝状遺構1条、硬化面について記述する(第42図)。

### (1) 概要

#### 土坑12号(第43図)

F-9区のIVb層上面で検出された。平面は約160×70cmの楕円形で、深さは検出面から約15cmである。埋土は黒灰色土で、遺構掘削時の排土と考えられるVI層土のブロックを少量、上面付近はIII層土を含む。埋土の状況から縄文時代中期以降と想定される。

#### 土坑13号(第44図)

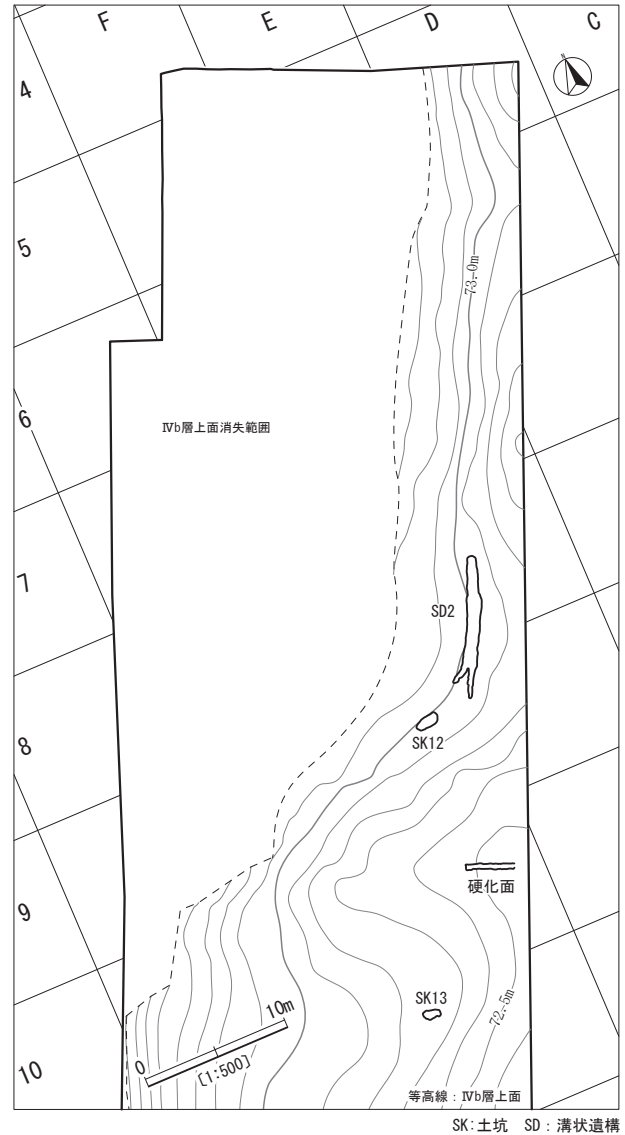
G-11区のIII層上面で検出された。平面は約110×60cmの不整形で、深さは検出面から約10cmである。埋土はII・III層土と考えられる黒色土及び黒灰色土で、遺物等は含まれていない。埋土にII層土が含まれていることから、縄文時代後期以降と想定される。

### (2) 溝状遺構

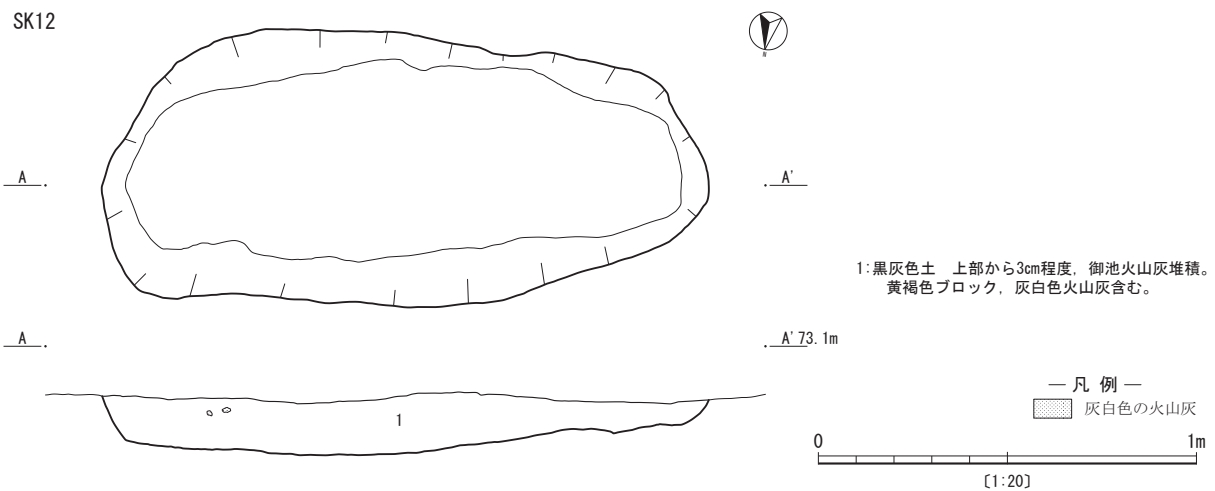
#### 溝状遺構2号(第44図)

E・F-8・9区のIII層上面で検出された。上部は削平されており、検出できた長さは約9m、幅は約1mである。南側は2又に分かれており、底面の形状から、2条の溝状遺構が重なっている可能性がある。埋土は黒色土で、底面付近にVI層土のブロックがみられる。標高がほぼ同じ平坦な部分に造られており、道等の可能性があるが、詳細な用途は不明である。

遺物は2点出土しており、いずれも近世後半以降のものであることから、近世以降の遺構と考えられる。199は播鉢で、櫛目は6条以上である。200は棧瓦である。白色で丁寧に仕上げられている。



第42図 時期不明の遺構配置図

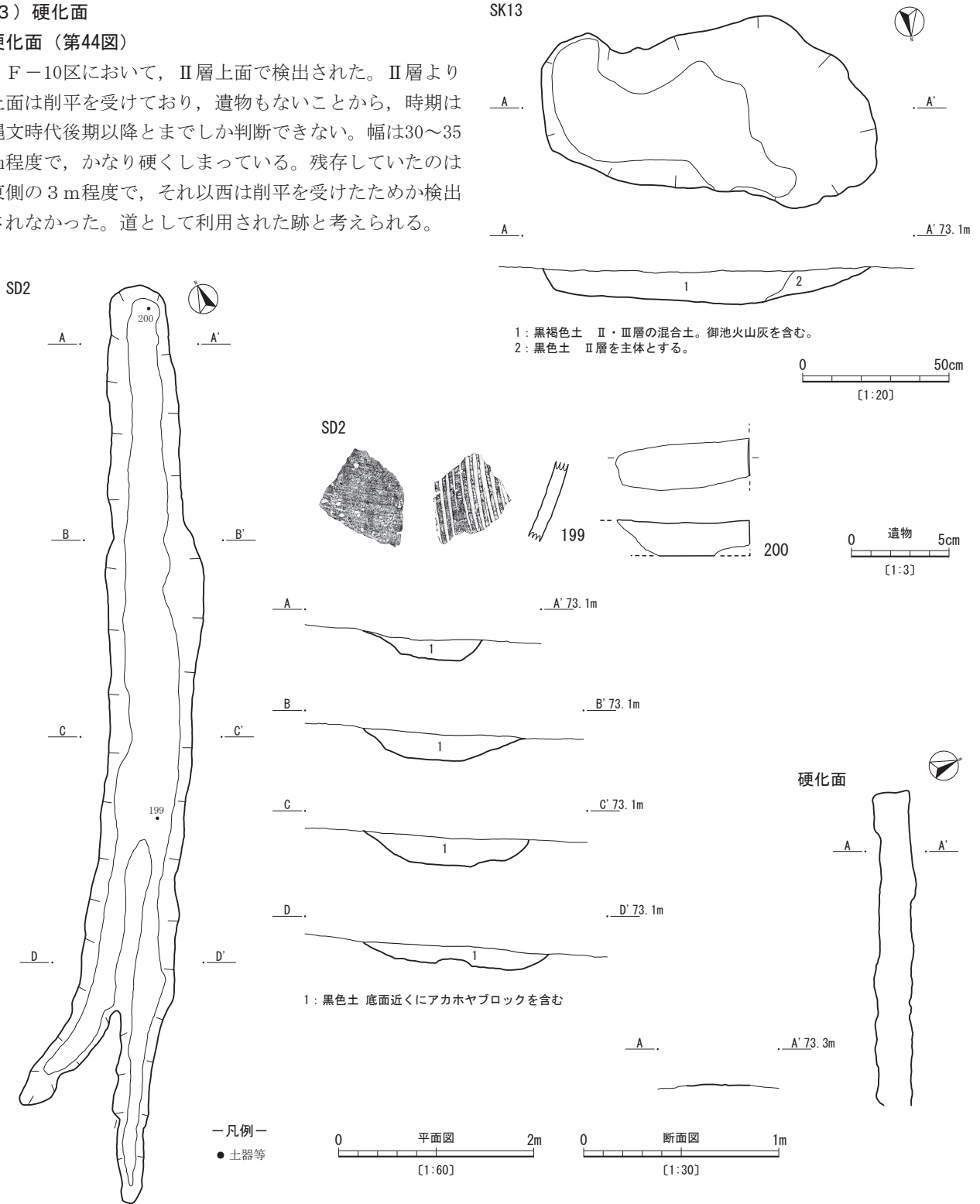


第43図 土坑12号

(3) 硬化面

硬化面 (第44図)

F-10区において、II層上面で検出された。II層より上面は削平を受けており、遺物もないことから、時期は縄文時代後期以降とまでしか判断できない。幅は30~35cm程度で、かなり硬くしまっている。残存していたのは東側の3m程度で、それ以西は削平を受けたためか検出されなかった。道として利用された跡と考えられる。



第44図 土坑13号・溝状遺構2号と出土遺物・硬化面

第16表 溝状遺構2号出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	時代	種別	器種	部位	調整		色調		胎土				焼成	備考
							外面	内面	外面	内面	白石	茶石	石英	灰石		
44	199	3	近世	陶器	播鉢	胴部	横ハケナデ	横ハケのあとカキ目	緑灰色の釉	暗赤灰		○	○		良好	
	200	1	近世	—	棧瓦	—	丁寧なナデ	丁寧なナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○	普通	芯は灰白、厚さ1.8cm	

## 第5章 自然科学分析

見帰遺跡内で検出された集石及び溝状遺構1号底面付近から出土した炭化物について放射性炭素年代測定を委託した。以下にその分析結果を掲載する。なお、報告書刊行における遺構号名の変更に伴い、分析時の号名も報告書と同様に変更し、順序も号数どおりに変更している。

### 放射性炭素年代測定 (AMS測定)

(株)加速器分析研究所

#### 1 測定対象試料

鹿児島県に所在する見帰遺跡の測定対象試料は、集石遺構から出土した炭化物1点と溝状遺構1号から出土した炭化物3点の合計4点である(第17表)。

#### 2 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l(1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と第17表に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

#### 3 測定方法

加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、<sup>14</sup>Cの計数、<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)、<sup>14</sup>C濃度(<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOxII)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

#### 4 算出方法

- (1)  $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(第17表)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) <sup>14</sup>C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。<sup>14</sup>C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補

正する必要がある。補正した値を第17表に、補正していない値を参考値として第18表に示した。<sup>14</sup>C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、<sup>14</sup>C年代の誤差( $\pm 1\sigma$ )は、試料の<sup>14</sup>C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の<sup>14</sup>C濃度の割合である。pMCが小さい(<sup>14</sup>Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(<sup>14</sup>Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を第18表に、補正していない値を参考値として第18表に示した。

(4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の<sup>14</sup>C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の<sup>14</sup>C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、<sup>14</sup>C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差( $1\sigma=68.2\%$ )あるいは2標準偏差( $2\sigma=95.4\%$ )で表示される。グラフの縦軸が<sup>14</sup>C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない<sup>14</sup>C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.3較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第18表に示した。なお、暦年較正年代は、<sup>14</sup>C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BP」または「cal BC/AD」という単位で表される。

#### 5 測定結果

測定結果を第17・18表に示す。

集石遺構から出土した試料No. 1の<sup>14</sup>C年代は8880 $\pm$ 30yrBP、暦年較正年代( $1\sigma$ )は8201~7968cal BCの間に4つの範囲で示され、縄文時代早期前半頃に相当する(小林2017, 小林編 2008)。溝状遺構1号から出土した試料No. 2~4の<sup>14</sup>C年代は3510 $\pm$ 30yrBP (No. 3)から3360 $\pm$ 30yrBP (No. 2)にまとまっている。暦年較正年代( $1\sigma$ )は、最も古い試料No. 3が1885~1775cal BCの間に2つの範囲、最も新しい試料No. 2が1683~1625cal BCの範囲でそれぞれ示され、いずれも縄文時代後期中葉頃に相当する(小林2017, 小林編 2008)。

試料の炭素含有率はすべて67%を超える適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

小林謙一 2017 縄文時代の実年代 一土器型式編年と炭素14年代一, 同成社

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887

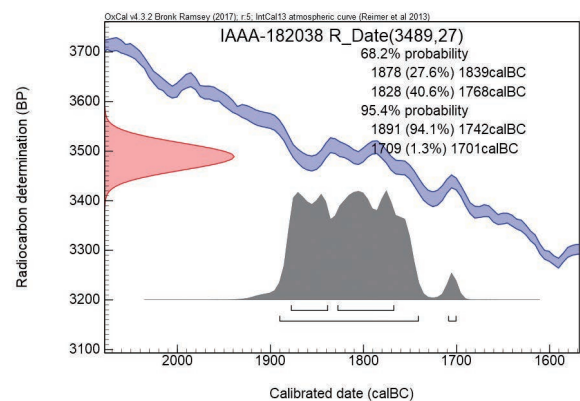
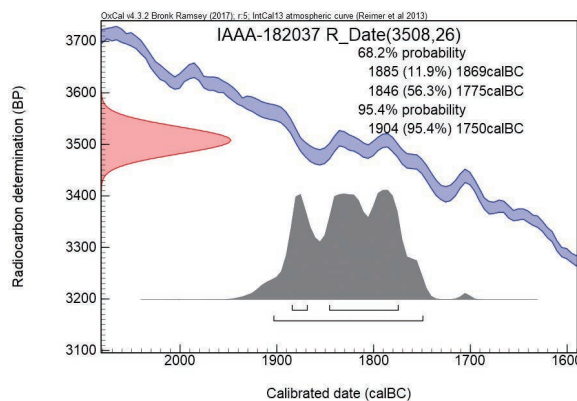
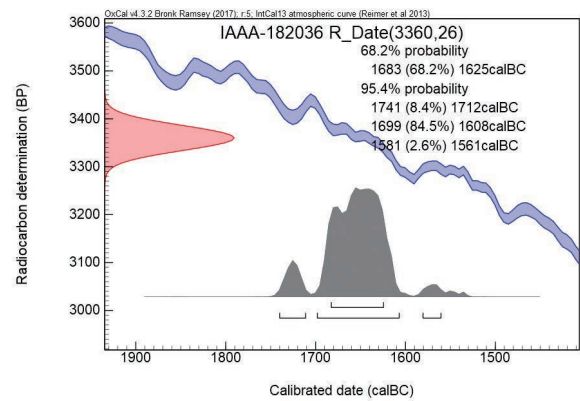
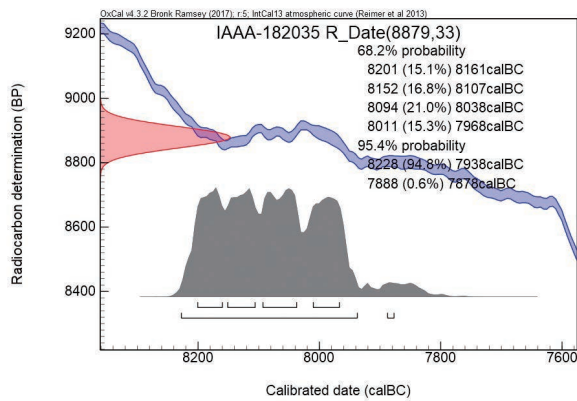
Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

第 17 表 放射性炭素年代測定結果 (δ<sup>13</sup>C 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ <sup>13</sup> C (‰) (AMS)	δ <sup>13</sup> C補正あり		
						Libby Age (yrBP)		pMC (%)
IAAA-182035	No. 1	集石遺構出土炭化物	炭化物	AAA	-27.28 ± 0.26	8,880 ± 30		33.11 ± 0.14
IAAA-182036	No. 2	溝状遺構 1 号出土炭化物	炭化物	AAA	-30.45 ± 0.24	3,360 ± 30		65.81 ± 0.22
IAAA-182037	No. 3	溝状遺構 1 号出土炭化物	炭化物	AAA	-30.66 ± 0.25	3,510 ± 30		64.61 ± 0.21
IAAA-182038	No. 4	溝状遺構 1 号出土炭化物	炭化物	AaA	-28.81 ± 0.24	3,490 ± 30		64.77 ± 0.22

第 18 表 放射性炭素年代測定結果 (δ<sup>13</sup>C 未補正值, 暦年較正用<sup>14</sup>C年代, 較正年代)

測定番号	δ <sup>13</sup> C補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-182035	8,920 ± 30	32.96 ± 0.14	8,879 ± 33	8201calBC - 8161calBC (15.1%) 8152calBC - 8107calBC (16.8%) 8094calBC - 8038calBC (21.0%) 8011calBC - 7968calBC (15.3%)	8228calBC - 7938calBC (94.8%) 7888calBC - 7878calBC (0.6%)
IAAA-182036	3,450 ± 30	65.08 ± 0.21	3,360 ± 26	1683calBC - 1625calBC (68.2%)	1741calBC - 1712calBC (8.4%) 1699calBC - 1608calBC (84.5%) 1581calBC - 1561calBC (2.6%)
IAAA-182037	3,600 ± 30	63.86 ± 0.21	3,508 ± 26	1885calBC - 1869calBC (11.9%) 1846calBC - 1775calBC (56.3%)	1904calBC - 1750calBC (95.4%)
IAAA-182038	3,550 ± 30	64.26 ± 0.22	3,489 ± 27	1878calBC - 1839calBC (27.6%) 1828calBC - 1768calBC (40.6%)	1891calBC - 1742calBC (94.1%) 1709calBC - 1701calBC (1.3%)



第 45 図 暦年較正年代グラフ (参考)

## 第6章 総括

ここでは、主に本遺跡で遺物等が出土した縄文時代の各期について、隣接する調査センターの調査区における結果も加えて記述する。

### 第1節 旧石器時代

遺構は検出されていない。遺物はX層の細石刃文化期の層から出土しており、磨石や敲石がF-5区で5点、F-8区から1点出土している。いずれも石材は砂岩である。

西側に隣接する調査センター調査区では、この時期の遺物としてナイフ形石器文化期のXI層からナイフ形石器1点と磨石・敲石3点が、また細石刃文化期のX層から細石刃2点、加工痕剥片2点、磨石・敲石等10点が出土している。石材はナイフ形石器・加工痕剥片・細石刃は黒曜石やチャート、それ以外の磨石・敲石等は砂岩であり、遠方から入手した石材でナイフ形石器や細石刃を製作し、安楽川の河川沿いから持ち込んだ川原石を磨石等に利用したと推測される。

出土数が多い北側の台地縁部を中心に人の活動があったと考えられるが、傾斜がある部分であり、原位置を保っている可能性は低く、遺構もみられないため、詳細は不明である。

### 第2節 縄文時代早期

遺構は、集石遺構1基と土坑10基が検出されている。これらは調査センター調査区では検出されていない。遺構に伴う遺物は、集石遺構内で下剥峯式土器が1点出土したのみである。

遺物は、土器が14点出土しており、うち下剥峯式土器が9点と多くを占める。石器は打製石鏃13点、石核1点が出土している。調査センター調査区は、土器が7点で、うち石坂式土器が3点、下剥峯式土器が3点であり、石器は打製石鏃が8点、磨石・敲石等が8点出土している。遺構・遺物ともに少ないが、下剥峯式土器の時期を中心に一時的な利用があったと推測される。

なお、集石遺構内からは炭化物が出土しており、放射性炭素年代測定の結果、8,228calBC～7,938calBCの年代が出ている。集石遺構付近で下剥峯式土器が出土しており、下剥峯式土器は早期中葉であることから、おおよそ時期も一致する。

### 第3節 縄文時代中期

縄文時代中期の調査においては、IVb層上面で土坑1基・落とし穴3基が検出され、遺物は打製石鏃2点と石皿1点が出土した。調査センター調査区では土坑が5基

検出され、打製石鏃2点が出土している。土坑に関しては逆茂木痕がないことから土坑としているが、県調査区のものと同規模等を比較したのが第19表である。

第19表 縄文時代中期 遺構の大きさの推定

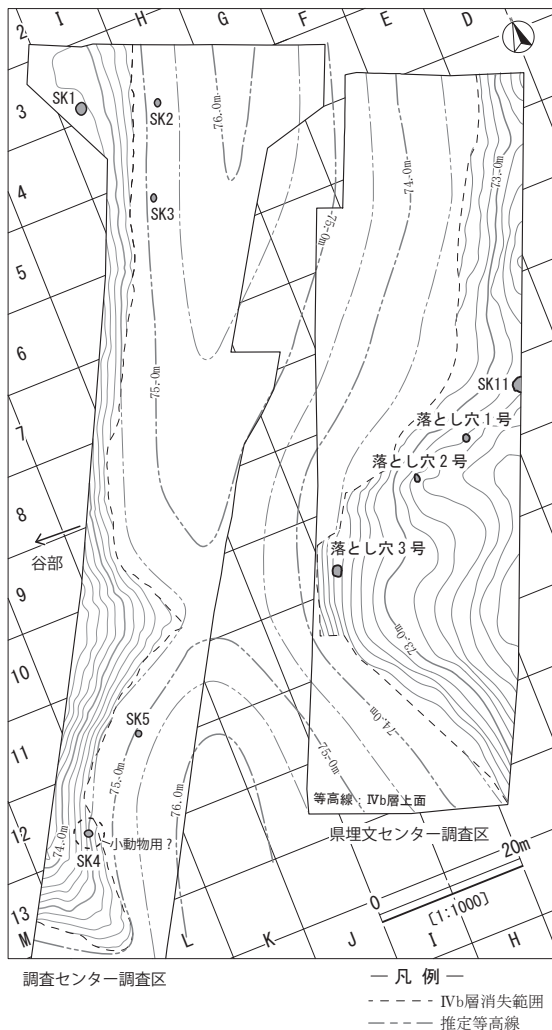
	遺構名	平面形	上面長軸	上面短軸	深さ※	底面層
財団調査区	土坑1号	楕円形	170 cm	140 cm	115 cm	VII b
	土坑2号	楕円形	110 cm以上	90 cm以上	100 cm	VII b
	土坑3号	楕円形	120 cm以上	80 cm以上	120 cm	VII b
	土坑4号	隅丸方形?	90 cm	90 cm	50 cm	VI a
	土坑5号	不明	120 cm以上	100 cm以上	130 cm	VIII a
県調査区	土坑11号	円形	200 cm	190 cm?	90 cm	VII a
	落とし穴1号	円形	100 cm	90 cm	120 cm	VII b
	落とし穴2号	楕円形	110 cm	70 cm	125 cm	VIII a
	落とし穴3号	隅丸方形	150 cm	120 cm	130 cm	VIII a

※深さは、IV a層上面から底面までを、基本層位等の厚さから推定。  
上面長軸・短軸は、IV b層で検出されたもの。上部を削平されたものは～以上と記載。

落とし穴1～3号の形状をみると、平面は円形・楕円形・隅丸方形など様々で、上面の長軸は100～150cm、短軸は70～120cm、深さはおよそ120～130cmで、底面はVII b～VIII a層付近である。調査センター調査区検出の土坑で、この形状・規模に近いのは土坑1～3・5号であり、落とし穴の可能性が高いものと考えられる。県の調査区検出の土坑11号は検出面の大きさが異なるが、深さがあることから落とし穴の可能性もある。土坑4号は他と比較してかなり浅いため、同類のものではなく、仮に落とし穴としても小動物を狙う程度のもので、他の落とし穴と対象物が異なると考えられる。

次に配列について、調査センター調査区を含めた遺構配置図を第46図に示す。なお、等高線はIVb層上面であり、削平を受けている部分や両センター調査区間の未調査部分については、VIII層コンタ図を参考にし、破線で表現している。

図をみると、土坑5・11号、落とし穴1～3号は尾根の切れ目を挟んでほぼ直線上に並んでいる。また、土坑2・3号も尾根に沿って直線上に並ぶ。なお、I・J-10・11区付近は調査区外もしくはVIII層下位まで大きく削平されており、遺構があった可能性がある。落とし穴の配列は、3基以上が列状に分布する「列状配列型」が比較的多いことが指摘されており、見帰遺跡における配列もその一例であろう。よって、この時期においては、尾根を挟んで西側の安楽川へ下る傾斜面と、東側の台地側とを行き来する動物を狙った狩猟場として活用されたと考えられる。



第46図 縄文時代中期遺構配置図（調セ分含む）

## 第4節 縄文時代後期

### 1 遺構（溝状遺構1号）

遺構は溝状遺構が1条検出された。この遺構はその位置や形状・出土遺物から判断して、調査センター調査区で検出された溝状遺構1号とつながるものと考えられる。調査センターの報告書では、「この溝状遺構は時期不明だが縄文時代後期の可能性がある。」とされ、用途については記載されていない。本報告書では第4章で前記したとおり、時期は縄文時代後期としており、本節では用途等も含め、その考察を記載する。

#### （1）検出状況

標高が高い西側は上部が削平されているが、東側は良好に残存していた。検出された部分の規模は長さ約25m、幅約3～3.5mである。平成29年度の確認調査14トレンチ内（第2図参照）においても検出されている。調査センター調査区では標高の低い西側のみに残存しており、長さ約8.5m、幅は残存度の良い部分で約3.4mである。県調査区と調査センター調査区との間は標高が高い尾根状の地形となっており、底面の一部などを残し後世の開発によって大部分が削平されたと推測される。

全体長を推定すると、調査センター調査区分を含め約60mとなり、両調査区の東西方向の用地外へ続くものと考えられる。地形を推定した第47図をみると、台地縁辺の標高が高い部分を避けて造られたと想定される。また、周辺地形を記した第5図をみると、溝状遺構が続くさらに西側には谷があり、ここにつながっていた可能性が高い。

#### （2）時期と用途

この遺構については、時期は縄文時代後期、用途としては、台地から安楽川河川周辺へ移動するための道と考えられる。時期を縄文時代後期とした理由として、以下の5点を挙げる。

- ①埋土内から多くの土器が出土しているが、岩崎上層式・丸尾式・辛川式・西平式土器といずれも後期の土器であり、摩耗が少ないことから流れ込みとは考えにくい。
- ②溝の底面からほぼ完形の土器2点が出土し、その他大きな破片もある。
- ③溝の掘り込み開始面がⅡ層付近である。
- ④埋土に弥生時代以降の火山灰が含まれていない。
- ⑤底面近くの炭化物を科学分析した結果、縄文時代後期中葉の年代を示した（第5章参照）。

用途を道とした理由として、以下の3点を挙げる。

- ①調査センター調査部分と今回の調査部分の間は尾根となっており、底面は東西両方向に傾斜しているため、排水路ではないと考える。
- ②西側は谷頭方向へ延びており、谷にある水場等に向かうものと想定される。
- ③中央に硬化面が存在する。

なお、硬化面は底面の中央に幅20～30cm程度、上下2面形成されている。風雨等で土砂が入りこみつつ使用し、草が繁茂するなどし、中央部を中心に繰り返し通行に利用されたと想定される。

#### （3）道跡と考えられる溝状遺構の検出例

本遺跡で縄文時代後期の道跡と考えられる溝状遺構を1条検出したことから、縄文時代の「縄文時代の道跡」または「道跡の可能性がある」遺構について若干の考察を行なう。近年、道としての機能を有する遺構を検出した遺跡数は増加してきており、全国の類例を集成したものが第20表である。これらの遺構は、用途が明確に把握できたもの、あるいは検出時の形状、性質等の特徴からさまざまな呼称が付されており、道跡、道路状遺構、带状硬化面、溝状遺構、階段状遺構、石積階段状遺構、木道などを挙げるができる。

自然の谷地形等を利用して道としたもの、人が繰り返し往来することで踏みしめられ形成されたもの、溝状に掘削して構築されたもの、地山（斜面）を水平方向に段切り状に造成して構築されたもの、湿地などにおいて通行の利便性を高めるために丸木舟や木材、礫等を人為的に並べたもの、傾斜地で昇降の必要が生じたことから垂直方向へ階段状に掘削して構築されたもの、歩行の利便性を高めるため礫や土器を敷き詰めたもの、粘土を舗装



状に貼付けたものなど、立地条件や形成過程等によってそれぞれの特徴に違いがある。これらの類例に照らして、本遺跡の溝状遺構1号は、掘削して構築されたものに該当すると考えられる。先述の類例のうち、これに該当する道跡として報告書の記述等から少なくとも6遺跡、計10条を挙げることができる。本遺跡の溝状遺構1号と類似するものを以下に紹介する。

志布志市有明町の山ノ口遺跡では、帯状硬化面11条が検出され、縄文時代後期の遺構として報告されている。長さが3.8～27m、幅は約30～60cmある硬化面が一部切合いながら東西方向へ並行する。調査区東端の1～4、調査区西側の5～11と2つのまとまりがあり、用途に関する記述はないものの、明瞭な硬化面が形成されていることから道跡の可能性が高い。帯状硬化面5のみが溝状を呈し、本遺跡の溝状遺構1号に類似する。

志布志市有明町の下原遺跡では、調査区Ⅱにおいて縄文時代後期の溝状遺構7条が検出されている。長さ4～20m、幅はそれぞれ異なるが約0.5～1.7mである。底面はいずれも平坦で、明瞭な硬化面は確認されていないものの、調査区の東側は谷地形となっており、これらの溝状遺構はこの谷に向かって延びていた道跡の可能性はある（溝状遺構7については近世の可能性もあることが報告されている）。

錦江町田代の岩崎遺跡では、縄文時代中期のS字状を呈す段状の道路が1条検出されている。北西から南東方向へ延び、長さ約6m、幅40～50cmを測る。

日置市吹上町建石ヶ原遺跡では、縄文時代晩期の溝状遺構が1条検出されている。地形の平坦な場所に造られており、南北方向に南北約70m、幅は2～3.6m、深さは最深部で35cm程度である。西側にやや幅をもたせてカーブしている。中央の底面より3cmほど上位に硬化面が見られる。

鹿児島市石谷町戸堀遺跡では、縄文時代晩期の道路状遺構が1条検出されている。長さ約10m、幅約ほぼ80cmで東西方向へ延びることが想定されている。

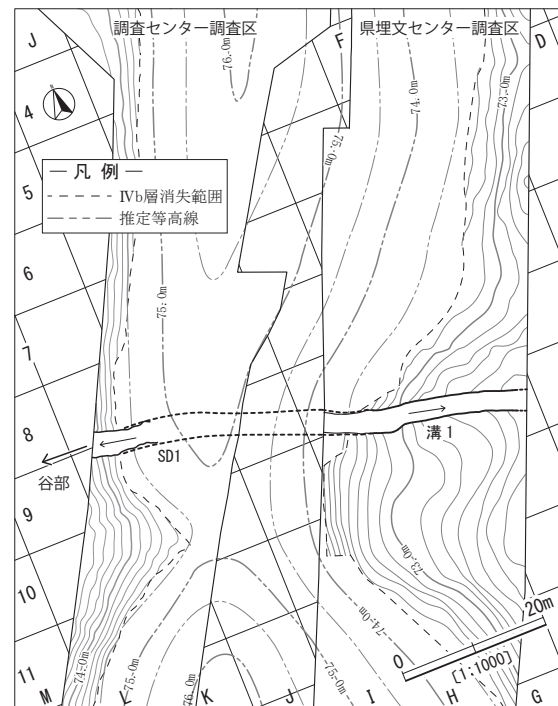
千葉県流山市三輪野山貝塚では、縄文時代晩期前葉～中葉の集落跡が発見されている。集落から東西両方向に延びる道路状遺構が2条検出されている。道路状遺構1は長さ約20m、幅約1～3m、道路上遺構2は長さ約65m、幅約2.8～6m、深さは約50cm前後である。急斜面を掘削して造成され、階段状を呈する部分や踊場も確認でき、集落と低地施設を結ぶものと考えられている。

宮崎市田野町本野原遺跡では、縄文後期の集落跡が発見されている。集落から検出された大型の道路状遺構は、集落と湧水点を結ぶために構築されたと考えられている。底面には顕著な硬化面が認められたようであり、幅もかなり広がったことが推定されている。

上記のうち県内4例、県外2例に共通する点は、道跡の機能を有する遺構の上面観がほぼ直線的で、人為的な

掘削によるものと考えられる掘り込みがあり、底面（あるいは底面付近）に道として利用され続けたことによって硬化面が形成されている（下原遺跡を除く）ことである。これらの特徴は、本遺跡の溝状遺構1号の特徴と類似することから、本遺構が道として使用されていた可能性を示す傍証になるものとする。また、溝状遺構1号の床面付近から出土した炭化物の放射性炭素年代測定の結果と、埋土内からは縄文時代後期の土器のみが出土している点は、時期判断の根拠となろう。ただし、本遺跡の溝状遺構1号は、長さ、幅、深さの検出した部分のみにおいても相当な規模を有することから、構築するには相応の労働力を必要としたことが想定される。本野原遺跡、三輪野山遺跡等では、竪穴建物（住居）跡等の集落を構成する遺構やこれらに伴い土器等の遺物が多量に確認されており、これらの規模をもって、道路状遺構の構築に必要な労働力が担保されていたことの証左とすることが可能かと考えられる。ただし、本遺跡においては、調査センター調査区も含め、調査区外に集落が存在する可能性と併せて、集落の構成要素たる竪穴建物（住居）跡等の遺構が発見されていない点について、今後、検討していくべき課題である。

鹿児島県内の当該期における道跡の類例は少なく、数例のみの検討にとどまったが、今後、本遺跡で検出した溝状遺構が縄文時代後期における道跡の研究を進める際の比較材料となることを願いたい。



第47図 見帰遺跡の溝状遺構想定図

## 2 遺物

出土遺物は他の時期と比較し量が多いため、調査センター調査区や他遺跡との比較も含めた傾向等を記述する。

第 20 表 縄文時代 道跡の類例

遺跡名	所在地	時代・時期	遺構名	検出数	標高	立地	参考・引用 文献番号
上野原遺跡	鹿児島県霧島市	早期前葉	道跡	2	250m	台地	2
前原遺跡	鹿児島市福山町	早期前葉	道跡	2	180m	台地	1・23
横井竹ノ山遺跡	鹿児島市犬迫町	早期	道跡	1	185m	台地	3
上山路山遺跡	日置市伊集院町	早期	道跡	2	130m	台地	4・23
永迫平遺跡	日置市伊集院町	早期	道跡	3	150m	台地	6
加栗山遺跡	鹿児島市川上町	早期	道跡	2	167～173m	台地	23・38
定塚遺跡	曾於市大隅町	早期	道路状遺構	2	222～225m	台地	43
雷下遺跡	千葉県市川市	早期	木道状遺構	1	6m	低湿地	25
横尾貝塚	大分県大分市	早期	木道状遺構	1	4～9m	緩斜面	41
伊勢堂岱遺跡	秋田県仙北郡	早期～後期	溝状遺構	1	40～45m	河岸段丘	22
二ツ森貝塚	青森県上北郡	前期中葉～中期中葉	道路状遺構	1	28～32m	河岸段丘	27
三内丸山遺跡	青森県青森市	前期末～中期前葉	道路跡	1	20m	河岸段丘	11
		中期中葉～末葉	道路跡	1			
		中期後葉以降	道路跡	1			
梅之木遺跡	山梨県北杜市	中期末葉	道跡	1	770～790m	尾根	10
中里貝塚	東京都北区	中期～後期初頭	木道	1	4～15m	低地	19
寿能遺跡	埼玉県さいたま市	中期後半～後期初	木道	2	7～15m	沖積低地	42
本野原遺跡	宮崎市田野町	後期	道路状遺構	2	180m	台地	8・37
岩崎遺跡	肝属郡錦江町	後期	階段状道路	1	240m	盆地	23・40
山ノ口遺跡	志布志市有明町	後期	帯状硬化面	1	130～132m	台地	7
佃遺跡	兵庫県津名郡	後期	木道	1	4～12m	扇状地	17
古梅谷遺跡	神奈川県横浜市	後期	木道	4	8.6～8.9m	低湿地	18
漆下遺跡	秋田県大仙市	後期中葉	道跡	1	140～142m	微高地	15
		後期後葉	石積階段状遺構	1			
下原遺跡	志布志市有明町	後期・晩期	溝状遺構	7	約108m	台地	21
小山崎遺跡	山形県飽海郡	後期～晩期	道路状遺構	1	6m	溶岩台地	20
建石ヶ原遺跡	日置市吹上町	晩期	溝状遺構	1	55m	台地	5
柵堀遺跡	鹿児島市石谷町	晩期	道路状遺構	1	185m	台地	39
井野長割遺跡	千葉県佐倉市	晩期	溝状遺構	1	26～27m	台地	14
水主神社東遺跡	京都府城陽市	晩期	木道	1	16m	沖積平野	24
美々4遺跡	北海道千歳市	晩期	道跡	1	約20～30m	台地	28
下宅部遺跡	東京都東村山市	晩期	木道	2	73～74m	低湿地	29
三輪野山貝塚	千葉県流山市	晩期前葉～中葉	道路状遺構	2	18～20m	台地	31・32
三輪野山八幡前遺跡		晩期	道路状遺構	1			
小牧野遺跡	青森県青森市	縄文	溝状遺構	3以上	130～136m	舌状台地	16
宮内井戸作遺跡	千葉県印旛郡市	後期～晩期	溝状遺構	1	42m	台地	13
上宮田台遺跡	千葉県袖ヶ浦市	後期～晩期	溝状遺構	2	約60m	台地	12
五月女范遺跡	青森県五所川原市	晩期中葉以前	道路状遺構	1	～10m	砂丘上	9

遺物の分布をみると、Ⅱ層が残存している箇所に散在しており（第4章第34図参照）、Ⅱ層が削平された部分では遺物の出土はない。型式ごとのまとまりも特にみられず、これは調査センター調査区においても全く同じである。遺物がやや多く出土していることから、削平を受けた調査センター調査区との間の尾根部分に住居等の遺構があり、そこから広がった可能性があるが、詳細は不明である。土器を型式ごとにみると、量として丸

尾式土器が最も多く、西平式土器が続き、この2型式以外は少ない。調査センター調査区を含め、この傾向は同じである。

最後に、円盤形土製品（通称メッコ）は調査センター調査区を含め10点出土している。県内においては、千迫遺跡（始良市）をはじめ縄文時代後期は他の時期と比較し、出土例が多いことが指摘されており、本遺跡においても同様の傾向であることが窺われる。

〈参考・引用文献〉

- 1 鹿児島県埋蔵文化財センター 2007 『前原遺跡(鹿児島市 福山町)第Ⅰ分冊』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(107)
- 2 鹿児島県埋蔵文化財センター 1997 『上野原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(23)
- 3 鹿児島県埋蔵文化財センター 2004 『横井竹ノ山遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(67)
- 4 鹿児島県埋蔵文化財センター 2007 『上山路山遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(116)
- 5 鹿児島県埋蔵文化財センター 2005 『農業開発総合センター遺跡群Ⅰ(第1分冊)(窪見ノ上遺跡・建石ヶ原遺跡・古里遺跡・西原遺跡)』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(83)
- 6 鹿児島県埋蔵文化財センター 2005 『永泊平遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(93)
- 7 鹿児島県埋蔵文化財センター 2017 『山ノ口遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(188)
- 8 宮崎県宮崎市田野町教育委員会 2004 『本野原遺跡』田野町文化財調査報告書 第48集
- 9 五所川原市教育委員会 2017 『五月女菴遺跡 第一分冊本文編1』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第34集
- 10 北杜市教育委員会 2018 『史跡梅之木遺跡整備事業報告書』
- 11 青森教育委員会 2017 『三内丸山遺跡44 総括報告書第一分冊』青森埋蔵文化財発掘調査報告書 第588集
- 12 財団法人千葉県教育振興財団 2010 『袖ヶ浦市上宮田台遺跡2(旧石器・縄文時代)-第一分冊(本文編)』千葉県教育振興財団調査報告第638集
- 13 財団法人印旛市文化財センター 1998 『宮内井戸作遺跡Ⅰ』
- 14 財団法人印旛市文化財センター 2004 『千葉県佐倉市井野長割遺跡 第4次調査』
- 15 秋田教育委員会 2011 『漆下遺跡-第1分冊本文篇』秋田県文化財調査報告書第464集
- 16 青森市教育委員会 1998年 『小牧野遺跡 発掘調査報告書ⅠⅤ』青森市埋蔵文化財発掘調査報告書第45集
- 17 兵庫県教育委員会 1998 『佃本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告Ⅲ第1分冊(本文編)』兵庫県文化財報告書第176冊
- 18 財団法人横浜市ふるさと歴史財団横浜教育委員会 1995 『古梅谷遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告XVII
- 19 東京都北区教育委員会 2018 『史跡 中里貝塚 総括報告書』
- 20 山形県遊佐町教育委員会 2019 『小山崎遺跡発掘調査報告書-総括編2-』遊佐町埋蔵文化財調査報告書第11集
- 21 鹿児島県埋蔵文化財センター 2019 『下原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(198)
- 22 秋田県教育委員会 1999 『伊勢堂岱遺跡』秋田県文化財調査報告書 第293集
- 23 渡部徹也 2002 「南九州の道跡の事例について」『古代交通研究』第1号 古代交通研究会
- 24 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2019 『水主神社東遺跡第12次調査現地説明会資料』
- 25 沖松信隆「雷下遺跡の概要」2014『研究連絡誌』千葉県教育振興財団 文化財センター
- 26 池畑耕一 2014 「道つくりと共同作業の始まり」『半田山地理考古』第2号 岡山理科大学 地理考古学研究会
- 27 七戸町教育委員会 2018 『史跡ニツ森貝塚整備基本構想及び整備基本計画』
- 28 財団法人北海道埋蔵文化財センター 1997 『美々・美沢-新千歳空港の遺構と遺物-』公益財団法人北海道埋蔵文化財センター編
- 29 東村山市遺跡調査会 2006 『下宅部遺跡Ⅰ』下宅部遺跡調査団
- 30 岡村道雄 1997 「縄文時代の舟と道」『ここまでわかった日本の先史時代』角川書店
- 31 流山市教育委員会 2008 『三輪野山貝塚』流山市埋蔵文化財調査報告vol.40
- 32 流山市教育委員会 2015 『三輪野山遺跡群』流山市埋蔵文化財調査報告vol.55
- 33 鹿児島県教育委員会 公益財団法人鹿児島県文化財振興財団埋蔵文化財調査センター 2019 『見帰遺跡』公益財団法人鹿児島県文化財振興財団埋蔵文化財調査センター発掘 調査報告書(23)
- 34 河口貞徳 1953 「南九州における縄文式文化の研究」『鹿児島県考古学会紀要』第3号 鹿児島県考古学会
- 35 九州縄文研究会・南九州縄文研究会 2004 『九州における縄文時代のおとし穴状遺構』第14回九州縄文研究会鹿児島県国分大会資料集
- 36 前迫亮一 2000 「かごしま考古なんでもランキング 円盤状土製品」『大河』第7号 大河同人
- 37 宮崎県宮崎郡田野町教育委員会 2004 『本野原遺跡』田野町文化財報告書第51号
- 38 鹿児島県教育委員会 1981 『加栗山遺跡 神ノ木山遺跡』鹿児島県埋蔵文化財報告書(16)
- 39 鹿児島県埋蔵文化財センター 2006 『伏野遺跡 隠迫遺跡 栢堀遺跡 仁田尾遺跡 御仮屋跡遺跡』鹿児島県埋蔵文化財センター報告書(101)
- 40 鹿児島県教育委員会 2005 『先史・古代の鹿児島』(資料編)
- 41 大分市教育委員会 2008 『横尾貝塚』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書(83)
- 42 埼玉県教育委員会 1984 『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書-人口遺物・総括編-』埼玉県教育委員会
- 43 鹿児島県埋蔵文化財センター 2010 『定塚遺跡・稲村遺跡』鹿児島県埋蔵文化財センター(153)

# 写真図版

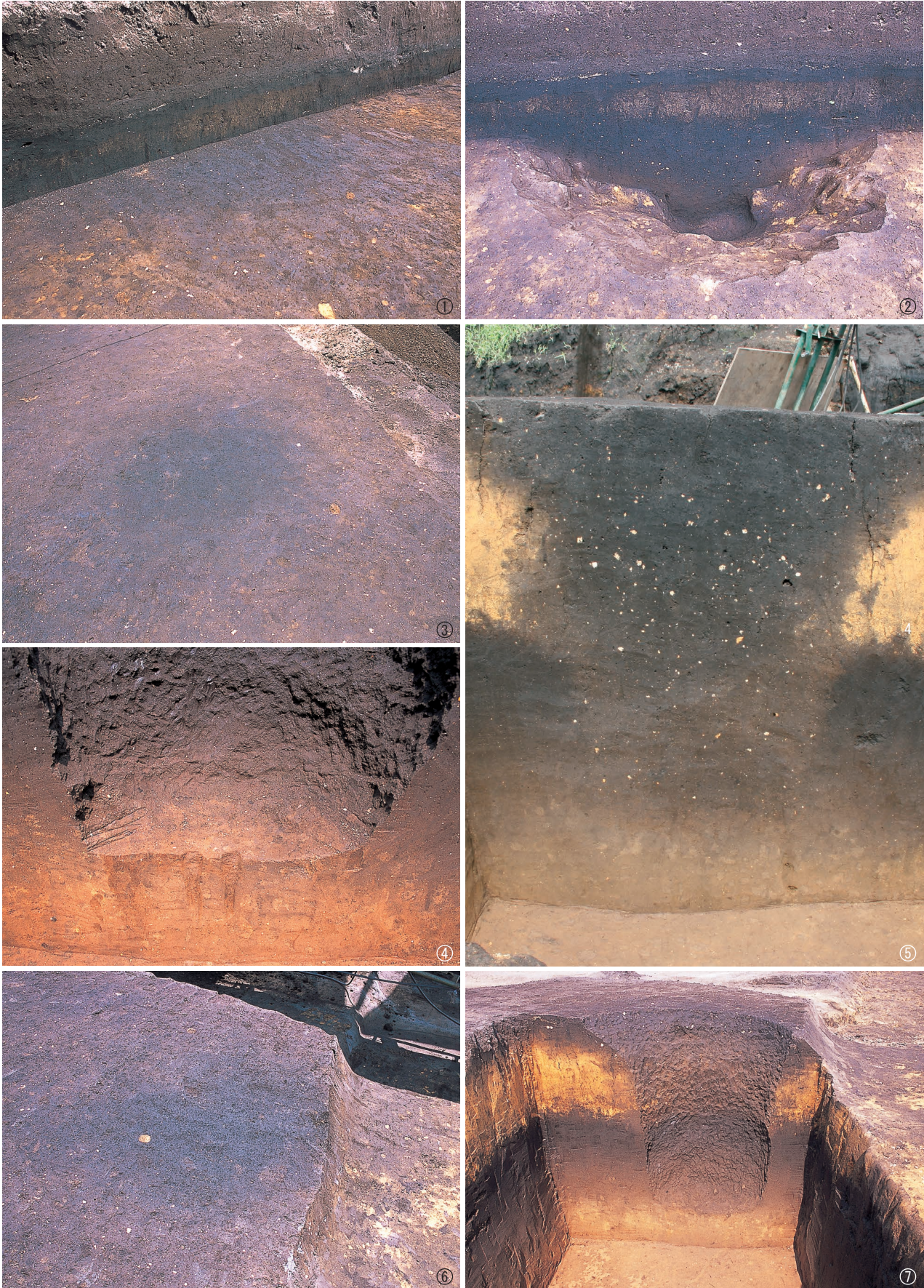


①・②調査風景 ③Ⅱ層上面遺物出土状況 ④旧石器時代(X層)遺物出土状況 ⑤集石遺構検出状況  
 ⑥土坑1号半掘 ⑦土坑2号 ⑧土坑3号~5号(右上3号, 左上4号, 下5号)

図版2 縄文時代早期の土坑

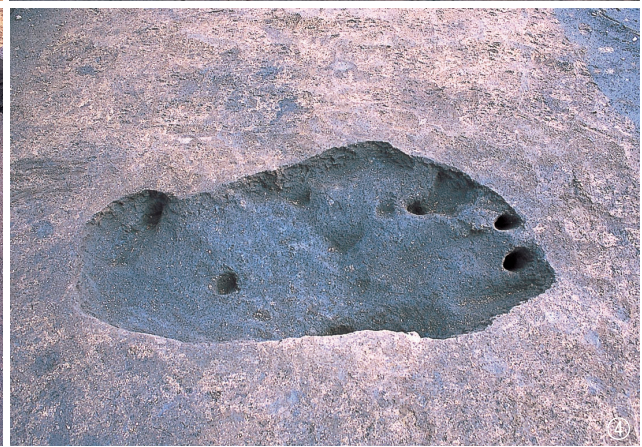


①土坑3号 ②土坑4号 ③土坑5号 ④土坑6号 ⑤土坑7号 ⑥土坑8号 ⑦土坑9号  
⑧土坑10号



①土坑11号検出    ②土坑11号調査区内完掘    ③落とし穴1号検出    ④落とし穴1号床面逆茂木痕  
 ⑤落とし穴1号半裁    ⑥落とし穴2号検出    ⑦落とし穴2号完掘

図版4 縄文時代中期の落とし穴・時期不明遺構



①落とし穴3号埋土3/4掘  
⑥溝状遺構2号

②落とし穴3号完掘

③土坑12号

④土坑13号

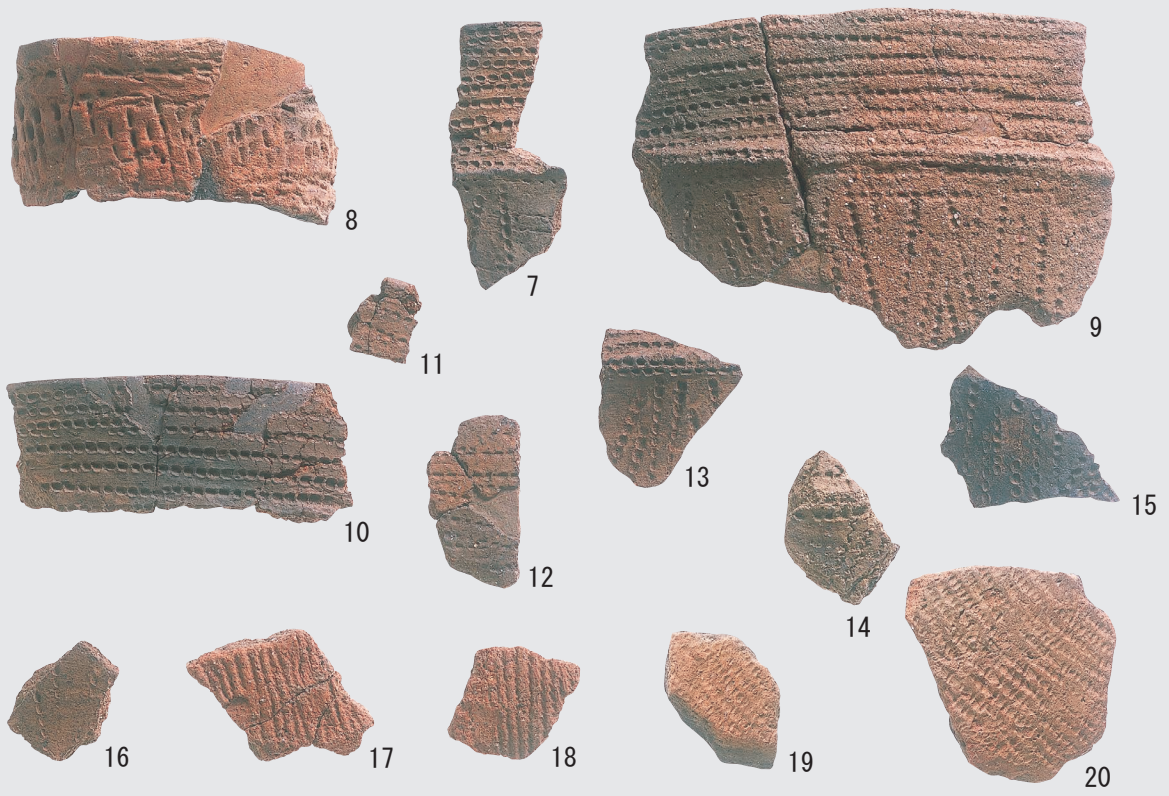
⑤硬化面



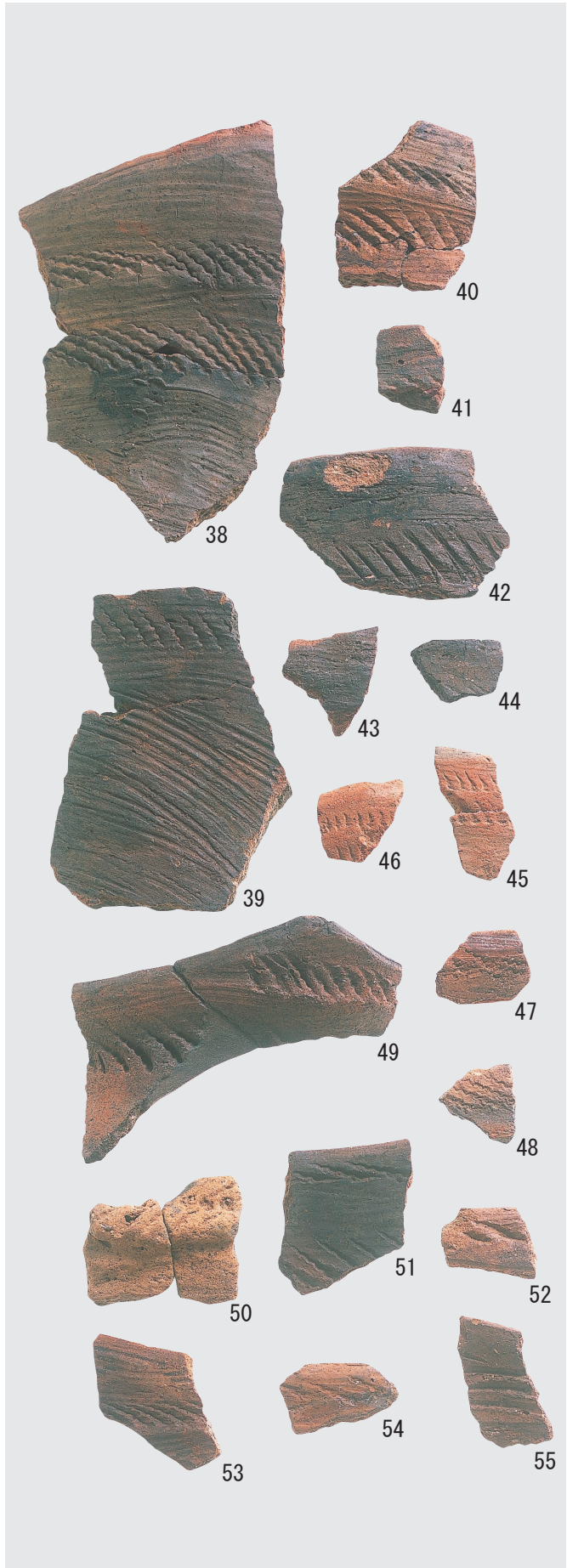


①検出 ②埋土土層B軸断面 ③遺物集中部分 ④完掘 ⑤検出 ⑥埋土土層D層断面 ⑦完掘  
 ※①～④は平成25年度, ⑤～⑦は平成30年度調査区

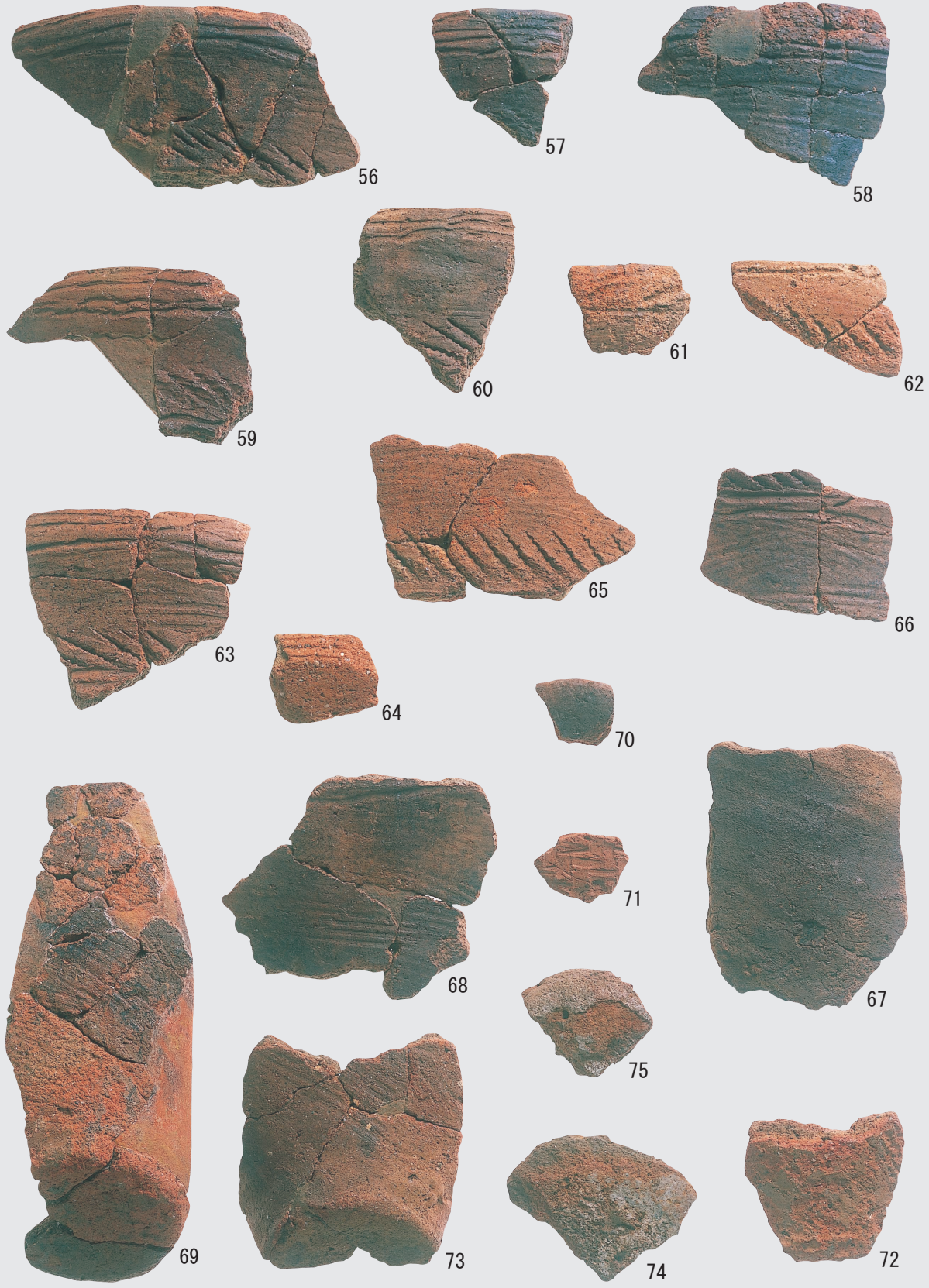
図版6 旧石器時代の石器・縄文時代早期の土器

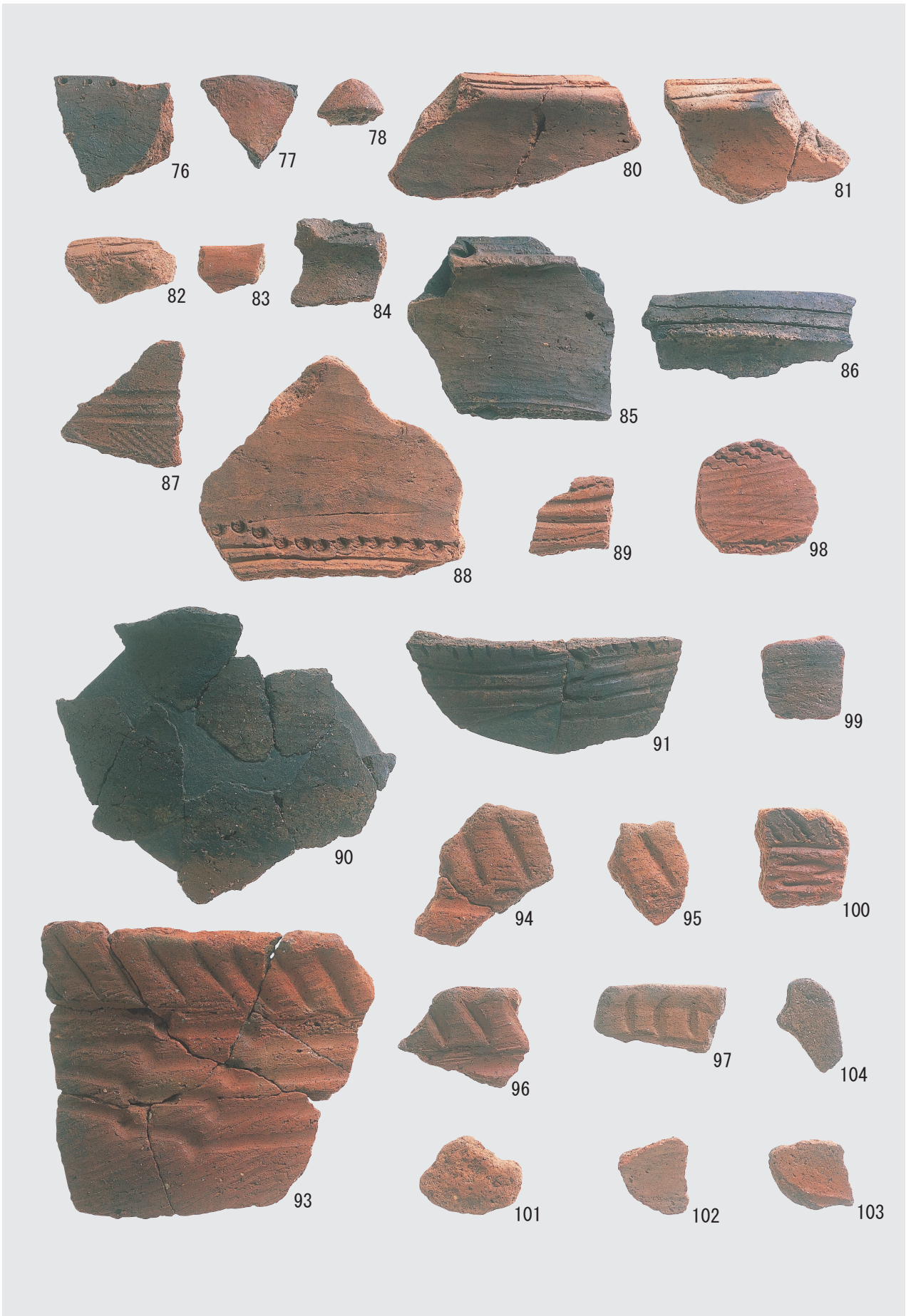


図版7 縄文時代後期の溝状遺構1号出土土器(1)

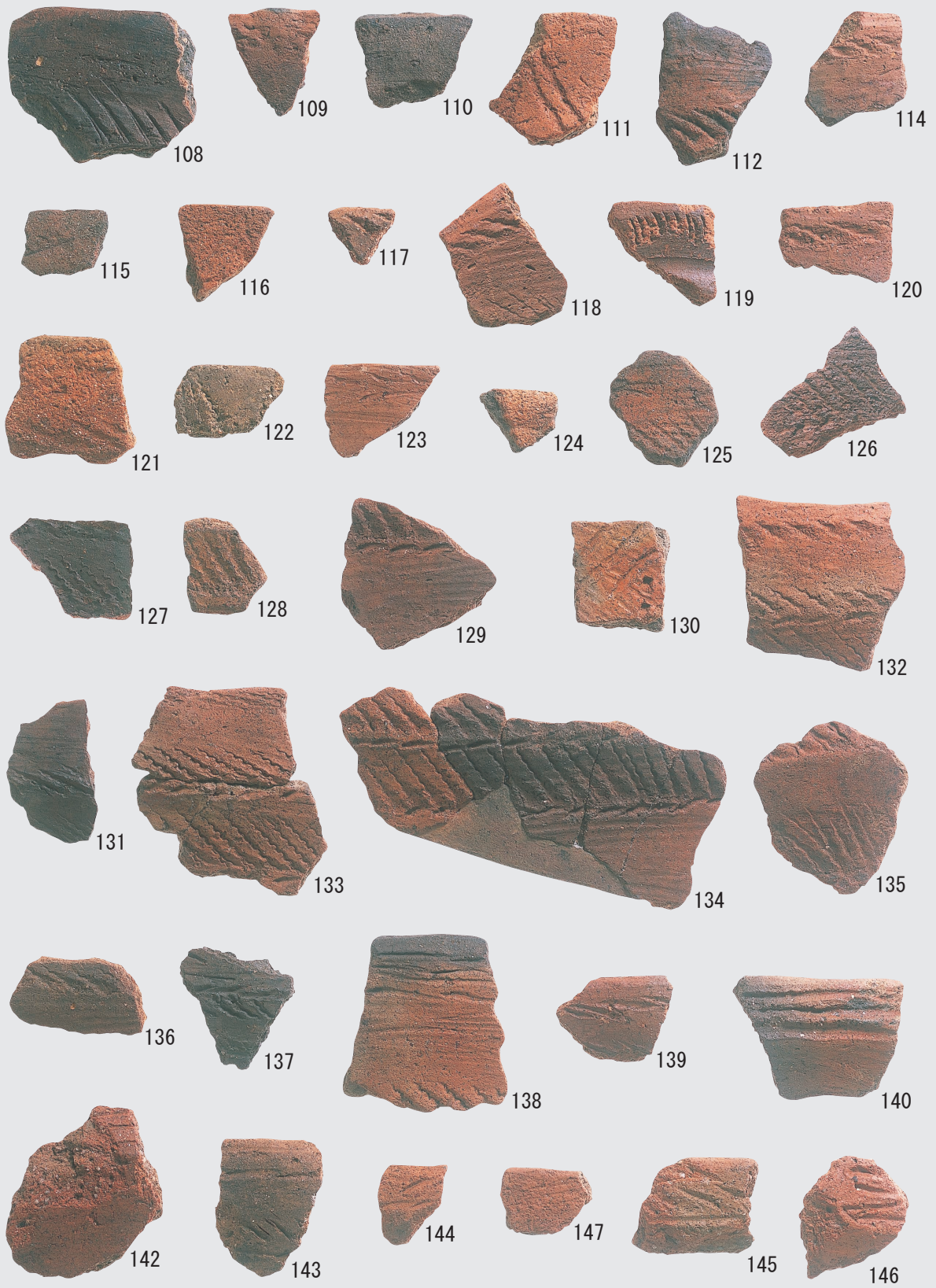


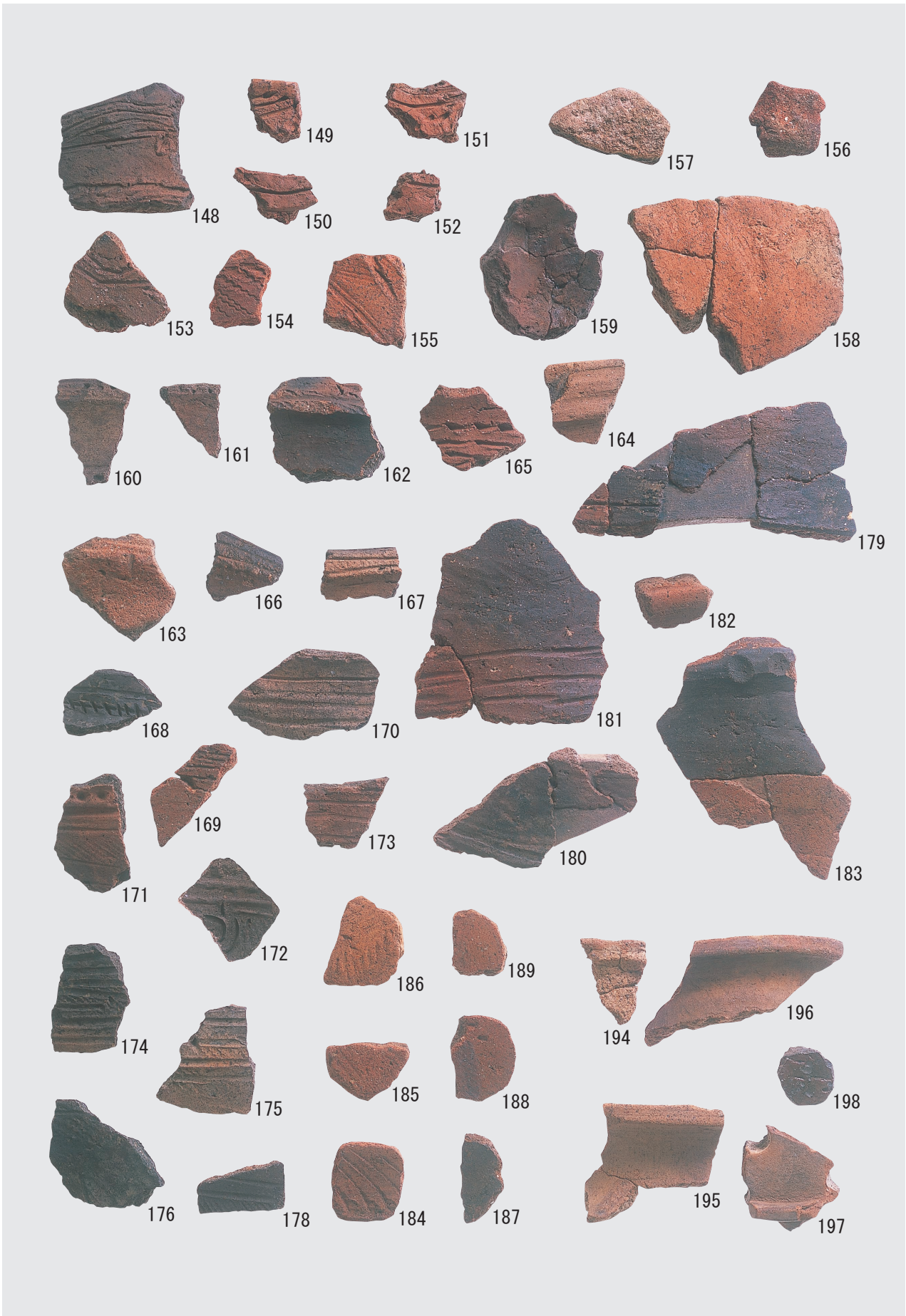
図版 8 縄文時代後期の溝状遺構1号出土土器(2)



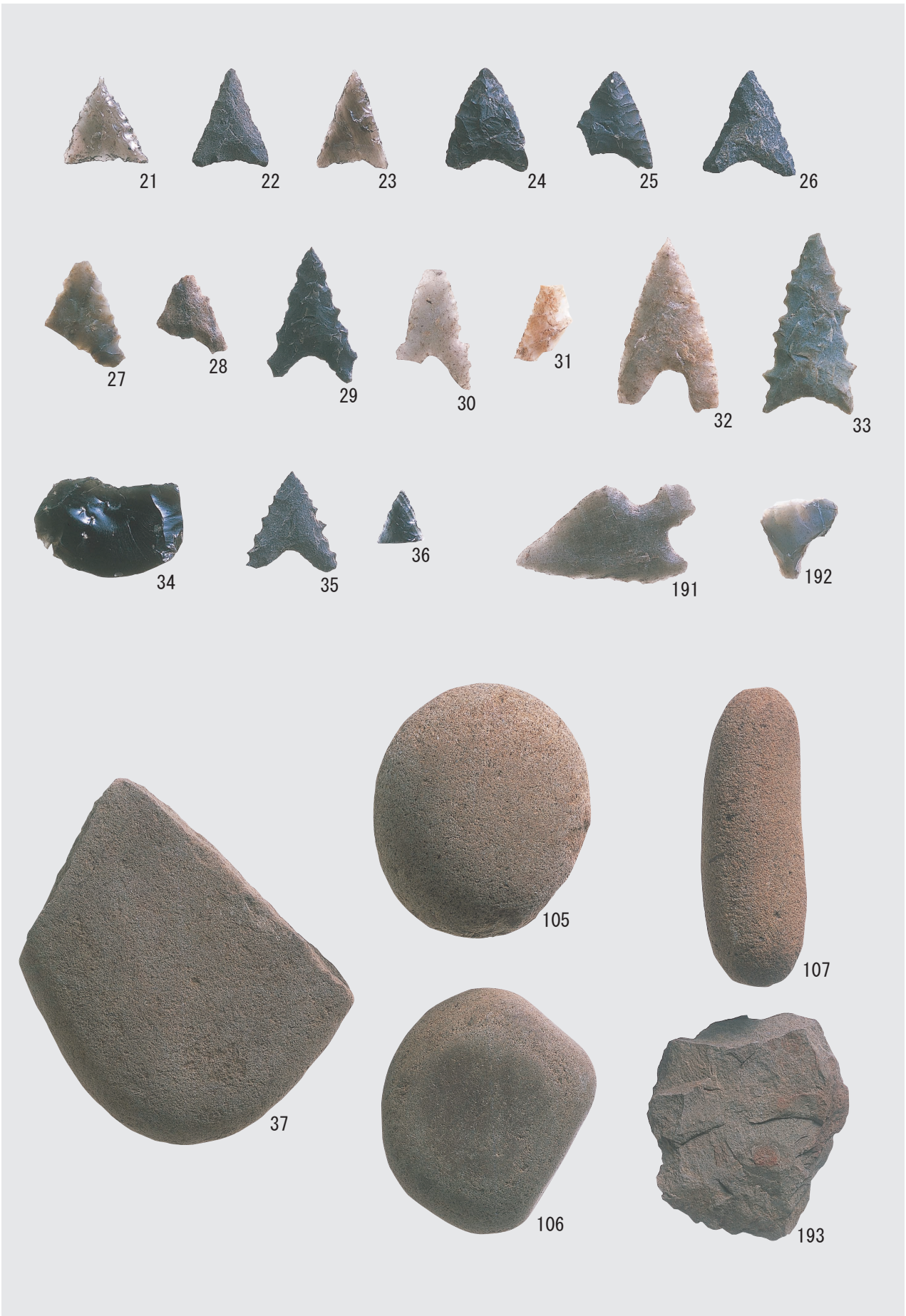


図版10 縄文時代後期の土器





図版12  
縄文時代の石器





鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（206）  
主要地方道志布志福山線（志布志道路）改築事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

# 見 帰 遺 跡

発行年月 2021年1月  
編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
〒899-4318  
鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号  
TEL 0995-48-5811  
印刷所 日進印刷株式会社  
〒892-0846 鹿児島県鹿児島市加治屋町16番20号  
TEL 099-222-8291 FAX 099-223-2715



鹿児島県